女鑑

第拾七年第参號





最新流行
呉服、太物、洋服
小間物、雑貨類
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

女鑑

第十七年第三號目次

論說

家事

社會



才媛百佳選



其の一　北條子爵令孃　穎子君

才媛百佳選



其の二

沖男爵令嬢

修子君

才媛百佳選



其の三

金子男爵令嬢

幾與子君

才媛百佳選



其の四　相浦男爵令嬢　瑳枝子君

大日本淑女學會

會員募集
規則書進呈す

第四回新學期開始

本會の講義錄
▲大阪三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

●三月三十一日限り入會金全免す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

●東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）
大日本淑女學會

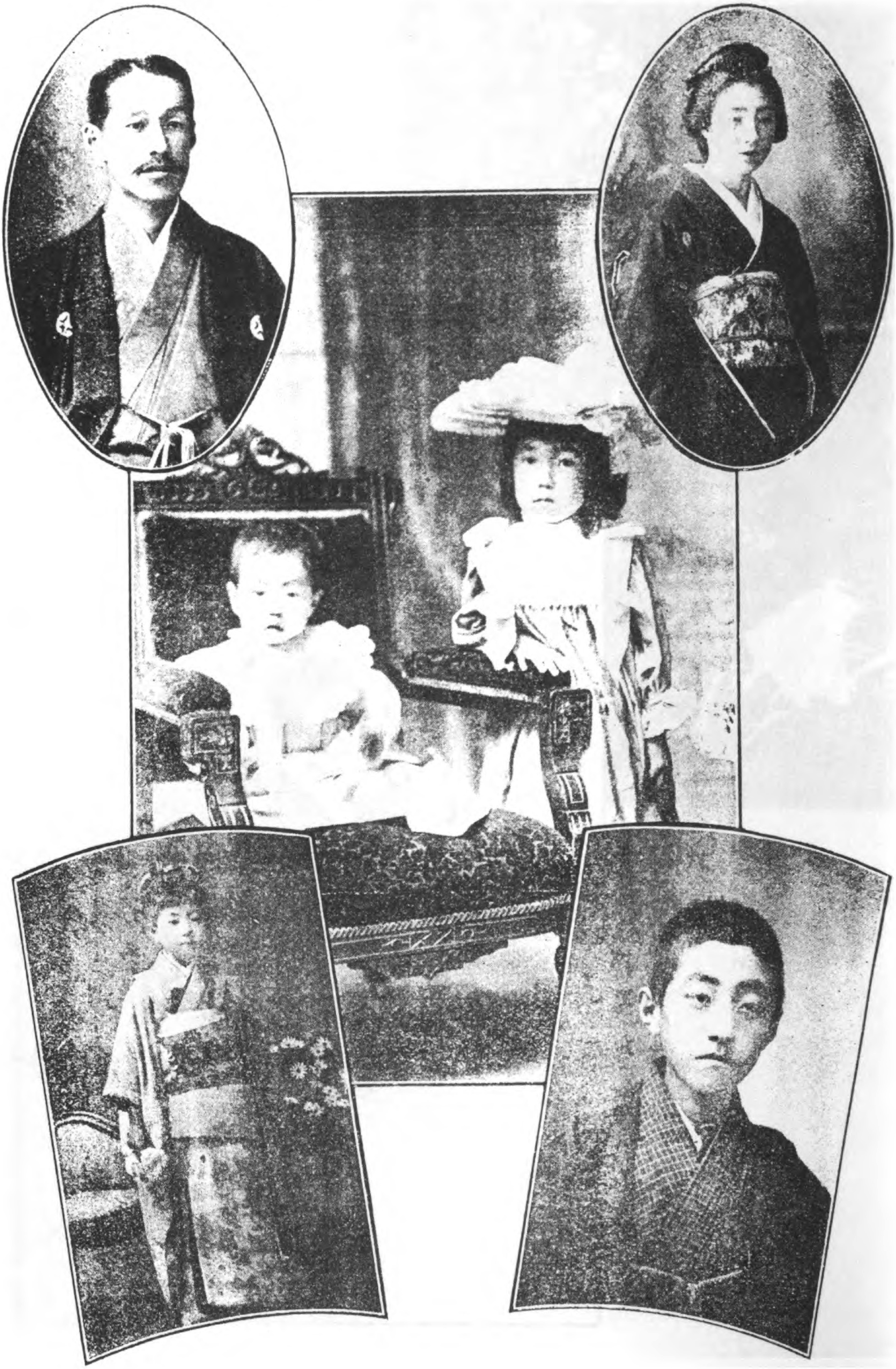
岩倉子爵の家庭







入江子爵の家庭



梅の姿

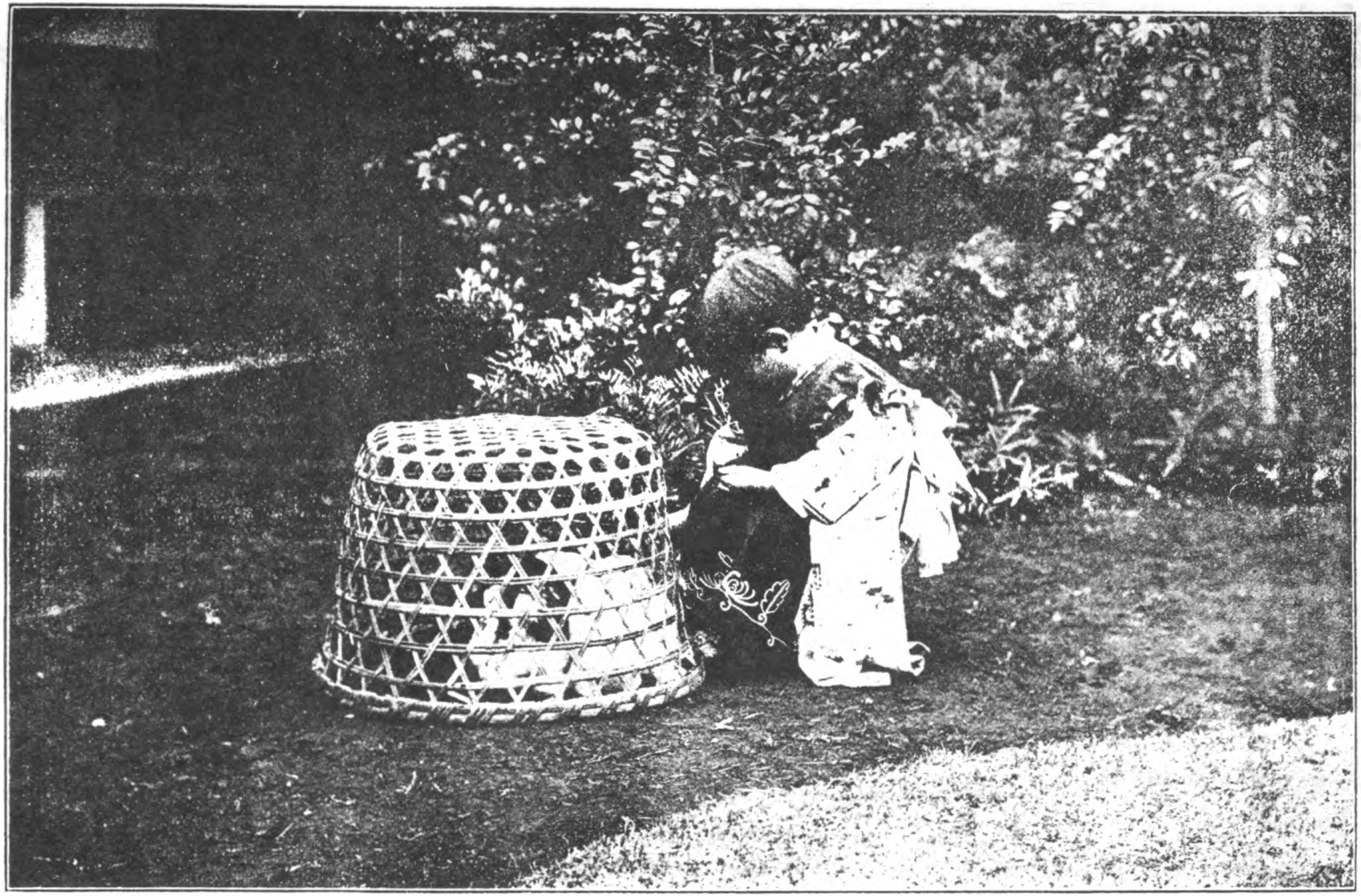




子爵　青山幸宜君撮影

長閑なる庭園

幼兒百態（十）



井伊直方君撮影

○御婦人方のよみもの○

太田梅子著 ▲新刊▼ 挿畫二十八圖

女子技藝 果菜製作法

和裝美製全一册
正價金四十五錢
▲郵稅金四錢

本書は造花術と並んで近來女子技藝界を風靡せる造果術を精密なる數十の挿畫と平易なる文字とを以て着手の順序用語の説明器具材料の使用法色彩の配合仕上げの順序方法等に至るまで少しも洩さず丁寧詳密に記述し恰もその人に就きてこの技を習熟するに異らざれば最も各種技藝學校の參考用に適せると共に獨習者の爲に斯術界唯一の良指導となるべし

女子高等師範學校講師 森本義子著

○家庭編物全書（再版）

和裝全一册 正價金八十錢 ▲郵稅八錢

英國醫學博士チエバセー著 巖谷小波序 三樹女史譯

○新婦の心得（再版）

和裝全一册 正價金五十錢 ▲郵稅六錢

宇野彌太郎 渡邊鎌吉 共著

○家庭西洋料理（再版）

洋裝全一册 正價金九十五錢 ▲郵稅八錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉 赤堀菊子 共著

○家庭十二ケ月料理法（四版）

和裝全二册 各正價金五十錢 各郵稅金八錢

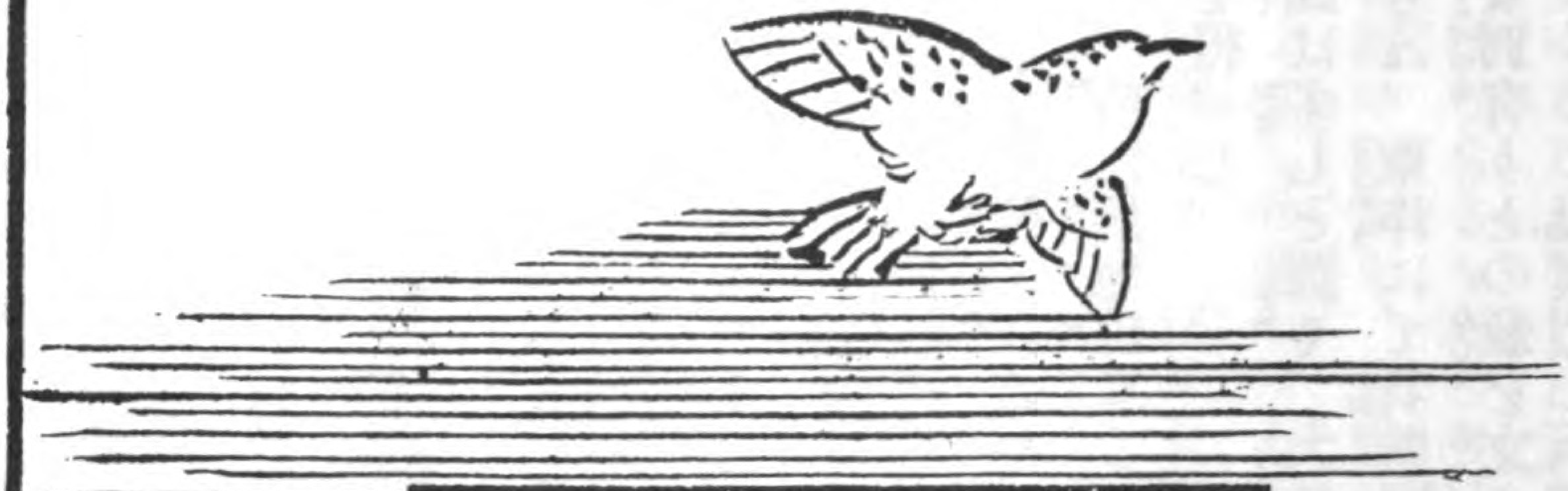
圖書總目錄郵券二錢送附あれば呈す

▲發行所 東京市日本橋區通一丁目 大倉書店 振替貯金二三八番 電話本局四一四番▲

本年四月入學セシムベキ當校私費、地理、歴史、國語、体操ノ外專修科生各三十名及保育實習科生八名ヲ募集す志願者ハ來三月十五日マデニ當校到達ノ日取ヲ以テ願書ニ履歴書戸籍抄本ヲ添ヘテ差出スベシ尚詳細ハ一月二十一二三日ノ官報又ハ當校ニ就キ承知スベシ

明治四十年一月

女子高等師範學校



女鑑

第十七年第三號

春の空

東風吹野邊に來見れば　里のうなゐが麥ぶえを
雲雀のうたに和しつゝ　ならす節こそ面白けれ
山路の春を尋め來れば　賤がたき木もひと枝の
花に匂ひて雲に入りし　色見するこそ嬉しけれ
春の海邊を見わたせば　浪の花さへにほふまで
かすみの中をゆく鳥か　しら帆の影も長閑なれ
さてもその花其かすみ　自然らなる繪となりて
あかぬいろさへ姿にて　春のこゝろは空ならん

《中川愛氷作》





論說

日本婦人の好位置

風俗の上に於て

男爵　細川潤次郎

我日本の女子は、女子の爲には好き地位、即、幸福なる地位に在る者なり、然れども他國の女子と比較して、之を論ぜざるときは、其の好地位に在ることは分らぬ者なり、古人の詩に廬山の眞面目を識らざるは身此山中に在るに緣ると曰へる如く、其範圍中に在て分らぬことも、引離れて之を見るとき、始て其の眞面目を知ることを得べし、日本の女子か如何なる地位に在る者なるやを知らんと欲せば、先づ他國の女子が如何なる地位に在るやを一考せざるべからず、此の如くにして他國の女子の地位如何を察し、其好位地なるか、將た惡地位なるかを見て、更に自己の地位と比較して後、始て自己の地位の孰れに在るかを知ることを得べし、

他國は多しと雖も、大抵東洋の或國と、歐米諸國とに於ける女子の地位を觀察せば、思半に過ぐるものあらん、東洋にて我隣國支那の如きは、大國にして古來より文物制度の備はれりと稱する所なり、其夙に男女別有りとの敎を立てたるは、萬物の靈をして禽獸を離れしむる所以なるべくして、間然することなかるべきも、此格言に拘泥して之を變通することを知らず、人類相交るの道を壅塞し、巾幗の人は罪囚の

獄舍中に幽閉せらるゝ者に異ならず、夫の親しき友人と雖も、會見することなく、偶々其面を見るも、言語を交ゆることなしと云ふ、加ふるに未だ纏足の惡風ありて、女子の足をして發達せしめず、行く時は婢の爲に扶けらるゝ程の事なれば、幽閉に便にして、外出には不便なり、此等の弊は縷述に暇あらず、其隣國の朝鮮の如きも、支那の風に倣ひて、其幽閉の狀は、同一なりと聞けり、此の如き境遇に在る所の女子は、固より私塾及學校の教育を受くるに由なく、多くは人言を聞き、世間の事物を觀察して、以て知識を廣むるに由なく、終身衣食と育兒とに勞するのみにして、復他事あることを知らず、之を女子の好地位とせんか、將た惡地位とせんか、

歐米諸國の女子は、之に反して、其地位たる頗る男子に近似せり、其教育を受けて知識技能の發達せる事は、大學に入る者官吏となる者あるを見て推て知るへし、女子天然の知能を發達せしむることに付ては殆と遺恨なかるべし、而して其交際に至ては、女子の重に擔當するが如き風習ありて、人を訪問するが如き、訪問せらるゝ時の如き、宴會の如き、必之に與からざるを得ず、之か爲に何つも衣を整へ、髮を梳り身分に相當なる裝飾をなさゞるべからず、之が爲に時間を消費せざるべからず、世界各國女子の本分として、家政を掌り、或は之を助け、又育兒の勞を親らせざるべからず、此の本分たる繁雜の務ありながら、殆ど男子と同く交際に從事することは、頗る迷惑の感なきに非ずと雖も、一般の風習なるを以て、復之を如何ともすること能はず、此の如きは表面より之を見るときは、無上なる好地位に在るものゝ如しと雖も其裏面に至ては、必しも幸福なる者に非ず、

我日本の女子は、支那朝鮮の如く、幽閉せられたる者に非ず、而して又歐米諸國の如く、男子に讓らざる交際をなす者に非ず、其の地位は恰も兩者の中間に在る者の如し、尤此風習は古今に由り、多少の變遷

なきに非ず、明治中興前に在ては、女子交際の範圍稍狹隘にして、中等社會以上の女子の訪問せらるゝは親戚の間に過ぎず、而して年賀慶吊の外は漫に往來することなかりしが、近來に至ては、往來頻繁となり用辨のため外出するも、人之を怪まず、然れども女子の交際は、男子に比すれば猶頗る簡便にして、之が爲に家政育兒等本分の務に妨あるに至らず、此れ實に女子の爲に好地位に在る者と謂はざるを得ず、幸福なる地位に在る者と謂はざるを得ず、余は徒に日本女子の爲に、其の好地位に在るを賀する者に非ず此の如き地位を以て一般女子の性質に適當なる地位なりと信ずる者なり、之と同時に日本女子の或は卑屈に過ぎ、或は活潑に過ぎて、本來の美風を失はざらんことを希望する者なり、抑柔順は女子に在て缺くべからざる美徳なりと雖も、卑屈に過ぐるときは内助の功を全くすること能はず、將又天然の知能を臨機に應用することは、當然の事なれども、活潑に過ぐるときは、一家の協和を失ふに至るべし、支那朝鮮の女子の地位は、女子をして卑屈に陷らしむる者なり、歐米諸國の女子の地位は、女子をして活潑に過ぐるの弊に陷らしむる者なり、我國は幸にして女子を適當の地位に置きたり、本來の美風を具へたり、此地位を離るゝこと勿れ、此美風を失ふこと勿れ、

道徳の上に於て

婦人は道徳の維持者なり、抑人には道徳なかるべからざる者とするときは、男子も人なり、婦人も亦人なり、男子に道徳なかるべからずとするときは、婦人にも又道徳なかるべからず、男子が道徳を維持すべき者とすれば、婦人も又道徳を維持すべき者とせざることを得ず、此點に付ては事理明瞭にして、別に詳論を須ひざることとなるべし、只余が今玆に一言せんと欲する所の者は、婦人は其の性質として道徳を維持するに男子よりも、便利なる地位に在る者たることを辨明するに在り、男子の如きは其の事業の性質に由

り、種々なる困難の衝に當れるを以て、常に正當の道に由ることを得ざること往々之あり、譬へば役人となりては政略上の運動、殊に外交政略の如き、素より臨機の變通を要する者なり、又軍略などの如きは、謂ゆる兵は詭道なりと曰へる如く、頗る運用の妙を要する者なれば、常に正當の道に拘泥して、一定の主義を執ることを得ざるべく、又商人などに在ても、信義を守るべきは勿論なれども、取引上の方略に在ては、多少の權道なかるべからず、此等の事業に對する毎には、道德上の本心に負くことなきに非ざるべし婦人は大抵此の如き事業を執ることなく、間接には此等の事に心を勞するも、直接には其爲に力を用ひざるを常とすること故、自己の本心に負くことを知りながら、强て之を爲さゞるを得ざるが如き場合は少かるべく、利害の爭に至つても、直接に激動せられて精神を喪失するが如き場合も少かるべし、從て婦人は道德上の本心をして、發達せしむることを得る場合に富みて、道德を維持するに便利なる地位に在りと謂ふことを得べし、將又婦人一般の風俗としても、一個人の性質としても、行儀を愼み、服裝にも意を用ひらるゝなり、行儀の宜しき服裝の美なるなど、素より外形の事なれども、多くは其中に在るもの、即ち心の檢束も又之に伴ふ者なるべし、果して内心の檢束と、外形の修飾と、表裏相應ずるものとするときは、婦人は禮を行ふに適當したるものと謂ふべし、この性質を以て善く之を涵養し、克巳復禮の地位に至ることを得ば、道德上の能事畢れりと謂ふべし、上に言ふ所の者は、予が經驗上判斷を下せるものなり、或は曰はん、婦人果して此言の如く、道德を維持するに便利なる性質を天然に具有する者なりとするときは、世に不正の業務を營む婦人多きは何ぞや、余は婦人に待つに道德の維持者を以てせんとするは婦人に對し諛言を呈するに非ず、不正の業務を營む如き除外例はもとより、婦人をして各自に道德の維持者たることを忘れず、益天然の美質を涵養して、男子の畏友たらしめんと欲するに外ならず、

生活の改良

文學士　三輪田元道

國も人も歩一歩日一日と進化し、改良するにあらざれば、文明國の人として、生活すること難かるべし、されど惰性と因襲とに由りて、改良することは、決して易からず、否改良と妄信して、善き習慣を廢し、反りて退歩することなしとせず、これ亦恐れずして可ならんや、故に家庭を主るべき責任ある女子の先づ、理想日を定めんことを望む、

人は生ながら、聖賢にあらず、學びてこの境に入るを得るなり、亦佛も元は凡夫なり、凡夫も修養せば遂に佛の域に達するを得べし、されば家庭の各員が、人格を高尚にせんとなれば、月に幾回かの理想日を定めその日は、身心共に清淨にして、理想的行動をなすべし、斯くて、修練の功を積み、徐々として、一年三百六十五日間、理想的生活を營むを得ば、始めて完全なる人格の人となるを得るらん、

古來、朔、十五日に、精進を行ふとか、忌日に殺生を禁ずるとか、精神修養の工夫ありしかど、今日は方便や迷信を以て、滿足すべき時代にあらず、故に各人は絶對的に一種高尚なる理想を作り、日を刻してこれを實現せんことを勸むるこそ、道を行ふ所以なれ、

名あり、財ある中等以上の家庭に於ては、奢侈と淫逸の罪を侵し易し、而れども、人は或點まで、克己的生活を營むを以て、精神修養の一端とするを得ん、わが國に、今日は土曜日とか、日曜日とかは、家庭の理想を行ふべき適當の日ならんに、實際はこの兩日とも不道德の日となりつゝあり、如何となれば、同日は飲食に飽き、邪行を遂ぐるもの多ければなり、由來日曜日の如きは、宗教家のみの修養日とするに止めず、國民一般の理想日となし、少くとも家庭團欒の機會日とするは、最も良からん、

亦、中流以上の家庭にあるものは、婢僕を犬馬の如く視て、同情なきが常なり、古句に、

　雪降りや、われも人の子、樽ひろひ、

と、實に人は身をつみて、人の痛さを知るを要す、さればせめては、理想日なりと、自らわが手足を勞して、他人を苦役せざるやう覺悟すべし、これ亦修養の一ならんか、

次は、衣服よりも、食物に注意せんことを望む、

世に所謂着倒れも食倒れも、共に識者の耻る所ならんも、衣服の目的は寒さを防ぐに過ぎざれば、徒らに外容を飾らんとするは、他人の目を憚るにあらざるか、されど食は身命を養ふものなれば、過分の奢侈に斷然禁ずべけれども、必要なる營養分は、是非とも吸收せざるべからず、然るに普通は食を減じても、衣に心を用ゐるは、處世法上止むを得ざる所なきにしもあらずといへども、本末を顚倒するものと言はざるべからず、その次は、兒童の居室に注意せられんことを望む、

抑も、兒童は過去の分身にして、將來の自個なり、さればこれを養育するは親の義務なり、從つて親として子を愛せざるものなけれども、普通は子を暴君の如く考へ、内に居らば騷がしと叱り、外に出づれば危いと制し、彼等をして進退これ谷まらしむるにあらずや、偶彼等に一室を與ふる家庭あるも、多くは光線の射入惡しく、空氣の流通宜しからざる、殆ど不用の室を與ふるが如し、されど道理上より言はゞ、未外界に對して、抵抗力弱き彼等には、最も良き室と、最も良き食物を與へざるべからず、これと同時に、美なる衣服、奢侈的行動は嚴禁すべきなり、

その次は、食堂をして、快感を與ふるやうせんことを望む、

凡そ、家庭團欒の中心は、多く、食堂に於ける食卓にあり、されば一家の主婦たるものは、食堂を清潔

にし、花の一枝も茲に飾り、おのづから、これに臨まば、快感を與ふるやうせざるべからず、然るに、食卓に向つて兒童を叱責する父母あり、蓬髪垢面にして、食卓に坐する主婦あり、誠に思はざることの甚しきものなり、如何となれば、全日營苦せし家族が、折角此世ながらの樂土と恃みて、集る所は食卓なれば、或は、四方山の罪なき話に憂を忘れ、或は樂しき團欒の光景に勇を養ふに足らしむるこそ、敎育ある女子の任務なれ、

尙、その次は天然の恩澤に浴せんことを望む、

人工的の美に醉ふものは、低き趣味の人なり、これに反して、天然的の美に親むものは、高き趣味の人なり、さればその分限に應じて、相當の珍器重寶を陳列して、これを樂むは、妨なしといへども、願くは上下共に、庭園に花木を植ゆるとか、菓實を作るとかして、朝には塵を拂ひ、夕には水を注ぎ、以て無上の樂を求めんことこそ良けれ、これ美的感情の養成となるのみならず、身體を健全にする法なり、

以上は、家庭改良の例を、二三述べたるに過ぎざれども、敎育ある女子の忽にすべからざる點ならん、概ね改良とし言へば、光料を電氣にするとか、燃料をガスにするとか、或は別莊を作るとかの類なれどもこれ等は專ら物質的、若しくは奢侈的欲望の增長のみ、決して、眞の改良と言ふべからず、否、斯る改良は、誰にも出來得るものなれば、讀者は生活をして合理的、而も有德的に進歩せしめんことを祈る、

女子の最大成功

文學士　棚橋一郎

男子と謂はず、女子と謂はず、人生の究極目的が人の人たる道を修めて、眞の人間一人となるに在るは

何人も異論あるべきことならねば、學者にもせよ、政治家にもせよ、實業家にもせよ、各々其道に成功し若くは成功を志すが如きは、即其究極目的に達せんとする段階に外ならずと見るべきであつて、何れの方面に成功するも、一歩一歩道の運用を助け弘むる所以、人生の極致に近づく所以たるに相違なく、此點より論じ來れば、女子も男子も各々其の好む所に從ひて、其目的を定め是に成功すれば、其にて人一人の眞價を發揮し、俯仰天地に愧ぢざるべき事ながら、天が人に男女の性情を分てる所以は、未だ必ずしも種族保存の爲のみにはあらず、此兩性の分業に由り、益々道の運用を弘め、人生極致の速達を期せんとする者にして、極めて小數の異例を除去れば、生理上よりも、嗜好上よりも、此兩性の間に著しき異同を作れる者あるが如くなれば、余は此點より之を推論して、男女共其究極目的に於て、相異なる所なきも、其段階的目的の成功に於ては、男女大に異同あるべきを斷言せんと欲す、

社會學は明かに分業を速かにする所以にして、人生に缺くべからざる現象なることを說けり、男女の本務に內外の別あるを論證せる者、豈獨り東洋の先哲のみならんや、夫の交際の如き、最も男女兩性に共通なるべき事すら、近事歐米の心ある人士は、已に其の女性の本務に屬すべからざることを痛論し、女性が多く時流に趁ひて、交際場裏に奔走するを厭ひ、無妻主義を主張する者少からずと聞く、我邦今日女流社會の傾向に對し、頂門の一針たらざるなき乎、學者たり、政治家たり、實業家たるは男子に在りては、則ち其天職を屬すと謂ふべしと雖ども、女子に在りては則ち是れ餘力の業のみ、若し夫れ內政を整へ、子女を敎育し、以て人世異日の發達進步に貢献するが如きは、主として女性に望むべく、男性の深く與かり知るべき所にあらず、試に人世百般の事を見よ、其成功の大小は大抵其力の分るゝと否とに比例せるにあらずや、人の智不智相距ること、固より三十里のみにあらずと雖、若し心を專らにし、力を集めて其事に從

は〻、不智者の成功未だ必ずしも智者に超越する所なきにあらず、是れ智者の拙劣なりしにあらず、其力を分つこと多かりしに由るのみ、人の能力には自から其限りあり、常陸山梅ケ谷の如き力士にても之をして泰山を挾みて、北海を越えしむべからず、若し其力を分つこと多ければ、其益々多きに從ひて、益々其微弱を感ずべきは看易きの條理なるに、獨り人間男女の關係に於て、此條理を無視するの觀あるは、怪訝の至りと謂ふべし、今假りに男女兩性をして、其能力に寸分の差違なからしむるも、分業の眞理は明かに其職務を異にすべきを命令せり、世態の單純なるに當りては、彼の下流社會の家庭に於けると一般、分業制を必要とすべき事故なきを以て、男女の間に於ける職務の分擔も、衆人の間に於ける分業と同樣、顯著なる現象を表彰することなきも、世態の複雜なるに伴ひ、中流以上の家庭に於けるが如く、內外公私の事務多端となり、一人の力到底能く全般の事に當り難きことゝなり、分業制の必要を感ずることも亦從て多く、家庭に於ける男女の關係も、自から職務の分擔を必要ならしむるに至る、是を以て、之を觀るに、分業は文明進步の結果にして、又文化發達の原因なる事甚だ明なりと謂ふべく、文化發達上同性間にすら必要なる分業制は行はる、男女異性の間に於ては、別して必要なりと謂はざるべからず、我邦も元は此文明自然の天則に從ひ、男女兩性間に內外分業の制甚だ明確なりしが、止水腐り易きの道理にて、其制を持すること固きに過ぎ、必要あり餘力ある女子にすら、男子と業務を同くすることを拒みたる反動にや、十數年來の趨勢は今や漸く彼に擯斥せられむとする歐米皮相の文化に追隨し、兩性の間に於ける職業を同化せしめむとする傾向を示せり、女子判任官の任用の如き是れ其の最も顯著なる者なり、余は分業の天則より推論して、斯の如き事體の發達が、果して社會文化の進步に貢獻する所あるべきや否を疑はざるを得ず合すれば則ち強く、分てば則ち弱きを以て力の原則となし、餘勢は必らず集中の場合に多く、分裂の場

合に少なしとすべくんば、男性が其の執るべき一方面の事業に專らなると同時に、女性も亦其天職たる方面の事に專一なることは、兩性が互に他の職分を分擔し、自他平等に其力を分つに比し、其功果の多大なるべきは論を待たず、文明化育の進步を計る所以の道、之を措きて他に求むべからざることは、識者を待ちて後に明かなるべきにあらず、彼の下層社會の如き、家政の整理、子女の敎育、皆一擧手一投足の勞を費さば則ち足る、此等の家庭に於て、所謂夫婦共働法（余は中等以上の家庭に於ける、夫の外事に當り、婦の內政を掌る狀體も、亦夫婦共働の語に適中せるを信ず、故に冠して所謂と言へり）の行はるゝは、寧ろ至當の事のみ、若し夫れ中流以上の家庭に至りては、細君たる者能く其家政を料理し、子女の敎育を怠らず、良人をして專ら閫外の任に當り、敢て內顧の憂なからしめば、其功果の延及する所、之を所謂夫婦共働に對比せば、固より同日の論にあらざるを見む、而して社會文化の進步、亦之に因りて益々其光輝を發揚するを得むか、女子に學者たり、政治家たり、實業家たり、乃至男子と同一の職務に從事することを得べき者たるを望むが如きは、男子に家政の整理者たるを望むと一般、世の文化を阻碍し、人生を蠧毒する所以にして、惟はざるの甚しき者と謂はざるべからず、

憶ふに近來女子の風潮が、男子職務の圈內に闖入して、其職務を分たむとするの傾向を生じたるは、世の輕薄者流が、元來頗る虛榮心に富める女性に對し、獨立自營の道の必らず講せざるべからざるを勸奬したると、女性自身が何事に於ても敢て男性に下らざるべきを誤信したるとに由るべしと雖ども、是れ甚しき誤解にして、獨立自營と謂ふは必ずしも、獨身にて世に立つの謂にあらず、人の妻として家政の整理鹽梅、子女の鞠育敎養、苟も女性の本分を全くし、男性をして一點容喙の途なからしむるも、亦之を獨立自營と稱するを得べく、男性と女性の特長には、互に優劣あり、未だ其の何れを高しとなし、何れを卑しと

するやを知らざることとなるに、女性が遂に之を覺らざるは過なり、女性にして若し速に此不覺の迷夢を破り、心を專らにして、其本分を盡さむことに力めば、余は其の事功を收むること、必らず今日に倍し、文化の發達に貢献する所、蓋し多大にして、其得果蓋し意想の外に在るべく、女子の最大成功實に其間に在るべきを信ず、

然りと雖ども、讀者幸に余の說を誤解して、絕對に女性の學者たり、政治家たり、實業家たり、乃至男性の職分を侵すことを沮拒する者となす勿れ、女性にして其本分を盡すに必要なる知識を獲得し、之を實際に施して、男性に充分なる內助を與へ、而も猶ほ餘力の他に用うべき者あらば、之を利用して如何なる事を爲すも、其は敢て反對の意を表すべきにあらず、余は寧ろ之を歡迎して、成功中の成功なりと謂はむと欲すれど、斯る場合に於てすら、其餘力は成るべく之を學問的の事に利用し、男性事業の妨碍とならざる樣の注意を致さむことを望む、是れ蓋し餘力の事業は、全力を傾注したる事業と相比すべき者にあらず、從ひて之が援助となるよりも、障碍となる場合多かるべしと想察せらるればなり、之を要するに女性の敎育は、內政の整理子女の敎育を爲すに適當なる部分に止むべき者にして、其以上の學問は、此二者を盡し得たる餘力に待つべし、女子の最大成功は、實に此二者を完成するに在りと云ふ者、是れ余が數年來の持論なり、此文則ち意至り筆至らざるの憾あるは、自覺する所なりと雖、讀む者不文の故を以て、其意を害するなく、敢て高敎を吝むなくんば幸甚、

次號の本欄には小川博士、菊地博士、金井博士の婦人問題に關する卓說を掲載すべし

女子の寄宿舍に就て

文部大臣秘書官　赤司鷹一郎

教育の大切な事は、今更喋々するまでも無い、然し中に就いて、女子の寄宿舍に關するもの丶如きは、現下の注目すべき問題ではあるまいか、

つら〳〵女學生の生活狀態を視るに、大約三類に分れて居る、第一は、自宅や近親の家庭に起居するもの、第二は、下宿屋に止宿し居るもの、第三は、寄宿舍に收容されて居るもの、是である、然して、自宅より通學するものは別として、近親とか友人とか稱する者の中には、往々如何はしい家庭も有るとの事であるから、可成是の寄宿舍に入れて、しつかりした舍監監督の許に起居させるが宜しいが、元來寄宿舍なる者は、多數の學生を、小數の舍監が保護監督せねばならぬ故、勢ひ規則とか、規約とかを設け、同一模型に當て嵌めて行かねばならぬ、であるから、其間自づと、個性を十分發展助長させる事は出來ないし、又喧閙猥雜に流れ易いから、沈思反省の機を缺ぐ等の批難も聽えるが、是等は其局に當るものは、可成其根を苅り、其源を塞いで、弊害の起らぬ樣にするが可い、

今寄宿舍の利益を數へると、段々有る、第一に規律的習慣を養ふ事は出來る、從つて身體も健康になる第二に勉學や交際上の利もある、第三に利用の仕樣に依ては、性格の鍛錬も出來る、

如上の三大利益ある寄宿舍に對して、世人はどうかと云ふに、餘りに重きを置かない、加之職員其人でさへ、漸もすれば教授を第一の樣に考へ、兎角寄宿舍を後廻にするの風がある樣である、是等は斯道の爲、欣ばしい事であらうか、以下順を逐うて、二三の考へついた節々を述べやう、

第一、欣んで舍監たれ、是までは、舍監其人に對して、他の職員は餘りに冷淡である、剰へ貧乏籤にで

も當つたかの如く、冷評する者もある、當人もまた不心得である、左も難有迷惑さうに、ブツ〳〵不平を云ふ者もあるやに聽いて居る、又校長たるものは、舍監をば可成獨身の若い敎師に推し當て、かの夫妻共棲の溫みとか、母子の愛とかに就いては、何等の經驗を有せぬものを、其椅子に据える風がある、是等は、かへす〳〵も留意戒心すべき事で、出來るなら、斯やうな重任などは、思慮ある分別ある、然も家庭の趣味を十分に嚙碎いて居るものに任せるが可い、又任された當人も、欣び勇んで此重任に當り、他人から尊敬される樣に努めてもらひたい、

第二、個性を觀察せよ、寄宿舍の缺點は、兎角多數のものを取扱ふから、多少の毛色の變つて居るにも拘らず、十把一束的に處理する事が多い、從つて個性の如きは、稍無視されて居るかの如く見える、故に舍監たるものは、敎授のかたはら、或は運動場に自修室に、或は食堂に理髮室に、務めて各生と接近し、以て其個性を觀察し、然して後、夫に適應なる藥を盛らねばならぬ、即ち硬には軟を交へ、柔には剛を加へて、其調理鹽梅を計るべきである、又多數の中には、貧窶に泣いて居るものもあらうし。不遇を歎いて居るものもあらう、其他世を果敢なむもの、悶えるもの、苦しむもの、悲しむもの、色々樣々で、決して一樣ではあるまい、舍監たる者は、能く以上の趣旨を嚙分け、其誤解や迷想を解いて、之に生氣と安心とを與ふべきである、

第三、須らく家族的たる可し、從來の寄宿舍は、放任主義に流れた事もある、又師範や中學の如きは、軍隊的に傾いた事もある、されど近來は、追々家族的に變つて行くことは、げに欣ばしい現象である、然かし如何に家族的と云つても、肉親的の關係を缺いて居るため、眞の家庭の如き、細かい溫かい愛情を求め得る事は餘程六ケしからう、が、出來るだけ是等美風を發展助長させて、夫の粗野なる感情や、卑猥な

る劣情を刻除し、何時も習々たる春風の許に、數多の愛兒を育て丶行きたいものである、斯くしたら、世間で能く言ふ『寄宿舍生活はドライである』の批難も薄らぐだらう、尙言ふまでもない事であるが、可成質素儉約を旨とし、卒業後、已が身を落付ける家庭と、餘り徑庭を生ぜしめぬ樣、而して一身の事は、自分で切盛し、漫に人に依賴させぬ風を養ふ樣にするが可い、

第四、判斷力を養成せよ、女子と云ふものは、ナカ〳〵感情の深く、そして强いものである、從つて慈悲心や同情心に富んで居る、其代り、正反對に嫉妬や邪推などするにしても、其度合は大變高いだらう、是等は主として正當なる判斷力を缺いで居るから起つて來る事である、殊に共同生活に於ては、少し氣の利いた者は、一人立つて何か唱へ出すと、我も〳〵と附和雷同する傾きがある、其結果、寄宿舍に於て屢々紛議を生ずることがある、で局に當るものは、能く感情の調和を計ると共に、是の理性の發達を忘れてはならぬ、

第五、小規模たれ、寄宿舍は、餘りに大規模の計畫をせぬが宜しいと考へる、先づ初めは可成丈け小規模にし、漸々枝葉生茂り、羽翼整つた所で、適當なる程度まで學生を增加する方針を取るべきである、左もなければ、舊いものは、新しいものを、薫化する事は出來ないのみならず、却つて、新來者のために、網や巣を覆され、折角是まで辛抱した甲斐も水の泡と消えてしまふのみである、舍監たるものは、須らく是の呼吸を飲み込んで居るが可い、

如上の五項は、尋常一樣の事ではあるが、現今の寄宿舍について特に心配して居る點である、此の他、寄宿生と通學生、寄宿舍と家庭等の話問題もあるが、今回はこれで一段落をつけて置く、

男女交際に就て

思ふに男女交際といへる事は、婚姻神聖論より其根據を發せるものに相違なし、兩性相助くるは吾人の天眞本分ともいふべきものなれば、男女は須らく伉儷を求むべし、伉儷を求めんとすれば、兩性互に意思を疏通すべき必要あるを以て、須らく交際すべきなりといふに歸着せん、然り男女兩性は互に相助くべきものなれば、交際すること決して不可なるにあらず、而して伉儷を求むる爲には、互に意思の疏通を圖るも可ならん、これ婚姻は公平なるべく、又完全なるを是とすればなり。

然れどもこは吾人の理性が充分に發達して、男女共堅確なる根柢を養ひ得たる後の事なり、又吾人の社會が充分道德的に發達して譎詐奸曲の行はれざる交際社會となりての後の事なり、然らずんば兩性單獨の交際は、孰れかゞ譎詐奸曲の目的を達する媒介たらずんばあらず、之が爲に既婚男女ならば醜汚の名を流し、未婚男女ならば、淫泆の名を留めずんば止まざるべし、即ち男女の交際は理論上之を自由に放任すべきものなるも、實際上に至ては未だ之を單獨任意ならしむべからざる所以なり。かく論究し來る時は、吾人は直に家庭間に於ける男女交際の上に斷案を下すことを得べし。即ち既婚男女は他と交際するに當りては成るべく夫妻相携ふべし、若し止むを得ずんば一方の家庭よりは夫妻、他方よりは夫妻の一人之と會合すべし、又多數の家庭より相集るとすれば、必ず夫妻相携ふ乎、然らずんば男子は男子、女子は女子のみ會合とすべし、かくの如くんば決して醜汚の名を流す如き穴隙なかるべし

更に未婚男女の交際に至りては家庭の間、其父兄たる者は必ず之が交際を監視するを要す、若し父兄にして支障あらば近親知己にても可なり、然も其近親知己は必ず監視の任を盡し得る人なるを要す、而して是等未婚男女の交際は必ず公會場に限るべし、或は又未婚男女の孰れかの一方の家庭に於て、父兄の一人是等未婚男女と席を共にしての交際なるを要す、これ方今歐米社會に行はるゝ青年男女の交際法なり

要するに男女交際法の規律にして茲に確然として立ち、人々之を嚴守して實行するに至らば、家庭の改造は徐々として施すことを得べし、唯此一時よく行はるゝ所なきが故に、東洋古來の如き女子の禁足法行はるゝなり、而して男女權利の差等をも之が爲に著しく生ぜしめ而して家庭間に不公平、不和合、不取締といふ如き諸弊害を續出せしむるに至るのみ。吾人は現時に於て男女交際論の聲漸く社會に高まるを耳にし、大に此風潮を喜ぶと共に、此際一大刷新を家庭上に加へしめんことを欲して此言あり、世上の諸君子吾人の此苦言に耳を貸す所あるや否や。　（躬行會）



育兒に就て

醫學博士　加藤照麿

小兒の營養

今迄醫學の進みません間は、小兒には成る丈け長い間乳を呑ませるのが宜いと云ひ來つて居りましたが、夫れが大變善く無いと云ふ事を大分人も知る樣に成り、近頃に成つては、愈々其說が盛んに成つて來て、八九ケ月目位から副食物を與へる方が宜いと云ふ事に成りました、夫れでありますから、皇孫殿下なぞも十ケ月以內から矢張りお粥とか米汁の樣なるものを混じて差上げました、

牛乳の使用

牛乳の用ひ方も適度にやりませぬと、大變營養に害があるもので御座いまして、私共の所へ小兒を連れて參ります內にも、此の營養が度を得ない爲に病氣に罹るものが大層多い、其の小兒は一寸見ると非常に肥つて居る、夫れは驚く程肥つて居るのがあります、夫等はつまり營養が過ぎたので、醫師の方では之を稱へて過營養と申します、大抵聞いて見ると母親が乳の出ない爲に、或は出ても其上に牛乳を遣る、其度が過ぎて脂肪分が多く成りすぎて、夫れが爲に病氣が起るので御座います、夫れですから、いくら營養と申しても、矢張り度を過しては却つて病氣を惹起す源に成りますから、其邊は善く醫師に計つて爲ないといけません、だから小供でも肥つてさへ居れば、必ず丈夫とは云はれない瘠せた子よりも肥た兒に病氣のあるのが多い場合もあります、

人乳と牛乳

十年前には人間の乳が一番良いから牛乳は成丈け廢める方が宜いと云ふ事を云つて居つたが、今でも其に相違ありませんが、併し母親に種々な病氣があると云ふ塲合には、どうしても其乳は飮ませる譯には行かぬから、其時には牛乳を飮ませなければ成らぬ、然るに一ツ困る事には牛乳を與ふる時には、護謨の乳首で飮ませるのであるから、母親の乳房と形が違つて居る、夫がため小兒が嫌つて飮まぬ事があります、左樣云ふ塲合に能く素人方は、腹を減らしておいたら後には堪切れなく成つて飮むだらうと思つて、根氣よく我慢して居つた爲に到頭餓死して仕舞つたと云ふ事がありますが、此等も矢張餘り一方に偏した誤りであつて、さう云ふ時には矢張臨機應變に縱へ惡くても仕方が無いから、少しづゝ人乳を混ぜて飮ませて段々に馴れさするが宜い、何も惡いからと云つて一概に廢めて仕舞つて、夫が爲に餓死させると云ふのは、却て生中衛生を知つたが爲に起る誤りであります、

乳が充分に出ないで困難する人も往々ありますが之に就ても素人は、旨い物さへ食べたら善からうと思ふけれども、決してさうでは無い、乳を能く出す樣にするには運動を爲なければ成らぬ、運動も只義務的に一町か二町も歩くと云ふ樣な事ではいけない、今一寸例を御話致すと、乳は人も牛も生理上同じでありますが、過般、宮樣が箱根へ御出でになるに付いて、澁谷の御料地に居りました乳牛を二頭、宮の下へ連れて行つた、所が其二頭の牛の乳の量が自然に減つて濃く成つて來たのであります、是はどう云ふんであらうかと、牧夫を呼んで聞いてみますと、運動が不足だからだと云ふのです、夫は澁谷の御料地には廣い運動塲があるが、箱根では、四間に五間位の所に二頭這入つて居るので運動が十分に出來ない、運動が不足では良い乳は出ませぬと云ふのです、牧夫は生理學をやつた人でも無いが自然の經驗でさう云ふ事を言ふたのです、私は之を聞いて大いに感

心した、運動をさせなければ食物は旨い物を食べさしても良い乳が出ない、是は牧夫から聞いた話ですけれども、人も矢張牛と同じ構造であるから、運動さへ充分すれば乳も出るやうに成るだらうと思ひます

夫から小供に乳を呑ませます時分に右の方の乳と、左の方の乳と、交互に屢々取換へて飲ませる人があるが是は大變宜く無い何故かと云ふと、人間の乳は最初飲初めた時出るのは薄い乳で、濃いのは後から段々に出て來るのです、（牛の乳は是と反對にて最初濃いのが出る）夫であるから一方を半分飲ませて又一方を半分と云ふやうにすると、始終稀薄な乳計り飲ませるやうに成つて、大變に害がありますから、注意しなければ成りませぬ、



乳兒の口

小供に乳を飲ませます間に口を掃除すると云ふ事は必要な事である、尤も是は誠に手數のかゝる事であるから面倒がる人が多いが、ちよつとした事で手拔けをすると、是から種々な病氣が起る事がある、是は只水で掃除しても宜う御座いますが其では大した効能は無いから、硼酸水か、曹達水で洗つ

＊＊

て遣る方が宜しい、

口の中の腐敗して居るのがすつはくなつて居りますから、曹達は「アルカリ」で反對の作用を有つて居つて硼酸水よりも宜いと思ひます、曹達水で上下を拭つてやれば宜いのでありますから斯う云ふ事を擴めたいと思ふ、其結果は口から起る病氣を防ぐことが出來る、それから誠におかしい事でありますが、子供が咳が出ますと吸入をかけると云ふ事が一般に擴がつて來た、是は大變良い事でありますが、只水の中へ鹽を入れて、鹽水で吸入をすると云ふやうな事は餘程危險な事で、それで咽喉を刺戟して却つて悪くすることがありますから、子供の吸入は醫者に相談してからでなければ、行ふと云ふことは大變危險であります、

次に種痘の事に就て一寸御話いたしませう、種痘と云ふことは結構な事で、是より外に天然痘を防ぐことは出來ないのであります、併し其植え方、又種に依つては大變な事が出來る、それから植える時機

も注意しなければならぬ、今東京では種苗製造所と云ふものが出來て安心すべき痘苗が出來ましたが地方に參りますと、子供に植えて其子供から種を採ることが往々ございます、其爲に汚ないものが附いて居つたり何かして他の病氣が起る、是迄種痘の爲に他の病氣が起るものでないと思つて居つたのですが他の病氣が起ると云ふので只今小兒科醫の研究して居る位でありますから、今に必ず分らうと思ひます天然痘は外に來ないか知りませぬが、種痘の爲に他の病氣を起した事がある、是は大變大きな問題で、斯う云ふ所で御話致しますと、種痘が悪いと云ふやうですが決して悪いと云ふのではない、天然痘を防ぐ爲に無論植えたが宜いのであります、それは第一吾々醫者の方からさう云ふ考を素人に及して、吾々小兒科醫者が先に立つて研究して種痘の爲に起る續發病を避ける方法を講じなければならぬ、是は日本でも著手して居りますけれども御話する程極つた結果はない只、ちよつと御話致しますと、能く御聴き

にならぬと、種痘は怖ろしい病氣を起すと云ふやうに聽かれては大變です、さう云ふ風な御話をするのではありませぬ、種痘は結構な事であるが種の惡いのでは病氣を起すとがある、其結果を御話すると、自分達が種痘をしてから起つた病氣を研究致しまして、是が種痘の爲に起つたのだらうか、外の爲に起つたのであらうかと云ふことに注意して居ると云ふことでございます、

主婦の務

東京高等女學校長　棚橋絢子

女といふものは一家の内を治むるのは骨の折れるのであつて、事細く爲やうと思へば閑のあるものでない、一家の主婦が今日は花見に行くとか、明日は誰某を訪ふとか、夫婦で遊山に行くとか、子供を連れて遊びに出るとか申す樣なことがあるが、私共はあれば能く出來たものであると思ふ、一軒の家を治めて行かうと思へば一日も閑のあるものでない、私などは昔から今日は閑暇であつたと云ふ月日のあつた事がない、併しさう年中働いても居られぬから、春はせめて花の一遍も見に行くと云ふ位な事はありましたが、其花も小供のある中は見に行く事も出來なんだ、何處へも行かずにテンテコ舞つて居て日が暮れる樣な事ばかりでありましたが、世の中の能く出て暮らす人は定めし内輪では拔けた所があるであらうと思ふ、拔けた所なしにさういふ事が出來れば大變豪傑であれども、恐らくはさういふ豪傑でなからうと思ふ、恐らくは拔けだらけにして遊んで歩くのであらふと思ふ、それ位忙しいものであるからして、家事と申すものは奥まで進んでゆかうと云ふには書物を讀んだばかりでは中々いかぬ、女は一軒を治めて行くのが本來の職務であるから、書物ばかり讀んで居て貰つても甚だ困る、自分の職分を盡くして餘力あれば文を學ぶであるから、學問もせねばならぬが書物ばかりに噛り附いて居ない樣にして貰い

たい、古人の金言とか何とか云ふ樣な短いものを何度も讀んで之を味ひ、間さへあれば其事を考へ、ドウか自分の身も其處に到りたいものであると云ふことを心懸けて行きさへすれば隨分品位をもつて行くことも出來るから、一家の家內たるべきものは、日に二時間も三時間も書物ばかり讀んで居ないで專ら家事に心を用ひ、夜分寢てからでも味ある古人の語をば一句二句讀みこなして其れを學問となし、日々忘れぬ樣にするが肝腎であらうと思ふ、心に品位さへあれば幾ら賤しい業を執つて居ても恥るに及ばず賤しい事をするを恥かしいと思ふ中は心に品位がないのである、業が賤しい藝であつても心に人間の道理を辨へてさへ居れば、業ばかり高尚であつて心の品位のなきより遙かに優つて居ると思ふ、學校卒業の女子などが高尚な業務ばかりを望んで、女子と生れながら女子の職掌を盡すことが出來ないのは是れ氣位の却りて卑しい證據であらうと思ふのでござります、隨分立派な事をお話しなさるゝ方でもズーッとお話をして見れば一向に低い心を持つて居るお方が比々として多く、高尚な心を持つて居ると思ふ人は實に少ない、私共は何時も嘆息致します、

室內裝飾の心得

日本女子大學校教授　戶川殘花

或外國人の話に、私が、日本人の部屋は明屋ですと申しましたら、日本人の返答には汝のお部屋は道具屋の店舖の樣ですと云はれて、五分々々になりましたと語りし事あり、淺薄ぬ話なれど、此點に日本と西洋との室內裝飾上の趣味の異なる所が知らるゝなり、

スコットランドの詩人のスコットの座敷は欄間も壁も古代の具足と楯とで飾られ、藏書二萬卷が整然と並べてありしとぞ、日本の歌人伊勢は床板を磨きあげし如くに拭きこませ、室內に一塵のあるも許さゞりしが、翠簾は古色小暗く邊幅の錦の衣も褪めし

が懸られたりと云ふ、一言に評すれば西洋は人造的に道具を並べ、一室なり一家なりを五感に滿足する樣に注意するなり、日本のも同じく耳目にも觸覺にも適する樣にはなせど、天然的に室内の道具を飾るなり、

第一　室外と室内とが一幅の畫圖になる事

例へば床の掛物も庭前に爛漫たる花あらば、艶麗に對するに淸楚を以てし行草の詩などの幅なる可し常に庭前の景色と其趣味を上手に調和なす可きなり

第二　家は夏に適する樣に爲す可き事

例へば昔時の書院なり、今も大寺の表座敷を見る可し、天井高く疊靑く床違ひ棚に三四の道具あるのみ心神自然に爽凉なり

第三　掛物、扁額の事

例へば第一に云ひし如く時季に應じ、晝夜に關するものと知る可し、昔時德川將軍が或大名を召され曉に及びて茶室に呼びてみ、小窓を突き開けて殘月を見せし時に床には「一時鳥なきつる方をながむれば」と云ふ古歌の上の句の掛物がありしと云ふ、此は餘りに凝りし思案なれど推して知る可きなり、

第四　花の事

例へば利休が太閤に朝顏を見せんとて、庭中の花を盡く摘み採り、僅に二三の花のみを見せしと云へる如く、西洋人が佛前の花のやうに雜然と入れしは卑しむ可し、日本のは花のみならず枝に趣味あるなり、これも庭前にある花木と同一にならず、自然の風韻を考ふ可きなり、

第五　置物、書、畫帖、其他の品の事

例へば昔時の表座敷の床、違ひ棚等には人物、獅子などの置物或は卓に香爐などあり、棚には硯箱、繪卷物などを置きしなり、今も同じかる可し、古色ある品、由緒ある物など可なり、人々の賞玩するは別なれど、先づは今の人などの書畫物品よりは古人の手になりし品なる可きか、山河も霞霧につゝまれしは綺麗に見ゆるなり、物品も古代なるは明白ならざる所に趣味あり、

第六　屏風對立の事

例ば余が見し家にて一の家には六枚折の金屏風へ應擧が緑青もて濃く竹を畫がきしなりき、一の家には二枚折の金屏へ抱一が秋草を畫きしものなりき、共に大家の筆なれど、應擧のは餘りに金持の品らしく見え、反つて抱一の方面白かりき、無落欵だが確然に狩野の某とか、土佐の某とか云はるゝ方なる可し、道具にも餘情ありと知れ、

第七　襖の事

例へば樂翁公の好に月影と云へる唐紙の模様あり濃淡をもて月影をあらはしゝ白き形紙なり、前にも云ひし如く、四季の節又は庭前の花木と不調和の無きやうに爲さんには、書畫の襖は幾間もある家の外は用ふ可からず、無地か形の細小がよし、尤も注意したきは燈火に映じてキラ〳〵なさぬ色を取る可しキラ〳〵して可なるは料理屋などなる可し、

この他に樂器（琵琶、琴、笛等か）銅像、木像、古鏡、手箱、盆栽、盆石、文房具、鳥籠（鶯か）など樣々あれど多く置く可からず、又主人の得たる道に非ざれば他の笑をまねく事多し、茶、花の宗匠に就きて學ぶも可なり、たゞ心得おく可きは茶、花の宗匠骨董屋などは風雅の道にありながら、多くは俗なる人の多きものなると、其嗜好の小さく狹くなる弊ありと知る可し、

以上は純粹の日本風なれど、年々に洋館の多くなる時なれば是非折衷の必要なることを知るべし、凡そ左の如く心得て可し、

一　椅子、卓の形狀と色はあまり種々にならぬがよし錦などに包みしよりはジミなる色の椅子なる可し、

一　花活は對にして七寶燒か古錦手などなる可し細工さへ上品ならば金銀器もよろし、小卓の上に置くには玉も可なり、花は枝より花の色の配合に注意すべし

一　隅の飾棚は書籍か動植鑛物の珍種か、置時計もよし、總て華麗なるがよし、蒔繪ものなども面白

し、
美麗なる製本の和漢書或は水晶軸の經卷もよろし、
位置の整然と並列せしがよし、
一　額は油畫、水彩畫等なる可し、光線に能く注意す可し、
一　華氈は形の細かきがよし、火爐の前には艶美なるを置く可し、
一　樂器は『ヲルガン』『ピアノ』適宜にす可し、
一　窓帷は夏冬に變化すべし、
一　壁紙も形の細かくして上品なるがよし、
この他に寫眞帖、名所記、詩文集、大理石の肖像など様々あり、總て洋館の裝飾は一家の夫人令孃に主權あればにや、細く麗しく順序よく並べらるゝ者也、
　さて日本作りの室内に洋品を用ひんと思はゞ羅馬希臘或は中古の趣味ある古雅の洋品を用ふ可し、(模造なれども)色の華美ならぬを取る可し、綺羅々々せし品は他の裝飾を害するなり、油畫は適せずむしろ水彩畫か他の墨畫に類せしを採る可し、洋裝の書冊は好ましからず、
　西洋作りの室に日本品を用ひんと思はゞ、大名の座敷に用ひし漆器、銅器、金銀器よろし、足利以後の禪味ある品よりは奈良、平安朝の器具よし、他は日本室に反對せし物と心得おく可し、茶味あるもの詩歌的の趣味あるは先づは適せず、
淡泊に失するは日本作の弊なり、濃厚に失するは西洋作の弊なり、されど淡濃の配置よろしく古今東西を折衷するは主人夫婦の才智に歸すること故、古に拘はり今に泥む可からず、日本の神韻に西洋の器具を應用すべきことなり、

規律正しき生活

橘　綏　子

　文化さかえたる國が、よく様々なる職業を整理するは、分業の道立ちて一刻の時をも重んずる規律正しき習慣あるに因るなり、

煩雜なる機械が、能く一毫をも誤らずして、運轉を續くるも、其内に分業の道立ちて、一齊に規律正しく運轉するが故なり、

一家を組織する道、亦何ぞこれに異ならん、人の妻たる者は、實に機軸を握りて之を運轉せしむる技手といふべし、機械の構造若し精密ならば、運轉速にして、成効著しきが如く、妻たるものゝ精神堅固にして、心身の運轉敏捷ならんには、其成効必著しかるべし、機械小なるものは、構造單純なれども、漸く大なるに隨ひて、漸く複雜となり、其運轉に力を用ゐることも多く、人を要することも加はるべし、斯く一家も小ならん折は、萬事を一身に引きうけ、大とならば、さま〴〵に人を司配して用ゐざるべからず、其いづれの境遇にありとも、最も重んずべきは、時を用ゐるに規律正しく、分業の道を明に立つべきことなり、

時を用ゐるに規律を正しうすとは、職務の爲に用ゐるべき時間、雜用に服する時間、休息の時間等を

能く區別して、尊き時間を空費せざるをいふ、朝は必ず定刻に起き、三食時を定め、午前になすべき事、午後に辨ずべき事、夜間に營むべき事を、時間と共に其前日より定め置きて、其日に至らば、迷はず、考を費さずして、着々事に從ひ、妨あらぬ限は必ず其豫定を遂行せんとの心がけもて其日を送らば、偶障りありて其定めに後るゝことありとも、日々の要務は必ず速に辨ずるを得べし、年老いたる人の、古より規律なく生活せし人たらば、止むを得ざれど、年少く、而も規律正しき學校生活に慣れたる人が、一家を組織するに至れば、却りて何事も、不規律極まりて、朝は目さむれども久しく起きいでず、三食は日々定刻になしたることなく、時としては、あさいして用を省かん爲に、二食に止め、或は空腹を滿たさんとて四度も食事し、食器は厨房の隅に汚れたるまゝ山の如くつみ置かれ、衣はいと穢れたるを漸くぬぎかへても、一ケ月二ケ月と其儘にぞ打ちすぐめる、かゝる人、眞に之を洗ひ清めん暇もなきかと

おもへば、良人と益なき雜談、たはむれなどいひかはして時を移し、又夏ならば朝より晝寢し、冬ならば火爐を抱きて、今行はるゝ小說殘さじと讀みなどす、いと心得ぬことなり、世人之を評して女學生上りの奧樣といひて爪はじきす、女學生たるもの、能く愧づることなきや否や、無敎育の奧樣といはずして、女學生上りの奧樣といふは、明らかに生學問が其人物を劣等ならしむるを意味する語なり、若し果して然らば、寧ろ學ばざるに如かずとやいはまし、田舍の堅氣なる親達には、今猶女子に學問せしむるを望まざるものあるは、かゝる女學生上りのあればなるべし、女學生上りたるもの、最も反省せざるべからず、

一家を治むるに、分業の道もてする事は、其家の大なると、小なるとに因らず行はれぬべし、若し大にして僕婢あまたを召使ふものたらば、其各がなすべき用務、家人の助くべき用務を明らかに區別し、規律正しく其働きぶりを督勵し、甲若し乙より早く己れの職事を了へなば、義務的に非らずして、相愛的に其用務を助けしむべし、初より只不規律に働きゆかば、一人の手にて速に辨じ得ることにも、二三人を要し、且つ互に用を讓りて、己れ安逸ならんと願ふ怠り者を生ずるに至らん、故に大家にして人多ければ、必ず分業の道を立てざるべからず、又家小にして、一身にて家庭を組織するものは、日により時間によりて、吾が心に分業の道を立て、手足に命じて必ず之を行はしむべし、是も彼も同じ日に、同じ時に營まんとあせれば、一も成効することなければ、急ぎて爲すべき用務、或は一時に集めてなすべき用務は、日に依りて區別し、此終らば彼にと、よく前々より心がまへを爲すべし、其他の必ず日を限りたる用務にあらぬものは、毎日時間によりて區別し、平均に行ふ方更に利益多かるべし、是れ一身にて行ふ分業の法なり、さるをさまで急がぬものを、一事に取りかゝり、他の爲すべき事を廢して、其事にのみ心をよする時は、未だ半にも至らざる内より、は

や飽きて、又他の業に心を移し、これもし終へざるに精力亦盡きて、他の事に移らんとはするなり、かくては一事も速に成効することなくして、猶其他に營むべき日課をさへ廢して省みざるが故に、兩つながら得る所なかるべし、是急がぬ用事を一時になさんと欲するが故なり、日を限りたる事は、いかに多く其事に當りても、飽く事なけれど、さわらぬものを一時になさんとせば、精力續かざるが常なり、此理をよく量りて區別なしつゝ行ふを一身に於ける分業といふべし、『何事も一人なれば手廻り兼ねて』といひて、萬を疎そかにするは、意ふに此の法を立てざるが故なるべし、用は盡くる時なく、爲すべき範圍は限なく廣し、故に其中必要なるを擇びて、否らざるものは省き、必ず之を日課に付して、定め置くべく、さる中にも、益多き書籍と新聞雜誌の新智識を養ふべきものとは、必ず日課の中に加へて閲すべく、親しき方への音づれも、『久しう心もとなく打ち過ぎぬれば』、抔いひて、此身もなつかしく、かなたも歡迎せん頃ほひ、近き方は親から音づれ、遠き方は文參らするは必ずゝべき事として、これも程よき頃、其日課に挿み置くべし、

小兒多き家庭には、自づから規律亂れ易く、分業の法も立ち難きものなれども、行ひ難しと定めて之を放任すれば、いよ／＼行はれず、遂に習性となりゆき、全く不規律亂雜なる生活をなすに至らん、故にたとひ行はれずとも、行はんとの希望の下に生活せざるべからず、

小兒は聞きわけなきものとして、其爲すまゝに任すは其親に威嚴なきなり、子親に勝ちて放なること極りなければ、やがて一家の亂調となるべし、いはゆる聞きわけなき年齡の童兒も、親の顏色を伺ふ智識ある限りは、理に服せずといふ事決してなかるべし、されば母親が笑ひながらに其惡戯を咎むれば、あまたゝび云ふとも止めんともせざるに、面を正しくして誡しむる時は、恐れたる樣にて概ね服するが常なり、

小兒の智識は意外に發達し易きものなれば、其起

臥飲食遊戯の時を定めて、幼少より自然の習慣をつけて、出來得べきだけ正しく之に慣れしむれば、かくあるべきものと難なく悟りて、よく人の教訓に從ふに至らん、兒女學校に登りて、齊しく教師より教へを受くるに、其規律正しきものと否とは忽ちに知らるべし、例へば何日までにと定められて作りゆくべき文章の問題、或は數學の宿題等をいと等閑になし置き、又前日教へられたる書を、心に適ふ時は翌日能く復習し來れども、多くは放任して顧みず、其他教師の教へを更に心に留めざるは、概ね不規律なる母の手に育ちたる子女なり、彼等はたとひ一通りの教育を受けても、其遺傳的不規律の性は、到底化すべからず、其害の及ぶ所遠く、之が爲に萬の進歩を止めらるゝこと少しとせず、故に一家を整理せんとせば、主として規律に從はざるべからず、其子女を愛育せんとせば、主として規律に慣れしめざるべからず、己れ良妻たらんとせば、主として規律を以て其良人の精神を支配せざるべからず、況や獨身にして、單に修學を務むるもの、況んや不規律なるを誡しむべき教師の位置にあるもの、況んや一刻を爭ふ煩劇の職務あるものは、必ず規律正しき生活の下に進退せざるべからず、

女子の作法

石川殘月

古來東洋一流の女子教育は三從貞淑の德を養はしめて其性を温柔ならしめ禮儀作法を仕附けて其質を靜かならしむるに在りき、此の主義の女子教育は多少望ましからざるに非ざるも今代の女子をして一樣の典型に從はしめ是れを鑄て土人形の如くならしめ盆栽の如くならしむるは誠に不可なり、

女子の教育も男子と同樣に成る可く心身の氣質性情を自然に發展せしむべし、女子教育は大切なりとは其父兄師傅が餘りに念の入り過ぎたる配慮をなして人工を加へ過ぎるは極めて不可なり、女兒各個人

の天賦の資質は百人百色なれば其天眞の氣風性質をして自由自在に開發せしめ、苟も垂柳を逆立てゝ面白がる生花の如くならしむ可らず、但し何事にまれ一切の心事行動みな徳義の規矩あり、人情風俗の從ふ可きものあるを忘る可らず、

吾人は女子の心事は勿論起居動作に對して萬事自然に反したることを厭ふ者なり、道理と實際とは應はぬ風儀を忌む者なり、若し女子の行儀作法も其德義品性の發露の一端として見る可くんば、行儀作法も亦女子教育の重要なる一端として、常に道理と實際とに適切ならしめ、決して不自然の事あらしむ可らず、然るに今代の女子の有様いかんと問はゞ、無禮譲の如き社會に、無禮譲の客人の如くに生活し居るなり、今の女子は日本古來の行儀作法を知らず、されぱとて歐米文明國流の禮儀作法を知れるにもあらず、是れを遠慮無く明からさまに言はゞ、日本の禮儀も歐米の禮儀も兩ながら知らざれば、恰も匕を以て飯を食ひ、箸を以てビフテッキを挾み食する如き、頓珍漢の生活をなし居る者なり、

女子の行儀作法は自然ならざる可らず、不自然なる可らずといふは今の女子生活の如くに、無作法なれ、無頓着なれと謂ふ意味に非ず、自然の生活とは規矩と案配とを待つて、始めて美的生活となり、女子の自由自然の生活に規矩案配の加味せらるゝものも無くんば其生活たるや粗野不文の生活たるを免れず、若しそれテニス運動の姿勢動作にさへ、其手足の位置運用に醜美の差別存する者ありとせば、日常の起居動作にも、豈に此の差別なからんや、今日の女子は多くは學校體操の姿勢を知り居るも、盛裝綺羅を盡くして、貴賓稠坐の席に出るや、正歩端坐の姿勢を知らざるなり、

支那朝鮮の兵卒は、行歩起立に一定の規則なく、只歩み只止まり、思ひ／＼の擧止を爲して、曾て怪まずと聞く、今の女子も、亦起居禮なく、只それ頭を下ぐるを禮と思ひ、手足を動かさゞるを行儀と心得、女禮の何たるを解せざるは、支那朝鮮の兵卒を

去る迄して言ふ可らず。

日本の女子に西洋の禮法を敎ふるも、實際に適せざる者多く、又日本古來の禮法茶道等の古式をそのまゝ敎ふるも、時勢に適はざる可し、されど今日の日本文化の狀態は、東西兩洋の文明が相合して、明治の社會を成し居るものなれば、今日の女子禮法も亦東洋古來の式法に配するに西洋の禮式を以てして道理と實用とに適合せしめて、是を折衷せざるべからず。即ち今日以後の女子の禮法は、其基礎を古來の舊慣に求め、其舊慣をして、實際に適應せしめざる可らず、

されど女子の禮式として、和洋折衷の法を採るとも、決して鑄型を當てはむる如き事を爲すべからず古來の禮式と謂へば、餘りに究屈なる一定の式法を設け、其式法に合するを以て禮なりとせり、是れ禮法の一端たるに相違なきも、禮の禮たる所以は、式法に非ずして擧止姿勢の美の上に存するなり、禮を習ふに式法に從ふは、式法其ものを墨守せんが爲に非ずして、式法に從つて行歩靜坐の上に動止の美を得んが爲めなり、

又起居動作に美的容姿あらしむると共に、其美的容姿をして實用に適合せしめざる可らず、若し禮法にして實用に反かば、是れ禮法にあらずして無禮なり、近き實例を言はゞ、女子が客となり、他人の宅に赴き、客間の端近に坐して、容易に上座に直らざるは、日常間々見る所なり、斯の如きは女子謙讓の德より出る禮の如く思ふ者も無きに非ざる可きも、其實非禮の甚だしき者なり、何んとなれば、如何なる客間にても、其座敷の構造位置を一見せば、必ず來客の坐するに、最も便利なる位置の存するものなり、女子が日本風の禮を知らざるの悲さには、客の坐すべき座位を知らざるより、端近に坐を占めて、自ら遜れりとなして、其實その家の主人僕婢の出入と、接客の爲の器物の置き處に妨害を與へ、主人の迷惑少々ならざるものなり、以上は日本古來の禮法を知らざるより生ずる無作法の一端なるが、身に

西洋の裝束を着けて、西洋の禮を知らざるより生ずる無作法の一端を示さば、左の如き一例あり、

近頃女學生の靴の流行は、中々盛んなり、高さ一尺もあらんと思はるゝ黒塗木履を履きたる昔時より觀ば、不思議にも見ゆべけれど、輕便にして活潑なる運動に適せる靴を用ゆるは、最も欣ぶ可きことなり、女子體育の注意上、一時の流行に止めず、永く靴を用ゆる事を續けたきものなり、然るに靴の歩み方には、中々注意を要するものにて、特に集會宴席の座上にては、其注意決して日本座敷の歩み法に讓らざるものあり、試みに令孃方の集合したる西洋間の集會に至りて、其歩行の樣に注意せんか西洋の禮法に就きては、殆んど野人の如き吾人と雖も、一驚を喫せざるを得ざるものあり、靴は席上を歩むに、決して荒々しき靴音を立つ可きものに非ず、多少注意せば、容易に鳴り響く板の間と雖も、足袋にて歩くと同樣に少しも音なく、然も活潑に歩むを得べきものなり、又賓客に對する禮としても、斯くせざる可らざるものなり

然るに今日の女學生は、靴は音のするものなりと言はぬばかりに、廊下は勿論のこと、席上と雖も靴音高く荒々しく歩行する事、左まで無禮に非ずと心得居る者の如し、さればにや花やかなる敷物を敷きたる席の上にても、恰も運動場を歩む如く、ドン〳〵ガタ〳〵音さして、右往左往に歩むを、少しも意とせざるなり、西洋にありては、斯の如き靴音など、農夫より出でたる兵卒と雖も、是をなさゞるなり、

斯の如き事素より些々たる一小事に過ぎずと雖も這般の事にして既に斯の如しとせば、他は推して識る可きのみ、今にして女子教育に禮法の注意を怠らば、將來日本の婦人は無禮の野人となり了らんのみ、



婦人界の一消息

◎三十年勤續の女教員　今回麹町區長大胡純氏は、牛込區新小川町三丁目卅四番地住麹町區番町尋常高等小學校訓導馬場とめ子女史に對し、教育奬勵規程第一條により、慰勞金五十圓を贈與したり、同女史は、本年六十歳にして教鞭を執ること卅年、精勤衆に超え、今回まで賞狀を受ること三十回餘、昇級二十回に及びたり、亦以て其平生を知るに足るべし、女史は水戸藩鈴木某の次女なるが、故ありて廣島縣福山藩士馬場信一氏に嫁し、明治五年東京に來り、信一氏は本郷西片町舊福山藩主阿部伯爵の家扶となり、明治七年現住所に轉移し、養蠶を營みしも面白からざれば、明治十年大審院に職を奉じ、同年八月大阪裁判所判事補に轉じ、明治十五年和歌山裁判所判事に榮轉し、二十三年監督判事に累進し、越えて廿五年死去したるが、女史は明治十年六月廿三日信一氏の許を得て、麹町區下六番町番町小學校の訓導を拜命せり、爾來裁縫と音樂を受持ち、熱心懇篤に教授したれば、同僚及び生徒の信任を受け、明治十四年二月東京府師範學校の別科なる女禮式を專修して業を卒へたれば、女禮式をも併せて擔當し、以て今日に至りぬ、明治三十五年十二月廿一日にも、東京府知事は教育奬勵規程第一條に依り金三十圓を女史に賞與したるが、今回又賞與の手續に及ばれたるなり、但し其家庭は不幸にして一子なく、伊勢の舊田丸藩家老久野丹波守の實孫達夫(二十二)を養子となし、目下早稻田文科に入學中なり、溫厚篤實なる女史は、生徒を見ること子の如く、生徒も亦之に對する慈母の如くなれば、從つて父兄は多大の敬慕を拂ひ居れり、

◎婦人博覽會の組織　上野の東京博覽會開催を機として、婦人博覽會を催す計畫あり、其內容如何は世人の注目する所にして、現に發起人中に福地天香氏の名を誤り傳へし爲め、同氏方へ出品申込みをなすもの續々あり、豫ても記せし如く、同氏は單に設計顧問たるのみなれば、大に當惑したる由なるが、以て世の注意を惹ける事を知るべし、役員には會頭副會頭の外評議員名譽會員若干名部長十名、顧問若干名、幹事長幹事事務員等を置き別に總裁を戴く事となし　會頭には先般矢島楫子との噂ありしも、同女史は宗教家なれば遠慮し、多分毛利公爵母堂又は鍋島侯爵夫人を推す事となるべしと云へど、如何にや右につき、一月廿九日午後六時より日本橋常磐木倶樂部に創立會を開き、各婦人會員各學校長にも出席を乞ひ。出品其他に關する協議をなせし筈なり、又會則の中にて多少注意すべき項目を擧ぐれば、先づ會期中大家を聘して、婦人に關する學術技藝の講演を催す事毎週兩三回　音樂演奏會を開く事、輓近の發明考案に係る趣味ある事物を紹介する事、割烹部にて實地料理の方法を觀覽試食せしむる事等なるが總て其他も一般婦人界の爲め裨益する所多かるべし、而して入場料は一人金十錢、小兒及軍人は半額なりと、

料理及菓子製造の實驗

富田寛

予は往年轉地療養の爲、一絃琴を教授しつゝ諸國を漫遊し、そこ此處に聘せられ、二三ヶ月乃至半年位逗留して、各地方の料理や、菓子の饗應に接し、その中感じて實驗したるものを順次記述せう、そこで漫遊といふことをするに、食物に忌み嫌ひがあつては到底出來ぬ、自分は何も嫌ひといふものがないので、自分等の漫遊、換言すれば食客をして歩くには誠に好都合で、それと同時に人にも毛嫌ひといふことをせず、一生のうちに成るべく多人數の人に交際をして見たいのが希望である、それが爲多少耳にすることも多いつもりである、さりながら玆に取出す品々は、いさゝか珍らしきもので、製法の簡便なものゝみのつもりである、

鹿兒島羹

これは一名かるかんと云うて、皇孫殿下の御召

上りになるよしで、内膳課にて調製するもの、その製法は、山の芋の皮を剝ぎ、それを百匁、ザラメ砂糖百匁、米の粉俗に團子の粉と稱するものを百匁、分量は右の通りで、芋は皮を剝ぎたるをおろし、擂盆にてよくすり、砂糖を加へて猶よくすり、次に米の粉を入れてよく交せ合せ、(但し米の粉を入れてからはすらぬやうにす)それを白木綿の裂を敷いた蒸籠の中へ流し込み、凡そ四十分間程蒸して、細き團子の串のやうな物にて突きさし、蒸し加減を試驗し串にねばり氣がつかぬやうになれば、それで出來上りであるから、蒸籠より出し、冷まして庖丁するのである、もし此のうへ上製にすれば、玉子五個の白身ばかりをよく泡だて、芋を擂る時一しよにすり込むのである、

長崎團子

大慈姑の皮を剝き、それをおろし、白木綿の裂につゝみ水氣を絞り、寒ざらし白玉を煉る位の加減にし、白砂糖を少し入れ、よく煉り交せ、小形の團子

位に少し平目に丸め、本胡麻油にて、狐色位に揚りたるを引揚げ、西洋紙（新聞紙にてよろし）にて上油をとり、茶受に用うるのである、但し料理に用うるには、砂糖の代りに、少量の食鹽を入れ、成るべくよく揚げて目笊に入れ、熱湯をかけて上油を去り茶碗盛又は椀盛の種に用う、鹽焼の相手などにも至極よろしい、

鰻の蒲焼及天ぷらの冷えたるを簡易に煖むる仕方

鰻にても天麩羅にても、冷めたのは餘り好ましくない、故に土産などに貰うた時は、先づ冷水へ一寸入れて引出し、强き火の上へ網をかけ、その上へのせて煖むるのである、餘り長く焼いては、上油が出るから、そこは程よく注意せねばならぬ、

辨松のから

豆腐殻を凡そ五合ばかりを擂盆にてよくすり、玉子の白身ばかりを七個入れ、尚よくすり、鍋にてから煎をなし、味醂白砂糖食鹽にて適宜に味をつけ、つゆ氣のなきやうによく煎る、別に鯛の皮を剝き、白き身ばかり薄く切つて茹で、もみこぼし、擂盆にて充分すり、味醂、白砂糖、食鹽にて味をつけ、前に仕立てたるものと交ぜ合せ、これにて出來上りとなる、それを器に盛り、その上に海老か赤貝又は針魚の如き、淡泊の魚類又生姜等を細かく切りて酢に漬置き、五もく鮓の如く上へ並べるのである、

獨活の味噌漬

山獨活の皮を剝き、一日日向にて乾し、赤味噌を醬油にてのばし、獨活を漬け、四五日經つて漬加減を見、色づけばよし、洗うて適宜に庖丁す、香の物として飯の副食にも酒の下物にも妙である、

天ぷらの衣

うどん粉またはメリケン粉の良品一升の粉とすれば、そのうち五勺を水二合にてだまの出來ぬやうにとかし、鍋にて煮、尚水を加へてのばし、冷めたる時、前の九合五勺の粉と一しよに、擂盆にてすりませて衣とし、魚は水洗ひをしたら、一つ〳〵叮嚀に

木綿布にて叮嚀にふき、水氣をとりて衣をつけ、最上胡麻油にてあげる、汁の製法は、上酒五勺鍋に入れて蓋をし、强火に掛けて、煮立ちたれば蓋を取りマッチにて火を入れ、龜甲萬か山十などいへる上等の醤油一合五勺位の割合に入れ、このたびはザッと煮るのである、

蕗の薹の甘露煮

成るべく丸く肥えたる蕗の薹を選び、上の一皮を剝き、白水にて茹で、冷水にてよく洗ひ、目笊へ上げて水氣を去り、ザラメ砂糖を加へ、とろ火にて氣永く煮るのである、

三輪漬

三輪漬は女鑑の新年號にて、霞袖女史の料理法があり、重複になるが、少々製法を異にして居るから參考までに述べて見やう、

大根はあまり太からず細からず、中位のがよろしい、皮を剝いて丸く小口から薄く切り、別に柚子を丸く薄く切り、唐芥子を水に一時間程漬けて種を出し、これも細かく小口切にし、さて大根の丸き形を崩れぬやう少量の鹽にてもみ、深き器へ、先づ大根を三枚、その上へ柚子を一枚、又大根を三枚、柚子を一枚と段々に重ね、所々に唐がらしを加へ、輕き壓石を置き、二三時間經過すれば食せられる、食する時は小皿に盛り、少しばかり醤油をたらす、

附言　この料理は紅白黄三個の丸き形故三輪漬の名稱がある、他の酢味をからず、柚子の生酢と香氣が大根にうつり、その美味を賞翫するのである、されど永く置けば苦味出づる故に、食用丈時々製する方が得策である、分量は大根一本に柚子三個、唐がらし一個で十八前位のものは出來る、

滋養酒（蘭法アポロドボール）

玉子の黄味三個を器に入れ、アルコールを小匙に一杯入れ、掻廻すと沸騰する、そこへ甘露水を大匕に二杯ほど入れ、よく交せ合せ、ブランデー二合を加へてのばし、桂油か或はレモン油を小楊枝の先へ少し付けて入れ、是にて出來上り、

但し甘露水の製法は、ザラメ砂糖凡そ五十匁なれば、水を猪口に入れ、ざつと煮立て上げ、わくを玉子にてとり、尚とろ火にて煮詰るがよい、本文ブランデーの代りに焼酎を用うるもよい、

注意　滋養の爲飲用するには、寒中毎夜寢る時に猪口に一二杯服用す、下戸なれば、猪口に半分へ水を二倍にして用う

精練と漂白との話

田部井竹香

(一)精練と漂白とが如何に必要のものなるか

糸子は、此の頃、姉の絹子が染色法の講習を受け之れを實驗しつゝあるを、其の側にて頗る興味あることゝ思ひ居たるが、或る日母が拭布に用ひたる生木綿の端一二寸を貰ひ、姉の使ひ殘れる紫紅等の染料に浸し、之れを染め上んとしたるに、諸處斑を生じて一向鮮明に染め上らざりければ、怪し氣なる面持にて姉に向ひ、

『姉樣、妾がお母樣から貰つた、此の生木綿はなぜこんなに染らないのでせう？』

との問に、絹子は少しく笑ひを含んで、

『夫れはその筈ですわ、生木綿ですもの、生木綿は漂白してないからね―』

といへば、糸子は猶更疑ひ解けず、再び問ひを發して、

『姉樣之れはもとから生木綿ですのよ、生木綿で漂白してないと何故染まりませんか』

との事なりければ、絹子は懇ろに、

『さうね―、夫れは妾がわるかつたのよ、只生木綿で漂白してないからといつて、それでお前さんに染まらぬ理由のわかる筈はないね―、それなら今日は妾が少し先生に伺た事をお話しませうよ、……わの……各種の纖維……些と六つかし過るかね―、いろ〳〵の糸になるべきすぢの品物は、天然の儘だと

屹度不純物といつていろ〳〵なまじりものがありますの、その內で一番純粹だと人に思はれて居る木綿の糸すぢでも、百分の五位は、脂肪だの色素だのといふものを含んで居ますのよ、それだから之れを其の儘で染めてはとても鮮明の色の出やう筈はない、又それを織て布とすると、その織る時などにいろ〳〵の油や脂肪などが附きますから、猶更染まりません、だからよく精練て漂白さなければなりませんなぜ漂白の前に精練ねばならんかといふと、凡て纖維の中にある脂肪を取り除けなければ完全に漂白されぬものですからねー、

(二)木綿は如何にして精練漂白すべきか

糸子は更に姉に向ひ

そんなら姉樣どうして精練や漂白をしますのですか、憚りですが少し敎へて下さいませんか、との願ひに姉の絹子も愈〻興に入りて

さうですねーそれでは今日は少し暇がありますから順序を立てゝ御話しませう、何からがよいかしらさう〳〵木綿糸のことからして御話しませう、

木綿糸百匁に付六匁から十匁程の洗濯曹達、又は二匁乃至三匁の苛性曹達を丁度糸がピタ〳〵浸され得る位の水に溶し、糸を入れ、二三時間煮沸て後取出し、水で洗ふのです、勿論煮沸てるときに液面に糸の出で居ない樣になさい、さうないと糸の質がわるくなりますからよ、それからね、漂白粉を少しの水にて練り、之れに水を加へ澱き、上澄液を取り、『トワデル』一度の比重にして、此の液の中へ、前の糸を入れ三十分から一時間位澱きし後、取り出し水で洗ひ、鹽素の惡い臭氣を取り除くがよろしい、勿論多量の糸だの織物だのゝときは、別に大仕掛の裝置をも要することがありますが、今は只お互の家庭で實驗の出來ることだけを御話しするのですよ、

(三)亞麻は如何にして精練漂白すべきか

絹子亞麻は、木綿よりも多く不純物を含んで居ますから、『アルカリ』で何度も煮沸ますと、不純物を取り除けることが出來ます、然し木綿にくらべると

『アルカリ』及酸類の作用に堪へ難いから、いづれも皆稀薄液にしなければなりません、そして左の三段を要します、

(一)亞麻糸百匁に付十匁の曹達灰を程好き水にとかし、四時間煮沸て取出し、水で洗ふのです、

(二)は『トワデル』〇、五度の漂白粉溶液に一時間浸し、後引上け水で洗ふ、

(三)『トワデル』〇、五度の鹽酸液中に三十分浸し引上け水洗す、

此の順序を今一度繰返すのです、

糸子　それで出來上りですか、

絹子　かやうにしましてもまだ完全の物ではありません、故に之れを半漂白といひます、本漂白は猶之れを幾度も繰返しませんと純白にはなりません、しかしさう度々煮たり洗つたりしますと自然地質が弱りますから普通は草原で曝し、日光や露に一週間も觸れさせ、後漂白粉及び鹽酸液に通ずるのです、此の他麻、苧麻『ラミー』等も略同じわけです、

糸子『お母様の御話に昔は布を漂白すに只水で洗つて初めから野原へ並べて乾した計りだとの事でしたがそれでも漂白せませうか、又何故漂白せるでせうか

絹子『左樣、あれは野原に自然『オゾン』といふものが發生しまして、色素を酸化させて純白にするのですが、あれでは只日數と手數とが多くかゝつて、急の事にはゆきません、夫から次は羊の毛のお話しませうか、

(四)羊毛は如何にして精練漂白すべきか

羊毛は攝氏四十五度の温湯の中に入れ羊毛の石鹼質を溶き出させるがよいのです、此の液は後に加里鹽類の製造に使はれますよ、夫から脂肪を取除ける爲めに水千分の中三十乃至三十五の『マルセーユ』石鹼を溶かし、此の中に入れ温度四十五度位にして數時間浸した後引きあげて水洗するのです、夫から毛糸は毛のときに天然の不純物は取りましても紡績するときには『オリーブ』油等の油垢がつきますから之れを取除けんければなりません、之れを爲すには

略前と同じく毛糸を攝氏四十五度の石鹼液に浸し二三時間の後引き上げ水洗して乾燥させるのです、

毛布も油質を除くには毛糸と同じ方法でよいのですが、綿毛交せ織物の時は、先づ湯熨手法をやつて纎維收縮の度を等しくして後石鹼液を以て、前と同じ方法にするのです、

(五)絹は如何にして精練漂白するか

糸子は益々興に入り

色々な仕方もあるものですねー、併し木綿と麻と毛とは承りましたが次は姉さんのお名の絹ですねーどうぞ序にお話し下さいな、

絹子『夫ではお退屈でせうが、今少し辛抱して御聞下さいよ、

絹は蠟、膠、脂肪質等を含んで居ます、故に先づ之れを取除けなければなりません、そして舊來の方法では只藁灰汁で煮ますけれども、それは舊式ですから、やめまして新らしい方をお話しませう

本邦產の生糸の精練漂白は先づ生糸百匁に對し十五匁の『マルセーユ』石鹼と三匁の洗濯曹達とを程好き水に溶かし生糸を浸し沸ること二時より三時位の後取り出し、又十匁の石鹼と二匁の洗濯曹達とを水に溶して前の糸を入れ、一時間から一時半位煮て後取出し、次に又少量の洗濯曹達を溶かした液に前の糸を入れ石鹼液を去り、尙繰返して水洗し最後に少量の醋酸を混ぜて水中を通し其の儘乾燥のです、さうすると、目方は二割程減じますが之れは練減です、そして白色繭から取つた糸は別に漂白の必要はありませんが、黄色繭から取つた糸は微黄色を帶んで居ますから漂白を行ひます、

漂白は、羊毛の時と同じです又過酸化水素を用ふることもあります、過酸化水素は、過酸化『バリユム』に極薄い硫酸を入れると白い沈澱を生じますが其の上の澄んで居る水は即ち過酸化水素溶液でありますから、之れに浸せばよろしいのです、

野蠶糸を精練漂白するときには(一)『トワドル』一度の鹽酸中に一夜浸し置き後取り出して水洗し、次に絹のしかたと同一の手續を經て精練します、漂白も亦絹羊毛と同じです、

臺どころ

中島春郊

鹽魚の鹽ぬき

一般の鹽魚を鹽拔きにするには、濃厚なる鹽水に浸して、鹽拔にするものなり、併し何程の良法を以て鹽拔きするとも、鹽魚は矢張鹽魚にて、産の生魚とは成るべき筈のものにあらず、然れども魚の性質により、生魚同樣に成るものと、鹽氣のまゝよく成るか、又鹽氣のよき鹽魚といふ迄に成し得るなり、それは眞潮に生息する魚と、玄潮に住める魚とによるものなり、その區別の大略は左の二三によりて知るを得べきなり

鹽鱈の如きは、玄潮に住む魚なるが故に、鹽拔の法によく叶ふもの丶標本なり、鹽拔をせんとするには、鹽鱈の頭を切取り、二枚に開き、極めて濃厚なる鹽水に十時間程浸し置き、其鹽水を捨て、更に鹽水を拵へて、再度五時間程浸し置きて、其水を捨るべし、第二の鹽水は、前の鹽量に半減するをよしとす、第三に四回眞水には五時間浸し置かば、鹽氣は悉く拔け去るものとしるべし、

それより煮魚とするとも、刺身にするとも、隨意にして旨煮にするは、一般の魚を煮ると同樣にして然るべし、併し割合に甘き方をよしとするなり、

刺身としては、別段用ひ方に變りなしと雖も、三杯酢即ち同じ分量の酢と醬油と酒を附け、附添のツマは葱の白みを輪に薄く刻みて、山葵又は生姜をつけるを宜とす、其外生魚のなき時、又は偏鄙にて生魚に不便利の向は鹽鯛杯を刺身になすは、皆此方法を以て、眞鹽魚の鹽拔調理としるべきなり、

鰹、鮪、鰤の類、何も玄鹽もの、鹽魚として、是等は何程鹽拔をするとも、眞鹽魚の如く生魚の代用をなすものにあらず、前にも陳る如く、只鹽氣となる迄にて、是を旨煮になすべきものにあらず、故に強て調理せば、口にする事の出來ぬ迄なり、矢張此種類のものは、味淋醬油に浸し置き、燒きて食するに

＊　＊

止まるものなるべし、
鮭、鱒、此種類は川魚として著名なるものなれども、是も玄潮魚と同様にして、鹽拔を爲し得べしと雖も、味淋と醬油とに浸し置き、燒きて食するの外なかるべし、

又中魚にて鮪、小魚にてサンマ、是等は鹽拔の功なきものとしるべし、此外眞潮魚、玄潮魚を問はず大小の鹽魚として其多きこと擧て數ふべからずと雖も、一つとして鹽拔を爲し、生魚の代用とすべきものなし、尤も代用の必要もなければ、一々魚名を此處に記す迄もなきことなり、

菜類の調理法

◎芹　すべて腕物のあしらひに用ふ、あまり煮え過ぎてはあしきものなり、まづ束のまゝよく洗ひて芥を取り、ザット湯に通して、一寸五分ばかりに切り椀の中へ種物と共に入れて、煮沸たる汁を盛り、椀の蓋をなして出す手順なり、

◎芹の三杯酢　是はザット湯煮て程よく切り、三杯

酢を掛けるなり、魚は並品は鰺、上品なれば鱚をよしとす、又魚なしなれば花鰹を上に撒くべし、

◎田芹　是はよく湯煮て、程よく切り、三杯酢をかけ、花鰹をまきて食するの外なし、併し總菜には素燒魚の煮汁にて煮るも可なり、

◎三ッ葉　もやし三ッ葉、糸三葉と同じ椀物のあしらひなり、是はそのまゝ水にてよく洗ひ、一寸六七分に切り、椀へ盛る際に、暫時鍋の中へ入るべし、手間取れば、煮え過ぎて見つきあしく、且つ味も劣るなり、

◎根三葉　是は湯煮て、細く切り、三杯酢をかけて花鰹をまくべし、

◎小松菜　湯煮て、三杯酢を掛るをよしとす、酢魚を入れば尚よし、魚なしは花鰹をまくべし、

◎小松菜の胡麻味噌和　湯煮たるものを細かく切り黑胡麻を煎りて味噌に擂込み、砂糖を割合多く入るをよしとす、

◎小松菜使用の種々　魚の煮汁にて煮あげ、魚に付

け合すもよし、又油物を入れて煮るも、總菜には可なり、雜煮に入るは是もよし、切干大根を入れて浸すもよし、其外二三の風流美食に料理する法あり、

味噌汁の材料

味噌汁は毎朝の事にて、さて何を入れんかなど首をかたげるより、左のうちにて撰べば、日々に目先否口先をかへる事も出來んか、

△せんばけ、△芹 △千六本 △小松菜 △いてふ大根 △鶯菜 △豆腐 △三つ葉 △蕪 △蕗 △油揚 △若布 △白瓜 △牛蒡 △薩摩芋 ▽切干 △苣菜 △蓮根 △薯蕷 △芋莖 △菠薐草 △里芋 △八ッ頭 △百合根 △葱

上流女生徒の美風

女學生の風儀甚く卑猥に傾ける此頃、上流社會なる淑女の學生達にして、其の風俗一般に儉德を尊むやうになり來りしとは、喜ぶべき兆候と言ふべし、麹町區永田町二丁目の學習院女學部（元の華族女學校）は、近來生徒の數非常に增加し、現に同中學部及び小學部丈にても、六百餘名の多きに達し、從來の狹隘なる校舍にては、迚も收容し能はざるより、茲に增築の必要に逼られ、愈着手に及びしが、附屬小學部の如きは、其位置校内の東南隅元運動場の一部にして、已に昨年十一月上旬より工事に着手し居り、來四月三十日竣工の豫定なり、文部省技師久留正道氏の設計、同省御用土木請負石井權藏の工事負擔にて、總坪數二百二十七坪餘、木造西洋形二階建この内二百十坪餘は階上標本室、裁縫室、教員室、普通教室三室、階下は生徒休憩室、手工室、教員室、普通教員室等、此他厠等が十七坪餘、いづれも文部省規定の校舍建築法に從ひ、衛生と堅牢とを主眼にせり、此工事竣成に至らば、引續き雨天體操場と割烹室の增築に着手する豫定、幼稚部の如きも目下百餘名の多きに達し居れば、漸次建增の筈なり、さて從來同校の女生徒等は、何れも上流の家庭に愛育せられし者のみなれば、衣類の如き持物の如き皆華美を競ひ合ひ、附添ひ居る女中等さへも、中流以上の服裝をなし、自然驕奢にのみ流れ行く風習なりしが、日露戰役後は、幸にも此の弊風頓に一變し、各生徒等に競ふて質素を尊むに至り、登校の往復もこれまで、馬車又は所有俥を常用せしに、今日にては風雨はげしき日の外は「成るべく電車を利用して、同校の横通りなる停留所まで便乘し、若くば全然徒歩にて往來するものあり、附添の女中も幼稚生及び小學部初級生の外は、大體これを廢止する事になれりといふ、

婦人教育界の一消息

◎女學校の博覽會出品　近く開かるべき東京勸業博覽會には、各技藝女學校より生徒の製作品を出品する由にて、今聞き得たる所に依れば左の如し▽女子美術學校　本郷弓町の同校にては、各科擧つて出品する由にて、西洋畫科にては幅四尺五寸の油繪額を出品すべく、目下各生徒に野外寫生を爲しめ居り、日本畫科にては、三尺巾の絹本に櫻花と鴛鴦の圖、刺繍科にては高野凉堂氏が苦心して下圖を作れる元祿風俗少女逍遙の圖を二枚折屏風に刺繍せしものにて、費用三百餘圓を要する大作を造花科にては四季の草花を以て飾りたる經三尺五寸の花環（費用一百圓餘）を、裁縫科にては和洋衣服及附屬品を人形に被せたる者を、編物科にては五尺四方の卓子懸け（費用六十圓餘）を、和洋料理科にては各種菓子類を出品すべく何れも目下製作中なり▽共立女子職業學校　神田一ツ橋なる同校にては、高さ六尺六寸餘なる二枚折屏風に、光淋風の菊、薊、萩等の草花に金絲もて霞を畫きたる刺繍屏風（費用百八十餘圓）及高さ五尺に餘る花籠に種々なる造花をさせるもの、其他裁縫編物等、何れも多額の費用を要したるものを出品すべく、目下夫れ〴〵製作中▽東洋女學校　神田仲猿樂町なる同校にては、同じく二枚折屏風に豊岡東江氏の下圖にて秋色櫻の圖を刺繍したるもの（費用百八十圓餘）及び松に鷹の刺繍をなせる衝立（費用百三十圓餘）其他摘み細工鶴の置物、及白骨踊、藤に燕、盛り花、鷹等の額面を出品すべく、昨年十一月より各生徒夫れ〴〵製作中なりしが已に出來したる由

◎大日本婦人農蠶會養蠶實習　去十四日赤坂溜池なる同會事務所に於て、役員協議の結果男爵夫人松平須磨子の提案に係る養蠶實習を、愈よ行ふ事に决したるが、幸ひに谷子爵の養蠶室不用となり居るを以て、之を借入れ、會員千家男爵夫人其他有志の婦人交代にて、春蠶飼育に從事する筈なりと、尙ほ今年の夏期農蠶講習會は幸久保顧問よりの寄附金五百圓を經費に充て、講習料を徴集せざる事に决し、横井、澤村の兩博士は、旣に講師たることを承諾されたる由

◎女子美術學校の家婢割烹部　本郷弓町の女子美術學校にては、今回別に家婢割烹部と云ふを設け、專ら雇女たる者をして和洋の料理法を傳習せしむる由なるが講習時間は、午後一時より四時迄とし、實費七錢の外に講習料を要せず教師は赤堀菊子木村利根子の兩女史なりと

手跡と裁縫

小川直子

大凡女の手業には種々ありて、いづれを先としいづれを後にといふ物もなく千萬のわざ殘る方なく習はまほしき事にはあれど、中にも旨とすべきは手かく事ならん、いにしへ人の書は姓名をしるすに足るといひし事もあれど、同じくはうるはしうこそかゝまほしけれ、次にはたちぬひのわざならんいかにといふに、此二つは古より婦人四藝



といふ中にも數々へられ、はた、今の世にも女子達が生ひたち給へる後、人のまねくがまに〳〵いづれへなりともとつぎ給はむに、其家にゆきても、先づうからやからは、夫のはらからといふも、今の世は海山遠く隔り居てたとへば姉は陸奥に妹は日向にといふさまに、それ〳〵のたつぎによりてものせらるゝもあらん、此人々へも文をおくるとか、はた姑に代りて文もかくべく、あるは、何くれの品どもに書附をするなど先づ何よりも、手かく事の多さぞかし、かゝ

る時手の拙きは、我身にも苦敷もはづかしくも思ひはた、其家のためにも面なくて口をしきわざならんかゝる人は、與所より文を得たるにゝ嬉しきものゝ我手の拙ければ、かく事の難きより、此返事をせむとおもふにも、今日よ明日よとためらふ、ほどにおくれおくれて、むらいの罪とも成行まゝに、ひときは物うく覺えて遂に打捨て置き、むらいの罪を重ぬるぞかし、是に引かへ水ぐきの跡うるはしう龍といふものゝはしるがごとくすが〱しうも、あるは、風にゆらるゝ靑柳のごとくやすらかにも書流しつゝ其言葉さへ、逢ひ見てかたらうよりも、猶ねもごろにつばらかなる文をやりつゝ、尋ね問ふ事もしば〱ならん、うるはしき文を得たる斗りめでたく嬉しきものはあらじかし、されば君だちも心をこめて習ひ給へ、彼新井白石大人が學ばれたりし古事などよき鏡なり、次に裁ぬひのわざを旨とすべきは誰も〱知る事なれど、今の世はくさ〲習ふべき業の事繁きより、いつとなく裁縫のわざには、おもきを置かぬたぐひなきにしもあらずして、此の業に手づゝなる人まゝあるやうにも聞ゆるぞかし、かゝる人與所にゆきたらん時、譬へば姑は古の手ぶりに生ひたてるからに、裁縫の業には妙にして、ありとある家内の人々の衣服は人の手を頼まず、よきもあしきも不斷の物に至る迄手ばやにし、よき物は袴よ帶よとうるはしうせらるゝを見ては、嫁なる人我針の拙きを心苦敷おもふ折ふし、姑はそれとも知らで、女のたしなみなればこれ位は容易からんと、羽織よ重ね物よと、うるはしう染たてたるをとりいでゝ、これぬひてよといはるゝ時否みがたくて受けたるものゝ、汗あゆる計りうれたくて、いかゞはせましと涙ぐまる、折もなどなからん、かゝる手づゝの人は、衣服の疊みざまもあしくて、夫なる人の袴をたゝみても、ひだを崩し姑の被布なども折目をゆがめなどして、其あしき疊みざまのまゝにて箪笥にまれ櫃にまれこめ置きつゝ、日を經てとりいでたる時、必あしき癖の折目などつきて、ふきは押しへされ、見るかげもな

く、袖口わしはになりてしゞみ上りなしどたらんに其まゝにては着るべくもあらねば、それ疊み直せよ火熨をかけよと打さわぐほどに、姑にもあれ夫にもあれ、與所へものせむとするに、契り置きつる時刻にもおくれなどすれは、必夫も腹だゝ敷なりてつぶやきなどもし、おのづから叱りもすべく何となく家庭もおだやかならず見えて、召仕ふ者共にすらはづかしき思ひすべし、これに引かへ、其業よき人はさる見苦敷事なく舅姑の衣服はさらにて、何くれとうるはしう縫ひたて手はやにするより、家の中の人々に垢つきたるものなどは着せ置く事もなく、垢つかざる程にとく縫ひ直して裏かへしなどもし、うしろを前にも兎やかうと工夫をこらして、うるはしうぬひたつる事なれば、いつも折目正しく垢づかぬものを着せ置くべく、假令乏しき家にても富人のごとくに見え、夫の怒りにふるゝうれひもなく、家庭やすらかに睦まじければ與所の見る目も樂しげにこそ見ゆべけれ、さるからに君だちよ、師に随ひてたちぬひせらるゝ時、縫目のゆがみたるをも、印の違ひたるをも、師の君が直してよと、のたまふ時、腹ふくるゝおもゝちなどゆめ〳〵し給ふ事あるまじきわざぞかしと、例のおうなのくりことをなむ、

衣服に就て

女子學院教頭　中川まさご子

人類に着物がない時は、第一寒暑に堪ゆることが出來ません、熱帶地方に住む或種の野蠻人は、能く裸體で居ましても何ともありませんが、半開國や文明國の人類及び温帶寒帶國に住むものは、着物がなくては、迚も氣候の變化に應じ、健康を保つことは出來ません、この氣候の變化といふがありませんでしたら、人類の皮膚は一定の厚薄となるか、或は一種の羽毛を生ずるか致して、體温と外氣との、釣合をとることが、出來ませうが、宇宙の現象は、左様の事を許しませんから、つまり衣服によりて、體温

と外氣との調和を、保つより致し方ないのです、即ち暖かなれば單衣を着、帷子を着て涼しくし、寒むければ綿入を着、羽織を着て、體温の散らぬ樣にするのです、第二に衣服は品格を保つ上に必要です、人類は、男は男らしく、女は女らしく、子供は子供らしく、老人は老人らしくして、それ相應の品格を保たねばなりません、今若し極端に考へて衣服がないとしたら如何でしよう、男女老少の區別さへ、殆ど見別くるに苦む位で、之は野蠻人の國などで、屢々實見するところです、それで男子は男子、女子は女子、或は職業により、或は身分により、或は年齡により、皆相當の衣服を着、その上尙、裝飾迄するのです、此の如く衣服は必要でございますが、之等に關する知識は、男子にあつては案外に缺げるものでありますから、女子に於て充分世話せねばなりません、今これ等を數節に分つて、說明しませう、

衣服の材料

衣服の材料として數へらるゝものは、大別して四種となります、毛布、綿布、絹布、麻布等です、

▽毛布、之は外國と交通が開けてから、我が國人が多く用ゐる樣になッたもので、フランチル、羅紗、セル、カシユメル、唐縮緬等でありますが、現今尙多く外國から輸入し、或は原料を輸入して、我國で製造するといふことになッて居ます、毛織物は體温を保ッには、第一等でありますから、冬向の着物には特に適當で濕氣を吸收せず、輕くして柔かに、身體の當り氣持のよい所から、衞生上にも甚だ結構と思ひます、併しながら、價格が高いのと、洗濯のむつかしいのと、蟲の害にかゝり易いことは、缺點でありますから、之等に向つては特別の注意を要します、即ち蟲害には毛布の中にナフタリンを入れ、一ケ月一回位日光に晒らさねばなりません、それから價格は仕方ありませんが、

▽綿布　綿布は我國に於ても、多く產出しますから古來通常服には多く之を用ゐます、體温を保ッ上から申しましても、毛布の次ぎに位し、洗濯にも堪へ

價格も廉く、保存期限も餘程永く、蟲の附く憂もありません、唯稍々重くして光澤に乏しきは缺點です、それは外見を繕ひ、華美を好む人からは、退けられますれど、實際は衛生上經濟上等に於て、有益であります、

▽絹布　之は我が國の主要なる物產でありますから外國にも盛に輸出します、その優れる點は、美しき光澤あること、肌に觸れて柔かに感ずること非常に輕きこと等は重もなるもので、又た其の缺點には、洗濯に堪へざること、價格の高貴なること等であります、それで絹布は、多く晴着に用ゐられ、通常服としては、紬、太織等の二三種しかないのです、

▽麻布　之も我が國に多く產すれど、衣服としては餘り適當と申されません、即ち體温をよく奪ひます着するとき冷やッと感ずるのは、熱を導き去る證據です、その上麻は能く濕氣を、吸收するものですから、濕りたる天氣には、直ぐ水分を含む樣になりまして衛生上には宜しくありません、夏時の衣服としては、一寸快き樣ですけれども、人體は體温に制限がありまして、過不足は皆不快を感じますから、之が爲に病氣になることは往々あります、之を用ゐるに、能く注意して、屢洗濯し、日光に曝し、直接肌に觸れない衣服に仕立てる事が、肝要です、價格は製品により、餘程高下があります、（リネン）リンネルは、隨分高價でありますが、普通の麻布は、木綿とそんなに違ひません、

衣服の裁縫及び補綴

裁縫の一般婦人に必要なることは、皆さん御存じの通りですけれども、兎角今日は、學ぶべき科目が多いために、唯一通の理屈だけを心得て、技術に熟練する人が少ないのです、特に白き物を、つぎはぎして、見苦しからぬ衣物を仕立てるとか、大人物を小人物に直すとかいふことは、特に家庭に必要なことですけれど、多くの人は新らしき物の取扱ひに熱中して、古物の取扱ひを研究しません試みに考へて御覧なさい、一家一年中の新調衣服の數は、いくら

ありませう、僅に數ふる程です、併しながら仕立換又は補綴すべきものは、いくらありませう、實に數へられぬ程です、子供の多い家庭等には、中々堪まッたものではありません、されば婦人は裁縫補綴に關し、精切迅速に、修繕して置くことを、心掛けねばなりません、

今や被服の種類は、段々數多くなりまして、從て從來の鋏と、針と、尺度とのみでは、滿足することが出來ません、即ち洋服裁縫の如きは、裁縫ミシンを使用するのですが、之れはシャツその他單物を仕立ッるには、至極便利でありまして、時間も省けるし手際も綺麗に出來ます、唯機械の高價なるが爲に、各家庭に備へることが、出來ませんけれども、その使用法を覺えて、他日の用を待つことは、肝要です

衣服の保存法

衣服は保存の方法に注意せざれば、高價なるものと雖、速く用に立たなくなります、先づ取扱は叮嚀にし、不斷用ゐて屢出し入れをする着物は、手近に置き、晴着にするものは、物にふれざる所に良く藏め襯着、足袋等の如く、汚れ易いものは、別に一纏にして、他の衣服と交へぬ様にするのです、そしてその藏め方の注意は、

第一皺の出來ないやうにたゝむこと、
第二衽、袖口等の壓迫されぬやうにすること、
第三紋附は紋に紙を當ッること、
第四一度着たるものは、衿に紙を當ッること、
第五毛布類には、樟腦、ナフタリンの類を紙に包みていれをくこと、
第六糊強く、硬き地質の絹物は、折目を屢變ふること、
第七藏むる器物は、桐箪笥の如く、取扱に便にして、外部の濕氣を、內部に通さゞる様のものなること、
第八場所は日光の直接に當らざる、空氣の流通よき、非常の場合に不都合なき、盜難等の恐なき所を選ぶこと、

此の如くして藏め置くも、時々取りだして、日光に曝しさゞれば、蟲や黴の害に、かゝることがあります、日光に曝す時の注意は、

第一桃色、藤色、黄色、萌黄色等の交つたものは陰干にすること、

第二夜具、蒲團の如き、強き光線に曝すの必要あるものは、上に敷布の如き物を掩ふこと、

衛生上より申しましても、日光に曝すことは、大に必要であります、傳染病菌の如きも、日光に觸れて生存力を失ひ、或は傳染力を失ふものが多いのですから、不斷着は假令洗濯せずとも、屢日光に曝さねばなりません。

衣服の洗濯

洗濯には、水道の水や、河水の如き、軟水の清きものを用ゐねばなりません、これも飲料に用うるものは、清潔なれども、海邊へ近き所には、時々鹹いものがあります、洗濯に付注意すべきは、

強く揉んではならぬこと、強く絞りてはならぬこととなり、

中にも毛布と麻布は、殊に注意を要します、

さて洗濯の方法は、日向水若しくは微温湯に、石鹸洗濯曹達或は、灰汁を適宜に加へ、之に洗濯物を浸しおきて後、手にて揉み　或は刷毛にて擦るのですその浸し置く時間は、襯着、足袋、手巾、敷布の如き、白布類は夏期に七八時間、冬期に十二時間位、その他の者はそれ以下で充分です又熱湯に投じて洗へば、よく汚穢を去り得ますれども、染色を褪色する憂がありますから、白布類の外なるべく熱湯を避けねばなりません、併して最後に清水を以て度々揉み出し、石鹸等の殘らぬ樣にするのです、

次に干し方に付ての注意は、乾燥せる後までも曝しおかぬことです、品物によりては、稍濕氣ある位の時に、取り入れてたゝみつけ、皺を伸して陰干にするのです、足袋、手布の如きは、濕氣ある烙熨をかけ、再び乾かします、

衣服の汚點拔

▽油　日光に曝しても、石鹸で洗ッても、とれぬ油汚點は、ベンジーンといふ藥品、又は揮發油を海綿又は筆の如きもので、その部へぬり附け、毛織物を敷いたる其上に吸取紙を載せ適宜熱せられたる烙熨を掛け、能く擦るのです、これで若し拔けませんでしたら、同じ方法を二回三回續けますれば、如何なるものも取れます、若し揮發油の臭が殘りましたら湯氣に觸れしむれば消えます、

▽汗及び黴　アンモニア水の極めて稀薄なるもの即ち嗅いで少しく感ずる位のものを、その部分へ塗り附ければ、拔けます、又蓚酸を淡く溶かして洗ひ後淸水ですゝいでも宜しい、

▽鐵銹　稀鹽酸をコップ一杯の水に四五滴入れ、此の中に三四時間浸すか、又は酢酸を其所に塗り水で洗ふか、蓚酸を濃くとかして、其液にて洗ひその後を水にて洗ふか、にて拔けます、併し白布に限ります、若し色物ならば、軟石鹸と水とを、同容積に溶かし、其中にグリセリン即ちリスリンをその目方丈

入れ、能く攪きませたものを、塗り附けて、二三時間放置するのです、

▽洋墨　アルコールに、アンモニア水を、大抵同じ位混せ合して拵へた液を、筆の樣なものにて、何回も其の汚點に塗れば拔けます、

▽尿水　アルコールを淡くして、極く僅かに硝酸を入れ、嘗めて酢くない位にして洗ひます、

▽衿垢　毛布類、ビロード、繻子等は、眞綿を熱くなる程、火に烙りて、拭き、或は食パンにて壓しつけて取るもよし、燒き餅の粘る部分を、おしつけて取るもよし、又普通の絹、木綿、縮緬の衿類は、揮發油を白き布片に浸してふき、乾燥せる空中或は火上にかざすべし、

此の外各種の方法がありますけれども、化學的方法は地質を損するの恐もありますから、むづかしいものは、專門家に頼まねばなりません、

談話應答の心得

學習院教授
女學部長　下田歌子

人と談話し、人に應答せんとする時には、先づ心を沈着けて、そは〳〵とせず、かたちは毅然として恭しく、而も嫣然に愛々しくならなければならぬ、而して物云ふ時は屹度正しく、先方の顔を見て談話するのです、物云ひながら、さしうつぶきたる、又は、側見し、横目づかひなどしたる、孰れも禮の正しきものではありません、言語は中聲にして高からず、低からず、爽やかに判然とするが宜しい。すべて、音聲の清濁は、天資による事が多いけれども、これも幼少の時から、注意して直せば、ある點までは直るものですから、能く注意せねばなりませぬ。女子の音聲は、清く細く凛として、且つ愛らしい所のあるが宜けれど、殊更に作り聲などしたるは、聞悪いものです。言語は、なるべく上品であつて、なまりの無いやうに、又なるべく、誰れにでもわかり易いやうにあらなければなりませぬ。……けれども、無暗に上品ぶつて、勿體らしいのはよくない。早言は無論悪いが、餘り緩くり過ぎて、聞く人が戻かしいやうに感じるのもよくないです。又談話の興に入るまゝに、唾を飛ばし、息を吹きかけるなど、以ての外の事である。能く氣をつけねばなりません。年若き女子の、人も無げにさし出でゝ、饒舌りつゞけたるは、興さめ、笑止に思はれるもの、殊に、知らぬ人などに對しては、耻かしさうに、萬事控へ目に見えてるのは可愛らしいものです。……が、何を問うても返答が出來ないで、『ハイ』『イ、エ』とばかり云うて、うつぶいて許り居るのも、云ひがひ無く、輕蔑され易いやうに思はれるから、これはなるべく恭しく謙りて詞少なで高慢らしくない風の中に、一つ確乎とした重りがあつて、自から、人が尊敬の意を表するやうにありたい。其れで、答へべき事は、其要點丈を、判然と答へるやうにするのです。やたらに、手真似をしたり、身ぶりをしたりするのは下

品です。さうかと云つて、石地藏のやうに固くなつて、氣力の無いやうな咄しぶりもいけません、又をかしくも無いのに談話の間で「エヘヽヽ」などヽ笑ひ／＼咄すのもいけません。

又、大勢集まつて居る所で咄しをするには、なるべく甲乙の區別を立てず、皆に行き渡るやうに咄すのです。左樣して居る中にも、尊敬すべき人、親しむべき人、餘りに親しむべからざると、餘りに馴れ難きとを、心の中に思ひわけて、其れもさう際々と目だヽぬやうにするのが、和徳といふことを尊しとする女子の本領です。

これで、談話應答の上に就きての注意は、ほヾ申しましたから、今度は、其對話中なるべく、用ひて宜しからうと思ふ詞と、宜しくなからうと思ふ詞とを擧げて、參考の一助と致しませう、先づ用ふべき詞、及び其咄しの種類、地理、即ち、山川の風光、道路の便不便、及び、遠近、氣候の異同、物產の類又は、動植物の咄し、即ち、ある鳥獸の飼ひ方、或ひは、其種類に就きて面白き物語等、草木、花實の培養法、其効用等、又、歷史、傳記、文學、美術の談話等も、極めて、有益にして、趣味があるでせうけれども、其れは、其人々によつて、注意しなければなりませぬ。殊に多人數集まりたる所などでは、なるべく何人にもわかりて、而して、卑野ならぬ、事柄の詞を咄すべきです。

女子の談話には、風俗上の事、即ち、衣食住等の事に就きても、種々問ひもし、答へもすべきが多いであらう、且つ有益でもありませうけれど、これはやヽもすると、他人の髮形や衣服の品評等に亘りて一種嫌ふべき事柄にも及ばないとも云はれぬから、能く注意して、其事柄も詞も選ばなければいけませぬ、又、人は、大抵自己の得意の事、學び得た學問技術等のことを尋ねられるのは悅ぶものです、而して、勞れも忘れて、いろ／＼彼等から、進んで咄すものですから、なるべく、左樣のことを咄させるやうにするが宜しいです。それはひとり、先方の心を

愉快にさせるのみで無く、人の長所や、經驗咄しを聞くのは大層爲になるものです。

又、人を褒めるやうな話は、誹ると違つて、まことに、宜いことですけれども、現在の人の上であつたならば、多人數の中などでは、能く斟酌して、咄すが宜しい。若し、反對の人が居た時には、其人をして、不快の念を懷かせるであらうし、又、胸の狹い人が在つた時には、大きに、嫉妬の念を起して、餘りに、一方より褒めてがあると思ふ故に、寧ろ攻擊の材料を見出さうとするかも知れませぬ。……であるから、人と人との交際談話は宜い事としても、又其れすらも能く注意をせねばならぬのです。

外國の咄しは、是れを聞く人の爲に見聞を廣くして、まことに宜しいですけれども、これも、さつぱり、對外志想の無い人、又、其れを知らうとも思はないやうな人に咄す時は、此方では、わかり切つてると思ふ程の事でも、先方にはわからず、更に興味を感じないのみで無くて、惡くすると、妙な。不快な念をさへ、起させることが無しとも云はれませぬから、其れも、能く注意せねばなりませぬ。

又、用ひてはいけ無いと思ふ事柄や、詞の種類を申せば、卑しき詞、猥褻の咄しは、いかなる場合でも用ひたり、致したりしてはいけませぬ。殊に、子供や、妊婦の前では、悲哀、忿怒、殘酷、驚愕などに關する咄しをしては惡いです。

議論がましい談話や、說明がましい詞は、決して濫りに用ひてはなりませぬ、女に理窟つぽいとか、高慢らしいとか見えるのは淑德に缺けたる所があるのです。俗に云ひ馴れぬ漢語や、外國語はなるべく使はぬが宜しい。

自分の才學技藝に誇り、富貴權勢を示すやうな話しぶりはつゆばかりもしてはなりませぬ。

また他人の聞くを好まぬやうな事柄は、決して釣り出しなどして、咄させる等の事をすまじきは云ふ迄も無く、聞くとも無くて聞きなどした時には、素知らぬ風をして、且つ、決して、人に移し咄すもの

ではありませぬ、殊に一時の座興にとて、嫌がるやうな咄しをしかけたり、又は、あなどりて聞いたりするやうな事はゆめ〳〵女子のなすべきことではありませぬ。ふと無邪氣に云ひかけた事でも、嫌な顔色が見えたら、そつと何とも無きさまに、咄しを、他に轉ずるものです。これが、禮法の心の整へに屬する、談話の心得の概略です。

故奥村女史逸話

奥村五百子女史と親交ありし某貴婦人の談によりて、逸話二三を記すべし、

▽門閥を顧みず　女史の父は先々代九條公の妾腹に生れ、轉法輪三條家に入り家出したる人なれば、今の二條鷹司及先代九條の諸公は、女史の爲には皆從兄弟の間柄にて、其母も亦今の西園寺侯爵家の出なれば、門地頗る高けれど、女史は門閥を顧みずして、交際に上下を論ぜざりしなり　△退隱したる光徳寺　女史の昨年來退隱したる郷里唐津の光徳寺は、兩親が女史を二條今出川御殿にて擧げたる後、出家し住職となりたる寺なり、同寺は豐公時代に、韓國釜山に創立されしを、後に唐津へ移し、住職は代々諸公より出で、最も由緒ある古刹なりと　△少女の國事奔走　幼より弓馬槍劔の武術を好み女らしき遊戯には目も與れず、十四歳にして既に國事に熱中して十七歳の頃は既記の如く、男裝して諸方に奔走せり△愛國婦人會の創立時代　女史は北清事變の當時渡清して軍隊を慰問し、深く感ずる所ありて、翌三十四年二月中故近衛公爵の助力により、愛國婦人會を起したり、▽半襟二掛け　此の日女史は、日本の婦人全體が、年に半襟二掛けを節し、其の費用三圓前後を寄附すれば、本會も忽ち成立すべしとて、半襟節儉論を唱へ、大に世の注意を惹きたり△公爵家へ居催促　當時岩倉公爵婦人を會長に推したるが、婦人の承諾なきより、此上は辨當持參にて、玄關へ坐り込むべしと意氣込みしに、公爵婦人も其の熱心に感じて承諾したりと△お婆さん　貴婦人等は常に女史を呼ぶに、お婆さんと云ひ、自身も此婆アがと力味つゝ、平素「知事が何と云はうが此婆はア承知せぬ」といふ口調にて論じ居たり△女史の風流　豪放男子を凌ぎたる女丈夫も、案外の風流家にて、嘗て

手習ひをきらひし罪が報い來て
くろしい事が日には二三度

と洒落れ、又は遊説に赴くとて、

かすむ野をふりわけ行くやのりの道

と草鞋穿きに數珠爪繰りつゝ立出でしが如き優しき振舞ありしとぞ

▽五十萬の會員　嘗て前山博士の診斷にて、三年間の壽命は請合ふと云はれ、然らば三年の内に、十萬の會員を得んとて、一層遊説に努めたる結果、終に會員五十萬に上るの盛況を呈したり、女史今逝くと雖も亦瞑すべし、



露國の風俗

文學士 八杉貞利

露西亞の一番良い時は、寒い所でありますから、矢張冬がよいのであります、是れは私の居りました彼得斯堡の御話をするのでありますが、丁度十一月の初めになりますと、東京の隅田川のやうに、あの都の中を通つて居るネバーと云ふ川が凍結いたします、さうして四月の中旬迄はすつかり雪に掩はれて居りますが、露西亞ではその間が一番良い時機なのでございます、即ち種々なる娯樂、種々なる學問上の仕事は其間に於てやるのであります、日の一番短い時は十時頃明けまして、二時か三時頃には暗くなります、さうして殆ど夜も晝も同じでございますから、舞踏であるとか歌留多の遊びとか云ふやうな娯樂は、夜も晝も同じやうに行はれるのであります、又日の永い時は午後十一時頃に日が暮れて、二時頃には夜が明ける、その日沒日出の間と云ふものは極く僅かで、それも全く暮れきつて仕舞ふと云ふことはない、露西亞の文學者は之を白夜と名づけて自慢して居りますが、或側から言へば缺點でございます、デございますから眞黒なカーテンでも下げなければ迚も寢つかれない、又夏は日本のやうに暑くはございませぬ、永く居つた人の話に、四年若くは五年に一度位は東京くらゐの暑さがあるさうでございます、それは勿論長いことではない、一ト月足らずぐらゐの間でございます、それから夏は雨が多く降りまして餘り愉快な氣候とはなつて居らぬ、殊に夏は家の

内外の修繕をするので、都會に住んで居るのは不愉快でありますから、生活の困難でない者は、家族と共に郊外の別莊に行つて、五六月から八月九月までは郊外の別莊に生活して居る、殊にあすこはフインランドが近い、フインランドは湖水があつて景色の美い所で、その邊には無數の別莊地がある、大きな金持は必ず一つの別莊を持つて居るし、貸別莊も澤山ある、書生なども家族の部屋などを借りて行つて居ります、それ故夏は都會は人も少くなり家も汚くなつて見られないのです、それを露西亞見物にお出になる方は、露西亞は寒い所だからと云ふので夏お出になつて、都會の一番汚い時、人が一番活動して居らぬ時に御覽になるやうなことがよくある、殊に露西亞の町は比較的に汚い所が多く、汚い着物を着て居る者などが澤山うろついて居ります、所が御承知の通り冬になりますとシユーバと申します毛衣を勞働者まで着て居りますし、汚い町はすつかり雪で掩はれて大變に美しい、それ故に冬期は極く良い時になつて居るのでございませう、

今申しましたやうに、永い間雪に掩はれて居りますから、普通の馬車を使ふことは出來ませぬで橇を用ゐます、露西亞の道路は近年は大變によくなりまして、大きな町は大概木で疊んでございます、さう云ふ所は普通の馬車で參つても不愉快なことはございませぬが、少し邊鄙な町へ行きますと、昔風の玉石を敷いてあります、其處を馬車でガラ／＼參りますと、身體に響いて非常に不愉快で有ますが、冬は雪に掩はれまして、其上を二頭立、三頭立、大きいのは六頭立の橇ですべつて歩くのは中々愉快であります、それでドライブするのが金持の遊びになつて居ります、

それで東京でも一番初めに馬車を造つて置きますと、その馬車を廢することが困難で電車を造ることが遲くなる、却つて新らしく出來た町は直ぐ電車を敷いて仕舞ふやうになります、露西亞などでも田舍の町へ參りますと……例へばヴォルガ河の岸にあり

ますヤロスラブルなどは、小さい古い町でございますけれども、歐羅巴的の建設が新らしいものでございますから、すつかり電車を敷いてございますが、それに引替て彼得斯堡はまだ馬車でガタ〳〵やつて居つて、電車にする計畫はしても實行の運びに至りませぬ、それで冬になりますとネヴアーの河が凍りますから其の氷の上へ電氣鐵道を敷くのでございます、

此の彼得斯堡はネヴアーと云ふ河を挾んで、兩岸に發達して居りますが、右の方の岸と左の方の岸との行通がうまくゆきませぬ、不便であります、夏になりますと丁度隅田川の一錢蒸滊のやうな小さい滊船で盛んに行通をやつて居りますが、餘り便利でありませぬ、所が冬になりますと、今申しましたやうに氷の上へ電氣鐵道を敷いて運轉しますから、兩岸の行通は非常に都合が好くなります、氷の上へ鐵道を敷くなど丶云ふことは、暖國の日本人などには想像がつかない所でございます、又さう云ふやうな事は露西亞人でも南の方に居る者は知りませぬ、あの都に來て初めて見て驚いて居るのであります。



◎露西亞の寒氣　彼得斯堡は緯度が北に寄つて居る割には溫かで、私の經驗した最も寒い時は零點以

下二十二三度でございます、二十四五度が極端で、三十度と云ふことは滅多にないさうでございます、イルクツクなどへ參りますと緯度は彼得斯堡より南でありますが、四十度ぐらゐには度々いくさうであります、併しもう二十三四度になりますと家から外へ出た時は呼吸が餘程苦しいやうな感覺がございます、

◎茶と酒　露西亞人の茶を飲むことは非常に盛んなものでございます、日本にも參つて居るか知れませぬが、茶を入れる器械を獨逸ではテーマシーネ、露西亞ではサモバルと云つて居ります、是れは露西亞語では自然に煮えると云ふ譯なんでございませうが、その湯沸へ一杯湯を沸して二三人で一息に飲んで仕舞ふ、斯樣に茶を好むのは寒い時分に温まつて宜いと云ふのが本になつたのでありませう、又露西亞人の飲みます酒はウオツカと云ふので、日本の燒酎のやうなものでございます、冬になると車夫などはそれを飲んだ勢ひで、二十何度と云ふ寒氣も平氣

で大外套を着て馬車の上に寢て居ります、

◎名の呼びかた　彼地では人を呼びますのに、其人の名前と父の名とを呼ぶのです、それでありますから吾々が行つて居りますと無理に妙な名を附けるのです、人を呼ぶに苗字で呼ぶのは極く疎い間でなければしない、向ふの名を知らなければミスター何々と言ふのですが、少し近く交際を始めました場合には、其人の名前と其人の父の名前は必ず覺えて居らなければなりませぬ、其人の名前に父の名前を附けて言ふと多少叮嚀の意を現はすので何さんと云ふ位になるのでございませう。

◎生活の程度　生活の程度は、上の方から言ひますと非常に高い、下の方から言ひますと隨分ひどうございますが、中等社會と云ふものは極めて少い、先づ行つて生活すると云ふ側から申しますと隨分困難でございます、それに一番困るのは部屋の代の高いと云ふことでございます、併し近頃は交通の便がよくなつたので、郊外から日々都へ通ふ人も多くな

りました、殊にホテルなどの部屋代は獨逸などの倍以上になつて居ります、

◎露西亞の道徳　露西亞の道徳が紊亂して居ると云ふことは皆なさう言ひますが本當らしい、併しそれは重に高等の社會でありまして中等の社會はそんなにひどい事はございませぬ、詰り下等になるだけよくなります、

◎新聞　新聞の發行停止、或は廣告停止など丶云ふのも度々ありますが、面白いのは斯う云ふ事があります、それは月極の讀者に配るのと、町で立つて賣るのと兩方あつて、其罪に依ては月並の讀者に配達するのは許して、町で立つて賣る事を禁ずると云ふことがあります、それでも新聞社の收入には餘程影響を及ぼすと云ふことであります、これがひどくなると全く止めて仕舞ふのであります、新聞の定價は上が一枚五六錢、月極は一圓五十錢位で、安いのは一枚三錢位のもあります、

◎貨幣　貨幣は一錢が一番小さいので、それより下はありませぬ、紙幣もございますが、それは帝國銀行の紙幣でございます、それも餘り澤山はございませぬ、

◎店　商人の店は大部分は日本のやうに店を開いて居る家に住つて居るので、外に店だけを持つて居ると云ふのも中にはございますけれども少いのであります、

◎食費　先づ紳士が一寸飯を食ひに行きますには一圓四五十錢(三マーク)で足ります、書生などなら五十錢(一マーク餘)もあれば宜しい、併し牧畜が盛んでありますから肉やバタは豊富で安く買へます、

◎わがをりし家　私は行つた當座は下宿に居りましたが、それから後は内務省に勤める醫者の家に居りました、其家の家族の間は誠に温かで大變愉快でありました、夏などは一緒に別莊へ參りましたが、兎に角露西亞人は外國人に對しては親切なもんでありますから能く世話をして呉れました、併し禮儀はやかましく言ふやうであります、

蒙古のはなし

鳥居喜美子談

▲蒙古の地勢　蒙古は階段なりの高原にして、北に進む程高く且つ寒氣一帶に強く、我等の居りしカラチンなどはズツと南部にて、蒙古の入口に過ぎざるも、新暦の九月頃には、已に結氷を見る程なり、又夏季にありても、華氏の百度と云ふやうなこと絶えて無く、よしあツても正午過ぐれば肌寒を覺ゆ、されば日本の如く暑中休暇と云ふもの無く、反對に寒中休暇と云ふがありて、其の期間は舊十一月下旬より三月下旬までなり▲王妃の御乘馬　カラチンの女學生は、總べて從順なるが、さりとて性質は極めて活潑にして、王妃の如きは其御氣性に於て、彼の地女性の代表的と申すもよき程にて、常に騎馬を好ませ給ひ自分(女史)も王妃に強いられて、騎馬を習ひ覺え、今日にては自由に乘り廻はす事を得るに至れり▲王の教育方針　は『蒙古は蒙古の國民的特性を發展する樣國民を教導せざる可からず』と云ふ御主義にて、鳥居(龍藏氏)にも其旨を語られ、鳥居も同意の旨を答へしに、王は非常に喜ばれ、先づ唱歌抔にありても、少年幼女に直に日本語のものを覺えしむるは不適當なりとて、いろ〳〵相談の上、通俗なる唱歌即ち『ひいらいた〳〵』とか、『舌切り雀の歌』とか、其他軍歌抔を自ら蒙古語に譯して、兒童等に學ばしめ、又日本の文部省檢定の教科書を參考として修身、算術等の書物を創作し現に本年中に出來上るべき修身教科書もある筈なり▲幼稚生と大人の生徒　昨秋より幼稚教育を開始せしが入學者却々多く、目下は三四十名の生徒あり、又十六歲以上の者を募りしに、三百里位の處より續々入學を申込み來り、過般來王府に集まらしめし時の如きは、已に三十名に餘り中には一戸の主人たる者すらもあり▲王の抱負　王が教育に熱心なる一例は、今の生徒が卒業の上は、更に中學師範學校と順次に高等教育を授くる學堂をも設け、カラチンをして蒙古教育の中心地たらしめんと意氣組める程なり、其結果嘗て河原みさ子女史在蒙中に比較すれば、目下は殆んど當時に倍する生徒ある程なり、而して女史は女生を受持ち、其授くる學科は體操、唱歌、算術、日本語等なるが彼地の者は、一般音樂の如き優美のものを好む性質を有し、特に文法は殆ど我國と同じければ、日本語を覺ゆること速なり、王妃の如きは肅親王の妹にして、蒙古語を知らざるに拘はらず、已に自由に我國語を覺え、常に來朝の意を洩らし給ひ、殊に近來は日本語の熟達するに從ひ、此心益々切なりと語り給ひしとなり▲王妹七格々　七格々は七番目の姬樣と云ふ意にて尊稱なり、常には閨貞と申す、芳紀廿歲才學秀で、特に編物を好まれ、音樂にも心を寄せ給ふ、此姬君昨年カラチンの北の巴林に御輿入れの爲め赴かれしが、其地は水に乏しく、且つ炭と云ふものなく、馬糞を薪にすると云ふ所なれば、見送りに行かれし妹君抔、お茶が飲みたいとて泣かれしこともありとか、

白耳義の風俗談

ドクトル　福岡秀猪

白耳義に行きまして、初めホテルジフランスといふ旅館に二月ばかり居つたが、そこで匆々赤毛布を演じた、この旅館に女の如く靜かに、高尙なイングリスを使ふボーイがあつて、私の部屋付といふことになつた、あまり上品な言語と態度であるから、お前は中々イングリスが上手だとほめた、所が私は英國人でありますといはれたのには大に恐入つた、

それから素人下宿に移つたが、この素人下宿には私一人の外他人は居ない、そのうち下宿の主人は他へ引越すことになり、私は次に來る人に引繼れて、同じく世話になることになつた、所が初めの人は既に他へ引移り、次に來る人は未だなので、私一人その家を家財道具とゝもに預からねばならぬことになつた、やがて五六日經つと、前の主人から家財を取りによこした、それに就て一笑話がある、まだ前の主人と同居せる時のことであつた、或日學校へ行かうと出掛ると、年の頃五六十の男が馴々しく聲をかけて、お前は日本人かと、英語で話しかけました、尤も此の國では、日本の言葉は英語と思うて居るらしい、それはその筈だ、日本から此國へでも來やうとするものに英語の出來ないものはないから、それからその男と四方山の話をして居ると、その男は私の所へ行かぬか、私は萬國博覽會のあつたブルッセルの町はづれである、宅には娘があつて、英語でよく話が出來るから、これからでも話に行かぬかと云ふやうなこと、此方は平氣なもので、うか〳〵出掛る氣になつたが、學校の時間があるので、次の水曜日には、といふ事に約束してその場は別れ、宿へ歸つてその話をすると、家内の人は皆眞靑になつて、それは大變なものに出逢した、その男は泥棒で、こちらから訪ねて行かねば、あちらから出かけて來るどんなひどい目に逢ふかもしれないと、一方ならず驚いた、このブルッセルの町はづれは、東京でいへ

ば新宿の奥位でなか〳〵物騒なものが住つて居る、兎に角警察へ届けて置かねばといふので、早速手續きをした、彼地では賊が家を切破つて這入るなど〳〵いふことはなく、尋常に這入れるやうにして、先づ邪魔になる人を殺してから、物を奪去るのである、その手引に使はれやうとしたらしい話、甚だ氣味わるく思つて居ると、前の主人が夜の十時頃荷物を取りによこしたのである、私一人の所へ時間が時間であるから、ブルッセルの町はづれからでも訪問をうけたのではあるまいかと思うて、なか〳〵戸を開けない、そして二階の室から見おろすと、屈竟な勞働者が二人佇立つて居る、いよ〳〵以て怪しいと思ふと、下の方から、この通り手紙を持つて來たのだから、安心して渡して呉れと云ふ、段々押問答をして居るうちに、漸く安心が出來てそれを渡した、何故十時頃家財を取りに來たかといへば、晝は外聞にかゝはるとのことである、

風俗は巴里を眞似て、なか〳〵繑奢である、折々花車の競爭といふのがあつて、馬車に花飾をして、その意匠のよいのを誇ることになつて居る、皇族女王殿下などは、それを一二時間も見て居らる〻が、無言の習慣があると見えて、見たまゝ何とも仰せられぬ、されど皇族方は皆お氣輕で、途中私などが散歩して居ると、向ふから避けて通られ、傍からあれはフランドル殿下であると注意されて、初めてさうであつたかといふやうなことがある、國王は離宮から宮城へ成らせられるにも、メリケン馬車の大きなのに召させられ、御自分が馭者となられるのであるそれで路傍の人々も知らぬ顏をして居る、それは敬禮をして、却りて國王を煩はすといふをしないと云ふので、態と宮城へ成せられる路傍で、臣民が一般に敬禮せぬことになつて居る、（雜誌中の一節）

◎婦人雜誌記者倶樂部例會　第二月會は、さる十九日ニコライ會堂青年會場にて開會、各新聞雜誌記者三十餘名集會、石倉文學士の結婚問題、建部文學博士の離婚問題にて討議したり、問題が問題だけになか〳〵賑やかなる辯論ありたり、

白耳義の乙女村

奈翁の古戰場たるウォートルローを去る十二哩の處に、エコーシンラーレーと稱する村落あり、昔より婦人の最も結婚難を感ずる處にして、此處に生れ出でたる婦女子は、夫を得るを以て、皐天の使命たるかの如く思惟し、之を果さずして去るは、婦人一生の不幸事なれども、決して其身の罪にはあらずと云ふ、誠に昔譚にてもありさうなる事なるが、之れ全く現在の事實にして、可惜妙齡の婦人が、其夫を求むるに憂身をやつして、然かも得ず、紅顏空しく老い去りて、一生を孤棲寂寞の裡に終る者多しと云ふ、嘗て彼等は乙女團を組織して諸方に順禮し、求婚の祈願をこめたる事ありしが、二三年彼等は只管神にのみ依賴するより、自らも手段を講ずる方然るべしとなし、先づ手初として大規摸の饗宴を開き、廣く近鄉近在の青年を招待して、杯盤の間に好配偶を得んことに決し、日を期してそれぞれ招待狀を發したりしが、やがて其日となるや、ラーレー村は賓客の歡迎に狂せんばかり、其方法又奇にして大綠門にキューピットが、小鳩を射る狀を造り出すなど、凡て詩的戀愛的の意匠に出でざるはなかりき、されど食卓は極めて質素にして、僅にコーヒーと砂糖漬とを備へたるに過ぎず、コーヒーは薔薇の花を以て飾られたる杯より、之を飲むことゝし、食卓はくさぐさの花を以て飾られたり、今日を晴れと着飾りたる六十餘の乙女等は早くより會場につめかけて、窓より外を眺めては、各々來るべき愛の勝利を豫想して、胸をおどらせつゝありしが、定刻前より待焦れたる賓客の粗野なる晴衣、不格好なる馬車に乘りなどして、續々諸方より入り來りしより、彼等は恰も女王の如く威儀を繕ひ、靜々と練り出でゝ、設けの席に、各々一個の空席を其傍に殘して就き、賓客をして隨意に其好む處を選ばしむ、されど無殘！空席は忽ち充されて、空しく會場外に呆然たる者無慮數百と註せられぬ、かくて宴にうつるや乙女等は喃々たる口舌に秘術を盡して、我こそ射のがすまじと、暗に競爭の色さへ見ゆるにぞ、寄手は早くも敗北と定まりて、宴終る頃には既に十四組の婚約者を出だせり、司會者の優艶なる、席上演說に續いて、奏樂滑稽談戯歌化粧の交換等ありて、茲に珍妙なる愛の饗宴を終りしが、要するに此の會は非常の成功を見るに至りしより、彼等は之を以てラーレー村の年代記に、特筆大書すべき事柄なりとなし、盛に愛の饗宴を勵行しつゝありと云ふ、我國にて語り傳ふる女護國に似て、更に奇なる處ならずや、

西藏の風俗

稻見紫東

まづ衣服の事よりいへば、衣服は皆一様に羊の皮を着て居るので、決して變化がない、羊の皮も毛の付いて居る方は肌に接し、其反對の側を外面に出して居る、之れを只一枚着て居るが西藏人は餘程清潔を好まぬ人種と見えて、衣服の洗濯などは決してしない、それゆゑ餘り奇麗で無い、繩見たやうなものを持つて、衣服を縛つて居るが、婦人は黄色或はピカ〳〵光つた色のもの、若しくは萠黄、水色の帶をしめて居る、而して其緩かなる着物に、前の方には何でも價の貴きものを突込んで居る、中に入れて居るものは、何かと云ふと、木で調製へたお椀を入れて居る、夫は水を飲み、飯を食ふ爲に持つて居るのである、それから其他に入れて居るものは火藥嗅い煙草を持つて居る、それから錢を持つて居る、此國では銀貨幣が一番貴い、之を受取り、又拂ふには、

皆權衡に懸けて取引するのである、所が西藏人の中には正直な人もあるが、隨分不正直な人があつて、人に拂ふ時には重い權衡を使ひ、貰ふときには輕い方を使ふと云ふやうな不正直な人々である、

先づ天幕の中に這入ると其中には床が無いので下は直ぐ地面に成つて居るので御座います、而してその正面の少し高い所には偶像を祀つてあるところの臺がございまして、其横の方には皮を敷いて居るのでございます、

西藏人は決して農業なんぞはしない、そこで細工場はどうかと云ふと、之も實に不細工である、全體道具としては、どう云ふものがあるかと云ふと、盆などは出來るやうである、これも矢張木で調製へたもので、日本で見るやうな漆器のピカ〳〵光るやうなものはない、只木を削り取つて、盆の形にしたばかりである、天幕の中の方を見ると、羊や、犢が澤山居る、殊に冬になると、天幕の中を温暖くする爲に家畜をば澤山其中に入れて置く習慣がある、西藏は

冬は殊の外寒い國であるから、斯う云ふ風に動物を愛して、天幕の中に入れて置くのである、

先づ外來の人があると云ふと、中の人が出て來て手を出すのである、其意味は直ぐ分るから、私共は携帶して來たお椀を出します、而うすると支那から來るお茶を出して呉れる、

西藏の人は椀を決して洗はない、食事をしても、茶を飲んでも、跡は決して洗はずに、皆舌で舐り取るのである、夫れで餘り心得のよく無い國で御座いますから、私共は人の舐めた物で茶を飲むことは嫌ひであるから、必ず椀を携帶して行くやうにした、

夫から其次は爾う云ふ人種が食ふ食物のことであつて、彼等の食物はどう云ふものであるかと云ふと、重なるものは茶であるが其茶の中にはバタが這入つて居る、いさゝかバタの御話を致さう、此バタは普通の牛の乳で製したのでない、長い毛の牛の乳を絞つて、而して昔風にグル〳〵と廻すのである、

此國には冬に成つても暖めるために炭と云ふものが無い、滿目蕭條たる有樣で、一本の木も殆ど無い、長い旅をした時に、木一本を見た事が無かつた、炭が無いのであるから、爾う云ふ所では何を燃料にして用ひるかと云ふと、此地方は牧畜人種であるから動物の排泄するところの糞を乾して夫れを燃料にし、之れで以て食物の煮炊きを爲し、室をも暖めるのである、私は其羊や牛馬の糞を西藏人が運んで持つて來て、乾して居るのを見たが、彼等は手で其糞を持つて運んで來て、其手を洗はないのである、而うして直ぐ其手を以てバタを拵へる、バタには始め鹽を入れるので、大きな塊にして置いて、それをば茶碗の中に入れるのである、

茶は支那の磚茶と申すので、籠に這入つて居るのを大變な包みにして、支那の方から西藏國に輸入して來るのである、之れを挽くのは牛である、私が或る時見たのに、二千疋も續いて、支那の方から茶の行李を輸送して來た、爾う云ふのが輸入て來ると、熱い湯を沸騰して、其中に茶を入れて、湯が奇麗に

褐茶色を呈するやうに成る迄、ドンドン煮る、それから夫をば茶碗の中に注入のである、其時にバタの乾かしたのを混ぜる、而うすると其茶の上に油がギラ〳〵と浮くのであるが、其油の這入つた茶をば、悦んで飲むのである、訪問者には必ずそれを出す、

私共も初めは大變飲み惡くかつたが、訪問した時彼等の好意を空しうすると、遂に長い間彼等と私共との間に墻壁を築く事に成るから、嫌々ながらも夫を　んだ、

若しも外國人にして、此茶をば嫌だと云つて飲まなかつたなら、彼等と其人との間に築いた墻壁は、一年有餘は必ず除去ないのである、夫れ故に若しも此お茶が呑めないならば、彼等を訪問することは出來ぬ、併して無論彼等の生活の狀態を知る事は出來ぬ何故と云ふに彼等と懇親を結ぶことが出來ないからである、

肉類は重に羊の肉を食し、稀には煮炊きするが、大概は生肉で之を食するのである、

西藏人は、凡ての勞働勤務に從事するところのものは婦人である、男子は仕事をしない、若しも勞働すれば、自分達は來世に於て救はれないと云ふ迷信を持つて居るのである、然らば仕事をする婦人はどうかと云ふと、夫は救はれても救はれんでもかまはんと云ふ主義からして仕事をさせるのである、朝早くから起きて水を汲み、それを天幕の中に持つて行き飼ふ所の家畜の世話をなし、牛は山の近傍に伴れて行くとか、牛の乳を絞りバタを製造するとか、又獸類の皮を鞣して、彼等の衣服を造るとか、凡べて斯くの如き仕事に、朝より晩に至るまで從事して居る然るに男子は悠々として其日を送つて居る、とは云ふものゝ、彼等は婦人の說は非常に貴んで居つて、婦人の承諾が無ければ、何にもしない、假令て云ふと、一疋の馬をば良人が賣らんとする時にも、妻の意見を聞いて、若し妻が肯せなければ、良人は賣ることをしない、

而う云ふ國であつて、又世間には一夫多妻主義が行

はる、所の國が澤山見たり聞いたりする事もあるのに、此國には之れに反して、一婦多夫主義が行はれて居る、それは先づ普通の平民であつて、牛や羊や馬などのやうなものを持つて居る數も少なくして、餘り豐かでもないのに、それに小供は澤山出來て居る時には、男子は三人若しくは四人も生れた時分には、一人の子を四歳位の時に御寺に遣つて、ラマの坊さんにするのである、而して其の餘りの三人とか或は二人の小供が大きく成るといふと、一人の女の兒を親が他から伴れて來て遣つて、それを彼等の妻にするので、つまり一人の婦人を兄弟殘らずの妻にするのである、而して年長のものを父と云つて、若い方を叔父と稱へて



居る、斯の如き奇妙なる風習が行はれて居るが、婦人が斯ういふ境遇に居つて、果して滿足して居るかどうであるかと思つて、私が極く親密にして居つた西藏の或女に聞いて見た、夫は澤山の夫を持つよりは、一人の男を夫と定めて居つた方が宜しくはないかと云つて問ふて見た所が、彼が申すのには、否而うでない夫を澤山持つ方が宜しい、私は斯う云ふ有樣を以て滿足して居る、何故と云ふのに、若し夫が一人であると云ふと、其人が無常の風に誘はれでもした時には、私は寡婦と成らなければならぬ、然るに大勢あれば、一人や二人死んでも寡婦と成る憂が無いから、矢張澤山ある方が宜しいと申した、

西藏には婦女を教育する學校がない、私が聞いたに、遙かに南方に當つて、シカッと云ふ所に學校があると云ふことで、私はまだ見た事がないから知らぬが、其他の地方から見たところ、聞いた所に依つて見ると。西藏の婦人は。全然教育がないと云つてもよろしい、併し私は一人の婦人を知つて居るが、之は或酋長の妻君で、此人は良人が留守に成つた時に、讀書きが出來なくては、不都合であるからと云つて、其良人が敎へたものである、それで御座いますから、此婦人丈は、良人が留守でも手紙もかけるし、又他から來た書狀も讀めるので、夫が留守の內でも仕事が出來るのである、

此國では、婦人は只家庭にありて、日々勞働に勤務すること、夫から若しも母と成ると、其小供をば敎育すると云つて何を敎へると云ふ程の事は出來ないが、小供をば見て遣ると云ふ事位が、婦人の常の職務であつて、若しも彼等が病氣に成ると云ふと、之は不用なものだと云つて、毛皮に乘せて、而して天幕の外に拋り出されて仕舞ふのであつて、私は度々自分の住まつて居つた都會の城壁の近傍に、病に罹つて勞働の出來ない婦人が捨てられて、呻吟して居るのを見た、之は何の故かと云ふと、仕事が出來ぬからと云ふ譯である、而う云ふ勞働が出來ずして、追ひ出された人々に、或る人が大麥の粉で拵へた食物とか、又は少しの水でも持つて來て遣ると、却て夫は救はれ無い後世の惡るい人と云ふ事に成るのである、

之れから醫師の事に就いてお話せば、此西藏の醫師の療法を見ては成る程醫師に掛けない方が宜しからうと思つた、文明諸國では、醫術が進歩して居るからして、それ程危險でもないが、西藏の醫師は非常に危險である、彼の地の即ちラマ。の僧侶であるママフエーといふ此の醫師に掛ると、直ぐ丸藥を小供に吳れるが、それは何であるかと云ふと、祈禱を書いてある紙片であつて、夫を撚つて丸藥にして吳れる、勿論其丸藥を呑んだ所が、病氣はなほらない而

うすると次には或るラマの名高い僧侶の大和尚樣の死なれた遺骸を火葬にした灰を服ませるのである、それでも快らんと、今度は火打石ともぐさを持つて來て、火を打ち出して、其もぐさに付けて、直ぐそれを水の中に浸して、それを呉れるから、其もぐさを家に持つて返つて、乾かしてそれを病氣のあるところに着けて、火をつけて燒くのである、其大きさは日本の尺度で三寸計りのである、勿論其局部は、大きな火傷のあとが出來るのである、而う云ふ事を致すのであるから、實にお醫師さんのお藥は危險であつて、始めに全快ないと、段々酷いめにあふ又一寸した事を云ふと、此國では眼の惡るいものが、多い、仍て眼が焮衝して來ると、古い汚ない布片を出して、塵や染みの附いて居る切で、眼を摩擦るのであるから、それで益々焮衝がひどく成つて、終には眞赤に成つて、涙を出して居るが、そんな事をして居つては、決して全快する筈がない、焮衝は摩擦することから起るのは誰でも知つて居る事で、夫位のことは清潔なる水にて洗へば、別に藥は用ひずとも治るのであるが、彼等は夫位の事をも知らぬから益々眼を惡しくして居る、

其外彼等は沐浴をせぬために、非常に疾病に罹り易いのである、支那の方に面して居る地方は、支那人との交通があるために、湯に入ることを知つて居るが、夫れを越して、內地の方に來ると、決して而う云ふ事はしない、夏になると、身體中にバタを塗つて、而うして日光の中に出して置く、彼等は動物の方には、餘程能く心を付けて、羊、馬のやうなものは、善く世話をいたすが、自分の小供達は非常なことをして居るので、若しも二三日經つと云ふと暖い時には、又其上にバタを塗るが、身體中バタを塗つて、其上に塵埃や何かゞ一杯堆高く積つて居るのであるから、病氣が自然と多く出來て來るのである、



老女の筑紫琵琶

薩摩琵琶の悲壯、筑前琵琶の婉麗、平家琵琶の古調今の世の流行となりぬ、こゝに筑紫琵琶といふを流行させんと企つる人あり、そは過る明治十七年以來吾國に毛糸編工を傳播へし鼻祖として隱れなき、鳥井喜登子といふ人にて、十有餘年に渉り、その性來の嗜好なる琵琶の曲を熱心研究の末、爰に自ら新曲を發見する處あり、名を筑紫琵琶と稱し、汎く都人士の批評を請はんものと、肥滿たる老軀を起し、琵琶一挺を携へ、昨年上京したるが、其こゝに至りし由來を聞くに、喜登子は肥後國熊本城主細川侯の家臣、御物頭鳥井伴藏の三女にて、幼きより嚴格なる武士的教育を受けしが、明治十一年中信州松本の長谷川順氏に嫁せしも、琴瑟和からず、爲めに將來良人の補を俟たずに自ら獨立の計を樹つるに如かずと、十四年京都高等女學校に入り、裁縫女禮等を修めけるが、當時同校舍監小川直子女史の愛顧を受け、自らもその恩遇に感じ、ひろく女子に關する手藝の研究に耽り居るうち、敏くも毛糸編工の將來有望なるを覺り、卒先してその編方を工風し、漸く他の師範たり得るに至り、私塾を開いて二百名餘りの生徒を收容し、只管これが普及を謀り、全國各地に多數の編物教師を派遣するに至り、遂に今日迄其鼻祖とし知らるゝなり、斯る間に良人長谷川は京都監獄副典獄より、同地電燈會社副支配人に轉ぜしも、夫妻の中は世に例し多き家庭難、喜登子は心を千々に碎きて良人にいたはり仕ふれど、夫の心は安からず、終に別居するに至れり、一時は流石に身の不遇に泣きけるが、氣丈の婦とて、やがて心を取直し、斷然獨立の生計を立つべく、鶴屋といへる旅館を開業し慣れぬながらも營業せり、その後明治二十八年ごろ、同地村井吉兵衛氏邸に筑前琵琶の師範楠智定氏滯在しける折とて、喜登子は憂心悶々を慰さむるよすがにもと、請ふて教へを受け、爾來三年の練習を了へ、師の許を去り、自ら薩摩琵琶を參酌して、相變らず研究を積み居る内、偶然琵琶歌「迷故」を繙き、世の中は迷が故に三界は暗しの歌詞を翫味ひ、豁然悟入する所あり、夫よりは此歌を謠ひつゝ、世を樂み送りけるが、爰にまた自ら筑紫琵琶の新曲を創始し、薩摩琵琶の如く剛からず、筑前琵琶の流しの多き卑野の調を帶びざるを以て特長となし、餘生を是れが普及に費さんものと、恰も日露の役に際し、特志看護婦人とし、出征の軍士慰問に能く努め、折柄旅館を他人へ讓渡たし、琵琶一挺を小脇に携へ、獨り京都を去り、内地各軍營地を巡廻し、千萬の軍士に立交りて、壯烈なる琵琶を彈奏し、專心士氣の鼓舞に盡瘁して倦むを知らざりしは、婦人の身とし、中々に健氣の事なりけり、喜登子はまた戰後婦人社會に增々手藝の貴ぶべきを知らしむるの必要を認め、且つは自家創始の琵琶をも傳へんものと、前記の如く東都に入り來り、目下麹町區富士見町松葉館に滯留、小川直子、鳩山春子等の後援に據り、各華族の邸に彈奏し、痛く好評を蒙り、又た傍ら大山乃木の諸將軍に聽へて、賞讚を博し、現に日を夜に次いで陸軍病院を見舞ひ、且上流者の懇請を受け、總て無報酬に彈奏を勵みつゝあり、寔に年長けし婦人の働らきとしては、嘆賞に堪へずとの取沙汰、此處彼所に聞ゆるは理ありと知られけり、

オーラ、ブリッヂマン

（三官能を失ひたる少女の半生）

英國　ダルトン作

佐藤溪底譯

常無きが世の常なれば、不幸と云ふ不幸は澤あれど、罪も頑是もなき小兒の上に降りかゝる不幸程、あはれ同情の極なるはあらじ、

産聲をあぐるから、貧乏の辛さを味はさるゝ子、繼親に窘めらるゝ子、兩親を失ひし影薄き子、さては血の涙にて捨られし子など、數へ來れば、また限なからむ、されど余の今描かんとするは、是等の類にはあらで、またいたいけの少女子が、三官能を失ひて、生きながら葬られたるその一生を、自ら救ひあげたる大勇猛心なり、

此實話は、初めチャーレス、ヂッケンスの有名なるアメリカン、ノーツに依りて紹介せられぬ、

憐れなる少女は、名をオーラ、ブリヂマンと呼び千八百二十九年の吹く風寒き師走、米國はニューハンプシャイヤの一都ハノーヴァーに呱々の聲を揚げぬ少女の家は富み、父母は健にして鍾愛一方ならず、家庭は常に喜悦に滿されて、親戚の伯母共も、オーラのためには、半日を費して顧みざりき、

オーラはかくも幸福の裡に三歳を過しぬ、父母は笑と片言に世を忘れて、只管その生育をのみ希ひぬされどオーラの體質は、月日と共に虛弱を示して、三歳の夏には、病魔が容易くその全生涯を奪ひ去りぬ、オーラは激烈なる熱病に罹りしなり、

初め五週の間は、幾度か命の瀬戸際に臨みたりき體熱は日に日に昇り行き、氷より外は何も口にせず大方は昏々として現の如く睡りぬ、

今や愛らしきその眼は、柘榴の如く爛れ、ゆたかなる兩の耳は、パタの如き膿をもて閉され、常に笑を含みし唇も、時々かすかに痙攣する外、最早や母を呼ばず、昨日までは華やかなる笑聲の絶えざりしに今日は咳の音も四邊を憚かりて聞えぬ、

かくて五ヶ月の間、氷を友に漸やく死の手を免かれ二歳の後には、その病室より怪しげなる步を運び得るに至りしが、

あゝ最早やオーラは盲目なりき、聾なりき、啞なりき。

母はオーラを犇と抱きながら、物狂はしげなる聲を搾りて、ひた泣きに泣きぬ、

「なぜおまへ死んでくれなかつたの!」と、

今やオーラには耳なきなり、

最早や母の情もオーラの笑を買ふに甲斐なく、父の聲もその答を得ること叶はず、げにオーラは親を泣かせんために生きたるに過ぎざるなり、

されどまた、生きながら葬られたるオーラが胸の思は如何にぞや、墓の如き寂寞と暗黑は、その全生涯を包む、悲慘と云ふも中々に盡し難し、

オーラはいまだ外界の多くを知らざる内に、熱病に惟りしなれば、慾を知らぬ身の悶えもなくて過しが、同時にオーラの心は死にしに異らざりき、

さても如何にして尊き生靈を救ふべきか、盲、聾啞の子に知識を與ふべき方法は世にありや、何人も猶豫なく答へん、曰く絶無と、

されば憐れなるオーラは、その肉も心も墓のものとはなりたるなり、

オーラは七歳になりぬ、此間彼女は唯父母が涙の種なるに過ぎざりき、（恐らくは死ぬまで然らんも）

されど天も此少女を捨てず、此時恰もオーラにとりて、救の神は現はれぬ、そは當時義俠なる慈善家として、尊敬されしホウと云ふ醫學博士なりき、

博士はオーラの哀れなる話を聞きて、同情やる方なく、よし少女の肉は救ひ能はずとも、その靈は如何にもして救はざるべからずと、オーラの兩親に乞ひて、遂にボストンなる博士の家に連れ行くことゝ定まりぬ、

かくてその年の十月、黄める木葉の窓に音づるゝ頃、憐れなる少女は父母と訣別しぬ、

父は博士の手を堅く握りつゝ「何分よろしく」

と、さすがに湧き來る涙を抑へ得ざりき、
母はオーラを抱き占めて「オーラよ、おまへ今お父さんや母さんと別れるところなんですよ、おわかりかへ、おわかりならさやうなら、と一言だけでも云つておくれ」と他愛もなく娘の髪に涙を注ぎつゝ離れがたなき風情あはれに切を極めぬ、
オーラには眼なきなり、泣かず笑はず、遂に一言も言はずして、博士と共に汽車に乘りぬ、オーラには口なきなり、
茲に博士は寢食も忘れて、そが智識の開發に努力したり、
先づ最初の試驗として、ナイフ、フォーク、スプーンの如きオーラの知れる物を、その掌の上に置き他の掌にはそれらの名を綴りし盲唖用の浮び文字の紙片を與へ、それを指先に觸らして見ぬ、オーラは注意深く、その浮び文字に觸り、而してナイフとスプーンの文字に差異あることを會得したる樣なりきかくして博士は順次種々の有形名詞を教へたり、オーラの觸覺もまた驚ろくべき程の鋭敏を表はし大概は一度にて覺え、覺えたるものはまた決して再び忘れざりき、
オーラは博士の家庭に一員となりてより數月を過しぬ、而して非常なる速力を以て、日常用ゐらるゝ有形名詞は殆んど覺え終りぬ、されど此時よりオーラは時々悶え出しぬ、
ある時は咽を掻きむしり、或は眼を擦り、或は顔を朱の如くして口をあき、ほろ〳〵と涙を溢して全身苦悶に堪えぬ態なりき、
博士は此態を見て寧ろ喜びぬ、オーラが漸く智性の閃光を認めし故と思ひたればなり、今までは眞暗き土牢の中に在りしが如きオーラは、一層限界も戸口もわからず、小兒心の絶望と云ふことも知らねば悲みも悶もなくて來りしも、今や一隅に當りて、光線の漏を見しものから、到底も沈とは堪え難くなりしなり、
オーラの悶えるときは、博士は常に膝の上にオー

ヲを抱き、その疲れて止むまでは唯涙を抑へつゝ悲惨なるその顔を見守りぬ、

やがて少女が心の靜まりしとき、博士は柔かくその手に接吻して、さて盲啞用の以路波を敎ふるが常なりき、三ヶ月も經ちし頃には、オーラは全くその以路波を覺えぬ、

されど哀れなる少女の煩悶は、愈々その小さき胸を悩まして、今は半ば狂亂の態を呈しぬ、ある時は一日の間寢臺に横はり、靜とばかり己が胸を抱きて身動きもせず、眉根のほとりに怨めしき相を表はしまたある時は室中轉げ廻りて身を縮め、虚空を攫み咽を搾つて絹を裂くが如き泣聲を發することあり。少女の顔は日と共に膿みしが如く蒼白く透き徹り、月と共にその苦悶を增し來りぬ。

斯の如きもの大凡一歳、之に處せし博士の苦心は實に慘憺を極めしものありき、噫オーラの心を誰か知る、天涯萬里語るに人なく、嬉しきも悲しきも唯己が小さき胸一つにして、健なる兩親はありながら見ることも叶はず、せめてはその謦咳だに接したくも仇なる望なれば、死ぬより辛き生別れせしも同然否な〳〵オーラは世の總ての人に見離されて、獨り常闇の無人島にとり殘されたるにも等しきなり、

されば所詮は味氣なき世に何をひとり五十年の命を貪らんや、死こそ中々に易き慰安なれ。

あはれオーラの心根は寔にかくの如きなり、

・　・　・　・　・　・

新らしき年は來ぬ、オーラは九歳になりぬ、ハノーヴワーなる兩親は世にも嬉しき消息を手にしたりそは博士より來りしものなりき、

(前文略)其後御息女には漸く御心靜まり、此頃は餘程快活に見受られ申候、小生も欽喜に不堪候、最早や煩悶には疲れ候て、その甲斐なきを悟りし故ならんと存じ居り候、

只今は只管動詞形容詞などの御習得に御苦心なされ候へ共、殆ど以心傳心より外方法はこれなく候唯僅にいまだ熱病に悩ませられぬ前、日常見聞致

し候ものより例をとり、「鴉は黒くある」「鵞は白くある」「鴉、鵞は鳥なり」「色は違ふ」「鴉は飛び鵞は飛ばず」「我等は物を食ふ」「犬猫は物を食ふ」「動物は物を食ふ」などの卑近なる者より順次その習得方を研究致し居り候、

御息女の直覺の鋭敏なるには、實に驚嘆仕り候、人は如何樣に相成り候とも、用は辨せらるゝだけには、出來得るものと悟り申候、

昨今は鐵筆にてお互に掌に文字を書きあひて、簡單なる會話をなし得るやうに相成り申候、尚ほ今後の御進歩に就ては、疑を容れざるものこれあり候、幸に御放念被下度候(後文略)

父と母は顔見合せて、「あゝ娘は救はれた」と暫時感涙に咽びぬ、實に父と母は娘の煩悶を聞きてより日毎泣かぬことはなかりき、唯一人の愛娘が生れもつかぬ姿を思ひ浮べては、最早や堪え得ぬべく辛き心地のせらるゝなり、

オーラは其後一冊の讀本を與へられぬ、「旗と竹」「太郎は本を持つ」など、オーラはそを指先にて觸れつ、熱心に讀み行きぬ、而して二度目には大方暗記したりき、

オーラはまた博士より盲唖の友數人を與へられぬしかもオーラの感覺はその鋭敏眞に神の如く、唯一度い握手に依りて、常にその誰なるやを判じ得たりき、オーラはその友と握手する毎に、必ず晴やかなる笑を浮べぬ、憐れなる兒女の間は、問あり答ありはた喜びあり、悲みあるが如く、此樣を見る博士は泣せらるゝことも屢々なりき、その友愛の情は、眞に美くしく、毫も毛嫌の情を有せず、かくの如きは眼あり口あり、耳ある人の子に見る能はざる所ならん、

オーラはまた能く友と共に搖馬を遊びぬ、彼女はいつも馬の尻にて、他は皆な鞍となり、殘りの一人が前鞍の頸に縋り、而して徐々前後に搖がすなり、刺すが如き笑聲は、時々室に滿ちぬ、

ある時オーラは、ひとり何事か會得したる樣にて

皆な嘈々として搖がし居る中、彼女は俄かにどたり尻餅を舂きぬ、同時に他の者は一齊にばた〳〵と將棋倒しに轉びぬ、

オーラは直ちに蟹の如く横匍となりて、壁際に到り、暫時の間は胸を叩いてひとり笑ひ興じ、さて友を見附んとて、可愛らしき手を擴げて、眞直に進み行きぬ、遂にオーラはその一人を捉まへしが、その手頸を痛めしと聞きて、彼女の顔には苦痛の色上りぬ。やがてオーラは仲間の掌に「惡い」と書きて接吻したり、オーラの胸には、此時始めて同情の念を兆しぬ、耳は聽えず眼は見えず、物は云ひ得ぬ少女子の三人四人、その他愛もなく遊び居る樣を人は如何に見るや、あはれこれ何人の手にも描かれざる悲劇にはあらずや、はたまた、到底も吹き出さずには居られ難き一個の滑稽劇にあらずや、

博士は時々此有樣を見つ、眼には涙を堪えて腹を抱へぬ、（未完）

愛情濃かな鯨

鯨にはセミ、シロナガス、ナガス、ザトウ、コク抔云ふ種類があつて肉の美味なる點より云へば、セミは一等に位し大さより云へばシロナガスが第一にて、昨年捕獲せし中には、長さ八十六尺餘斤量十二萬斤餘のものもありたるが、他は四五萬斤が普通にて、コクは三萬斤内外のもの多し、茲に床しきは、人間のやうに鯨は愛情の深き事なり取分けザトウ鯨は常に雌雄打揃ふて游泳し、若し雌か雄か一頭擊殺されたる場合には、たとへ逃去る機會ありても、生殘れるものは決して此場を去らず、屍體の傍に附纏ひ居るゆゑ、一頭を倒せば必ず他の一頭をも捕ふる事を得るものなり、又た此の如く雌雄睦じきのみならず、母子の情合もなか〳〵濃かにして母鯨は生後三四ヶ月の子鯨（長さ三四間あり）を鰭の上に乘せて泳ぎ廻り滅多に手放さゞれば鯨捕は子引鯨を見出すや、先づ子鯨を捕り、之を囮にして母鯨を捕ふるは常なるが、子鯨の捕へらるゝや、母鯨は如何にも悲みに堪ざる風情にて悲鳴をあげ、擊ども突どもイツカな動かぬ有樣には、有繋の荒くれ男も、涙を拳で拭ふ事間々ある由なり、少し迷信に失すれど、次の如き奇談あり、昔長崎の松島と云ふ所に鯨獵にて、巨萬の富を蓄へし富限者松島與五郎と云へる者あり、一夜夢に子引のザトウ鯨が枕頭に立ち、何月何日の何時頃某島の海を通りますから何うぞ私等母子の生命だけは是非助けてくださいと頼み入りたるに、松島は却て之を幸とし網を張り待構へ、とう〳〵其母子の鯨を捕獲したるに、其後間もなく松島は不幸に不幸が重なりて、財產を蕩盡し、見る影もなき境遇になりたる所、道は正しくザトウ鯨の怨靈が取きたるなりと、聞く者皆恐怖して、長崎地方に於ては一時子鯨を捕らざる事になりたる事ありと、

醫術開業試驗に及第したる三女史と女子高等官

◎越沼ふじ子　本年一月行ひたる醫術開業試驗の結果文部省にては、未だ證書授與の運びに至らざるも、女子にして合格したる三名が修學中に於ける苦心談を聞きたるに、其の一人なる越沼ふじ子（二十一）のことについて、ふじ子と共に起居を同うしたる東京醫學校生徒山下隆子はその性質に就いて曰く、越沼さんは最初宇都宮高等女學校の技藝科を卒業なさいましたのに何う云ふ處から醫學を研究するに至つたのですか存じませんが、兎に角伯父さんがお醫者で入らッしやるのを大層お力にしてゞした、お宅は栃木縣下都賀郡小野寺村字新里で農家なんださうです、お父さんは榮三郎とかおッしやつてゞしたが、何にしろ姉さんのはる子と云ふ方が、土地で女傑とまで云はれて居る位の豪い人ださうですから、從がつて越沼さんも中々シッカリ者でした、妾とは丁度一年ほど此家で共に自炊して、同じ學校へ通つて居つたのですが、常に妾に對つて人間は大いに寢て大いに喰つて、大いに勉強しなければならぬ、で學校は學問する處家は遊ぶ處だなどゝ申して、口計りではなく其の通り學校へ行けば、大の勉強家でしたが、家では毎日八時頃から起きて只一時間計り勉強するのみで殆んど遊んで居つたのです、尤も夕方散歩にでも參りません時は、八時頃から十一時頃まで勉強をする事もありました、で彼方は感心にも成功するまでは　絹の着物に桐の下駄は斷じて用ひないと云つて少しも風采をかまはず遣り遂げなすつたのです、ヘイ、手は餘まり好く書かれませんでしたが、流石に縫物は中々上手でした、要するに恰で男のやうな、極めて快活なる雄辯家でしたよ云々、と語りたる其人も亦頗る快活雄辯なりし、尚ほ聞く處に依れば、ふじ子は今より三四年前上京して醫學を研究し、前期後期の試驗も成績よく、遂に今回の名譽を博し、錦を飾て古鄕に歸りたるなりと、是れに就き宿の主婦は、越沼さんは初から妾の處にお出でゝしたが今度も最後の試驗があると云ふに、餘り勉強をなさいませんからもう少し勉強なさらないではいけませんと云つて、度々忠告したのです、處が奥さん心配して下さいますな、妾は屹度及第して見せますから、と云つて、平氣なものでしたが、其通り首尾よく行きましたので、只々妾は感心して居ります云々、と纖弱妙齡の女の身にて、斯くまで自信強く、頭腦の明斷なる人は珍らしかるべし、

◎岡田つる子　同じく其宿所本鄕區龍岡町二十一木内氏の談るところを聞くに、岡田さんは兩親御がくれの爲め、戸主となつて居らつしやる樣です、學校は私の宅へ御越なすつてからは、神田美土代町の醫學講習會へ通つて勉強をしてゞしたが、非常な勉強好きで、日曜の外は來客に面會もしないで、讀書して居られましたが、體が虛弱なでの中途廢學し、其爲試驗が大層遲れたのださうです、學資

は義理の兄さんから些少づゝ受けて、頗る苦學されたと云ふ事です、従つて着物も綿唐棧位で押通して、平生口數をきかぬ温和しい方です、夫れからお歸郷なさいます前でした、私等に對つて、及第しても、二ヶ年位は尚特別に勉強して、其後國へ歸つて開業しやうと思ひます、妾が希望は外科ですが、何うなるかまだ分りません、などゝ被仰てゞした云々同女史は年三十五

◎二宮澄江子　その一人二宮澄江子(二十四)の事に付て同窓の友にて目下内務省傳染病研究所の醫員白澤房子に就きて僅に澄江子が性質の一端を聞き得たり、房子は曰く、二宮さんは妾と東京醫學校では御一緒でしたが、其後彼方は日本醫學校で實地研究をなすつたさうです、前期試験の時は妾と共に一回で及第しまして、夫から後期試験も共に受たのでしたが、何云ふ譯でしたか、二宮さんは學説が不充分であつたとか云ふ事で、途に妾よりお遅れなすつたのですが其後後期試験も成績よく、今回は亦目出度合格なさいましたので、實に妾も喜んで居ります、で將來の目的に就ては、御相談の御手紙を戴きました、其文中に傳染病研究所に入りたいとか、小兒科をやツて見たいとかと云ふ事が御座いましたが、妾よりは未だ御返事も差上げないのです、その邊は何うなさいますか、何れ其中には御決定になりませう、夫れから東京醫學校へ入學なさいました當時は、越沼さんと同じく少しも風采を顧ない方でしたが、近來になつては非常に衣服裝飾などにも御心を用ひなさいます樣になり、恰で人が相違た樣でした、然し最初から熱心な勉強家で、又頗る快活なるお方なんでした、修學中はお里から相當な費用を貰つてお出でゝしたので、別に苦學と云ふ事はなさらなかつた樣です云々、と談れり、尚聞く處に依れば澄江子は三十七年に東京醫學校開設の際入學し、翌年二月退學して、同年十一月更に日本醫學校へ入り三十九年十二月退學したるなりとぞ、

◎宮川すみ子女史　女子高等師範學校教諭宮川すみ子女史(三十二)は先日の官報を以て、同校教授兼教諭高等官八等に叙せられたり女史は去卅五年十月文部省より留學を命ぜられ、英國に渡り倫敦家政師範學校に入り、二年間割烹洗濯裁縫化學救急法家事取締法等を研究し、後一年間ベツトフオード女子大學にて公衆衛生法を學習せる傍、貧民窟の衛生狀態等を視察し、多大の蘊蓄をなしたる後昨年八月歸朝爾來、女子師範に教鞭を執り、生徒間に良教師の令名頗る高かりしが、今回此榮譽ある昇任に接したる也、

文藝

女子と文藝（三）

文學博士　井上哲次郎

次に哲學者としての女子に付いて、いさゝかお話しをせう、勿論哲學者としての女子は、さう澤山はないが、稀には女子が哲學者として、世に現れたことがある、

グレシアの時にヒパーチアと云ふ女子の哲學者が出た、此人は紀元後四百十五年に歿くなつたが、アレキサンドリア府に生れた人で、其父は數學家として有名なテオンである、それで學問はグレシアのアテン府に於て修業したのであつて、それよりアレキサンドリア府に歸り、多くの人を敎養し、男子も及難い程赫々たる名を揚げたのである、さうして此人は哲學者として有名であつたばかりでなく、極めて美人であつた爲、アレキサンドリア府に於けるヒパーチアの勢力は多大であつた、且つヒパーチアは學問に於ては哲學に深く通じたのみならず、數學、星學等にも精通して居つたので、女子として斯る學科に精通して居つたと云ふことは、實に珍しい歷史上の例である、唯々最後に災難に遭遇して無慘の終りを遂げたが、それはグレシアのプラトー學派の哲學を大に主張して居つた所が、それが基督敎主義に逆つて居ると云ふので、基督敎の信者が一揆を起してヒパーチアを攻擊し、石を拋付けて擊殺してしまつたと云ふことである、又一說には寺院に引摺込み、斬付けて氣慘の死を與へたと云ふ方が眞に近いやうである、此のヒパーチアは色々學者の書に於て哲學

者として世に紹介され、特に哲學史上に名を遺して居る、彼の獨逸のエドワード、チヨレルと云ふ人が『希臘人の哲學』と云ふ大著述を出したが、其書中にも載せてある、然るに惜しい哉ヒパーチアの學説が能く分らぬ、唯々プラトーの學派に屬して居つたことだけは分るけれども、果して如何なる學説をアレキサンドリアで主張したか、其邊は明瞭でない、

それから玆に近世になつて現れた女子の哲學者を一二人擧ぐれば、佛蘭西に於て近世有名な女子の哲學者が出て居るが、それはソフイー、ゼルメアンと云ふ人である、千七百七十六年に巴里に生れて、千八百三十一年に歿くなつたのである、此人は矢張り哲學上に於て色々新しい考を述べたばかりでなく、數學であるとか、自然學であるとか云ふものにも精通して居つたのであつて、此人の哲學上の著述は、其の死後に出版されたものである、此人の事に付いては、可なり精しくラベーッソンと云ふ人が『十九世紀の佛蘭西哲學』と云ふ書の中に書いてあるが、ソフイーゼルメアンを賞揚して大なる思想家であると云つて居る、又其中に於て、ソフイーゼルメアンに付いて、尙注意すべきことがある、それは近世英佛の哲學者として最も有力なる、佛蘭西のコント、英吉利のスペンサー兩氏の哲學の先驅をなしたのはソフイーゼルメアンであつて、コントやスペンサーが後に一家の哲學を主張したが、それに先立つて同じやうな説をソフイーゼルメアンが主張したと書いて居る、其邊の事を考へて見ると、ソフイーゼルメアンは餘程識見のあつた人で、啻に哲學を研究して居つたばかりでなく、哲學上一家の創見があつた人と思はれる、

次にヒパーチアやソフイーゼルメアンと比較は出來ぬけれども、尙ほ一二女子の哲學者にして、餘り日本などには知れて居らぬ人を紹介せう、今日獨逸で最も有名なる哲學者の一人として數へられて居るエドワードフオンハルトマンと云ふ人があるが、其『無意識哲學』が攻撃された時、其妻君が哲學書を

著して良人の哲學を辯護したことがある、又同じくハルトマン學派に屬する人で、オルガールプルユーマヘルと云ふ女子が、哲學に關するむづかしい著述をして居る、厭世主義の歴史を研究して、男子も及ばぬやうに精密の觀察を遂げて居り、それから墺地利の人でドロスコ、ヴキッチと云ふ女子が哲學文學等の著述を爲し、ドクトルの學位も受けて居て名の聞えた人である、私が一度此人に或學者の所で紹介されて會つたが、普通の女子とは餘程違つて、較々男子のやうな風が見えた、



殊に彼の佛書の中に、勝鬘經と云ふものがあつて、日本でも隨分行はれたので、王朝時代から、大分讀んだ人があるやうであるが、それを讀んで見るとなかなか面白いことが書いてある、所が此勝鬘經と云ふのは婦人の名であつて、其婦人が自分の悟り得た所を釋迦の前で說いたものである、(所謂是こそ釋迦に說法で、自ら悟り得た所を述べ、釋迦の允可を得たのである) 即ち勝鬘婦人が自

ら究めた奥義を說いたもので、餘程深い所まで究めて居る、故に此人も一の女子哲學者として見るべきものであらうと思ふ、斯の如く古來歷史上の證據を取つて見ると、女子の哲學者が段々出て居るから哲學と云ふものに女子は全く適せぬかと云ふに、必しもさうは限らぬのである、一體に哲學に適して居るとは云はれぬけれど、稀なる場合には女子が哲學に力を用ゐて、可なり深い所を悟り得て著述した物が隨分あるのである、又直接に哲學を研究せぬのでも、女子にして哲學者宗教家を感化した場合が多少あると思ふ、

彼のオーギユスト、コントは佛蘭西の哲學者であつて、積極哲學を主張した人である、然るに晩年に至つて、大に其の學說を變更したことがある、一體コントの哲學は宗教などは全く拒絕する主義であつたが、後に其妻君を離緣して、クロチルド、ヴオーと云ふ婦人に懇意になつた、それで此婦人もコントと懇意になる時分は、良人を失つて獨身で居つたのであるが、此婦人がコントを大變感化して遂に其學派を一變させ、コントをして人道主義を唱へしむるやうに至らしめたのである、又宗教家などが大に女子の感化を受けたことは其例に乏からぬことであつて、耶蘇の如きも女子の感化を受けたらうと思はるることがあり、其他列擧せば多くの實例を示すことが出來るであらう、

概略前號より記述した通りで、從來女子が如何なることに成功したかと云ふことに付き、之を歷史上の事實に徵する時は、詩、歌、小說、又は繪畫音樂等に於て大に成功し、文藝に於ては女子が第一流の地位に達したことがあり、稀なる場合に於ては、哲學宗教などに大に關係も有つたことがある、併ながら斯く文藝に於て女子が成功したるに反して、自然科學又は數學などに於て成功したる場合を見ると、何程かはあらうけれど割合に少いのである、又法學であるとか工學であるとか云ふものも、餘り女子には適して居らぬやうである、それから醫學に於ては、

少しはあるやうであるが、是とても男子が研究を遂げた者に較ぶれば、殆ど擧げて示す程の者はないやうであつて、是までの歷史に由て考へて見ると、女子は最も文藝に於て成功の望があるやうである、さうであるが、茲に注意しなければならぬことは、今後自然科學、數學、法學の如きものに於て、女子は決して成功せぬと云ふことは容易に斷言が出來ぬ、精神上女子が斯かる學問に不適當であると云ふことは、深く研究を遂げなければ分らぬことである、唯々從來歷史に由て證據を取ると、不適當のやうに思はれると云ふに過ぎずして、今後大に女子敎育の道が開け、自然科學、數學なども研究の出來るやうになつたならば、或は成功する者が出來るやうになるかも知れぬ、故に女子敎育の道が開けて、十分研究を遂げた後、どうしても女子は成功せぬと云ふ時になつて、始めて自然科學、數學の如きものは女子に不適當なりと斷言し得るのであるが、日本に於ては未だ女子をして斯かる科學を研究せしむるの道を開いては居らぬ、歐羅巴に於ては、大學にも女子の入ることを許して居る、佛蘭西、英吉利等も女子の大學に入ることを許し、獨逸も近來は女子が大學に入ることが出來るやうになつた『私等が行つて居た頃は、未だ女子の大學に入ることは許されなかつたのである』又亞米利加に如何なる高等敎育にも、女子の研究する道が開けて居る、

併し茲に大に考へて置かなければならぬことは、女子はどうしても男子を助けて往かなければならぬやうに、自然の配合がなつて居るのであつて、內外分業の法に依り、男子を助くべき身を以て、男子と同樣に、之と競うて自然科學、數學の如きものまでも、研究する自由が從來得らるゝや否やは、甚だ疑はしいのである、尙ほ女子は男子程に立働く自由を得て居らぬので、男子は病氣をせぬ限りは、絕えず研究に從事することが出來るけれど、女子は生理上の關係から、必ずしも絕えず研究に從事することが出來ると限らぬ、又男子の方が一體に女子より體力

が優れて居つて、種々の困難に耐へられるが、女子は男子の如く困難の研究を遂ぐることがむづかしいと云ふやうな相違がある爲、自然科學、數學の如き困難なる學問を男子と爭うて研究することが、將來出來得るか否やは疑問に屬することであらうと思ふ然るに文藝に關するものは自然女子の性質に適して居る、女子の性質は一般に柔和にして、文藝は亦優美なものであるから、自ら適合して居ること丶思ふ例へば繪畫などに於いても、矢張女子に適したものでなければ、成功の望はむづかしいのである、先頃川端玉章と云ふ畫家に會うて話して見ると、同氏の曰ふには『女子は虎や獅子の如き猛烈なるものを畫くに適して居らずして、花鳥山水の如き優和のものに適して居る』と語られた、是に由て考へても、其性に反したるものを研究しては、成功に困難することは明かである、前述の如く、作家としては男子を壓倒するやうな女子が、王朝時代に現れて居り、又下つて鎌倉時代に於ても、阿佛尼のやうな人が現れて居つて、女子の作家は乏しくないのである、尚ほそれより戰國時代は如何と云ふに、其頃は男子と雖も學藝を廢して居つた位ゆゑ、女子は勿論學問するどころではなく、學問上から申せば全く暗黑時代であつて、僅に五山の僧侶が學問に勉めたのみであつた、又徳川時代に於ては如何と云ふに、三百年間のことであるから、其間で拾ひ集めたならば、隨分歌に妙なる女子とか、詩に巧なる女子とかゞあつたであらうが、之を王朝時代の文藝に較ぶれば非常に劣つて居る

偖明治の時代になつては如何と云ふに、女子の文藝上に於ける、成功はまだ十分現れて居らぬけれども、其徴候は多少見えて來たやうである、維新後今日に至るまで、女子が如何なることに於て比較的に成功の徴候を現はして居るかと云ふと、矢張文藝である、さうして又之と緣故の近い教育事業、慈善事業に於て女子が成功しつゝある、故に遠き將來は分らぬが、先づ今日の所では女子は文藝に於て最も成

功の望ありと斷言して差支ないと思ふ、或は將來日本でも女子が大學に入つて學問を研究するやうにならうが、今までの所では女子をして帝國大學に入れやうと云ふ考が、世の中に起らぬで、其考が起らぬのは不思議のやうであるが、又一方からいふと、女子の方が進むで自ら帝國大學にでも入るやうな資格を作らぬからである、若し女子にして自ら奮つて其資格を作るやうになつたならば、此問題が必然起つて來ることゝ思ふ、既に私立女子大學はあるが、是は唯々一時の需用に應ずるだけで、眞に男子と競爭するまでの程度に至らなければ十分發達したものとは謂はれぬ、果して其資格が出來て來たならば、帝國大學に入り學位を得ることも難からぬので、決して其の門戸が永遠に女子の爲に鎖されて居る譯ではない、若し女子が男子と同樣に帝國大學に入つて研究するやうになつたならば、日本の爲に大に賀すべきことゝ思ふ、けれども當分の所では女子の爲に最も成功の望あるは文藝であるから、先づ文藝に力を盡し、若し餘力あらば尚ほ他の學問に從事するのも宜からう、奈何せむ日本では女子の數が男子より少いから、女子の數が餘つて居る獨逸の如くには往かぬ、一體歐羅巴では女子の數が男子より多いが、其原因はどうかと云ふに、戰亂が絶えずして男子が多く戰場で殪れたためであらうと思ふ、それ故に女子の數が多く、隨つて結婚の出來ぬものがあつて、結婚の出來ぬ者は、自活の道を求めなければならぬ、所で大學に入る、法學を研究して辯護士となり、醫學を研究して開業醫となるやうに、進んで自活の道を得るため專門の學科を研究するやうになつて居る然るに日本は女子の數少くして、迚も獨逸などのやうには當分なるまいが、是等の點は學者が精密の研究をして、問題を解決しなければならぬことゝ思ふ、

◎博覽會の日本品　出品點數二千餘點なるが、之れに對する陳列場延長は、僅に三百三十間にして、到底出品者一同に滿足を與ふること能はざるが故に、第一監査を嚴重にして淘汰をなす由、而して其陳列方法に就ても、當局者に於て非常に苦心し居れりと、

女子と音樂

法學博士　江木冷灰

女子に適當する技藝はといへば、音樂の如きは第一に推すべきものであらう、之によつて夫子自らの心を清くし、家庭を圓滿にすることが出來る、實に音樂は人心を融和する唯一の技藝である、然るに音樂の趣味は、音樂の教育あるものでなければ解らぬ近時最も流行せる浪花節源氏節の如きは、誰が聞いても解るが、解る丈の話で、音樂としては少しの趣味もなく、而も誰にでも出來るといふ藝ではない、然らば音樂は如何なるものを撰ぶべきか、といへば今の所謠曲の如きものを推さねばならぬ、謠曲はその文章を解することが出來ねば、先づ以て其の價値を認むることが出來ぬ、即ち多少の教育あるものでなければならぬ、それから曲譜であるが、一年や二年位の稽古では、僅に抱腹に價する位なもので、三年位で漸く自分で氣が付くやうになり、四年位から少しづゝ妙味を解するやうになる、謠曲十年といひ來つた如く、なか／＼聞かれるやうな藝には容易に到着しない、然ればそれほどの面倒なものを女子に學ばせる必要はない、それには西洋音樂の如きものに限る、と斯ういふ人もあらう、自分は西洋音樂を排斥するものではない、寧ろ耳を傾ける方であるが、現時の如き有樣では、唯ピヤノやオルガンを仔細らしき顏をして搔廻はして居る丈の話で、音樂を學ぶ目的に添うて居るのは少ない、故に女學校などで音樂を課せられて、生徒はそれを點數の下に學んで居るが、少しも音樂らしき趣味は與へられず、隨つて學校時代の時間つぶしに過ぎないのである、物は入り難い所に價値のあるもので、手取早く教へらるゝといふものなどに、價値のあるものは少ない、故に西洋音樂もその堂奥に入れば、頗る妙味のあるものであるが、その前に日本の音樂を一通り研究して、それからの話にしてもよいではないか、

日本音樂で何が一番よいかと云へば、それは問題

で、矢張前言を繰返して、謡曲の如きものが、何れの點から云うても非難する所がない、根本が高尚に出來て居るから、之を謡ひ、且つ舞ふに、決して男女老幼の區別なく、之を學べば終生の娯樂とすることが出來る、歯の浮くやうな聲で、オルガンやピヤノを掻廻して居るのよりは、謡曲でも謡うて居る方が、何處となく奥床しく、之を舞ふにしても、踊と稱し舞踏といふものは、年によつて釣合のわるきのみならず、往々座席を亂すことがある、興をさますことがある、踊の方は風俗の上からは兎に角に、面白みのないでもないが、舞踏などは、開いた萎んだの少し發達した位なもので、習慣なればこそ、考へれば子供以上に馬鹿々々しい藝當ではあるまいか、然るに謡曲によつて舞ふ能は、年によつて釣合ふ釣合はぬといふやうな事はなく、一たび扇子をとつて立てば、亂れんとする座席も締るやうになる、

そこで此謡曲は大に改良して、多くの人の嗜好に投ずるやうにしたい、併し近來新作新曲を出すものもあるが、改良はさて置いて、從來のと到底比較にならぬ劣惡なものばかりである、その昔といへば、註釋書を見ても、現時のならば無闇に博識を衒うて、無理こじつけをするのであるが、正直にこの所解り申さず候、と書いてある、その時代の作物であるから、たま〳〵幼稚なやうなのがあつても趣味はある况して今の學者が從來のに匹敵する作物をも出すことが出來ぬといふに至つても、充分にその價値を誇る事が出來る、故に謡曲を學ぶもの丶風俗はすべてよく、百姓も謡曲を學ぶといふ加州は、男女の風儀が他州に優り、小川直子、安達安子、田邊和氣子の如き古來稀なる貞婦も出て居る、

先年久保田前文相が、謡曲は三文の價値もない、音樂は西洋のに限ると、某會にて廣言せられたことがある、すると某雜誌は、謡曲のヨウの字も、洋樂のヨウの字も解らぬ癖に、出放題を云ふものであると一笑に附したが、國務大臣でさへその在職中にそのやうな無責任なことを云ふのである、實に困つた

ものである、論より證據、日本で第一の洋樂家といへば誰である、云までもなく田中正平氏であらう其田中氏が日本人の學ぶ音樂は西洋のに限ると云かと云へば、決してさうでない、盛んに日本音樂を研究し、それが皷吹されて居る、聞く所によれば謡曲の如きは數年前より、研究せられ、氏が某高等學校の乞に應じて作曲せられたる校歌の作曲は、その曲譜を謡曲より採られたとのことである、三文の價値のないものを、世界有數の音樂家が、數年の星霜をその研究に費さるゝ筈があらうか、よつて思ふに、洋樂家と稱する人も、田中氏の域に至つて、謡曲の妙味を解し得らるゝので、群小洋樂家などに解るものではない、况してそれ以下の久保田前文相の如きは猶更の事である、これは餘事であるが、田中氏の音樂に於ける技倆、もしもその實力の十分の一位で歸朝せられたならば、忽ち群小洋樂家を屏息せしめて、飛ぶ鳥を落す勢力を、日本音樂界に放つであらうが、蝙蝠も居ぬ里に鳥が來たやうなもので、馬鹿々々しくて誰を相手に音樂を談じやうといふ氣にもなれまい、要するに近時の音樂家といふは、自分の生れた國の音樂の一くさりも知らず、少しばかり西洋音樂を聞かじつて、趣味の向上の爲といふより、風俗を紊すことに熱中する如き人々であるから、お話にならぬは當然の事である、

そこで强ち女子の音樂を謡曲に限るといふではないが、老幼を通じて、眞に家庭の娯樂として、高尚に而も妙味の存するものは他に何かある、前述の如く西洋音樂も結構であるが、西洋音樂と稱する現時の如きものは採らない、何にしても今少し眞面目でなければ困る、その一例を云へば、學校の一科目として敎へる唱歌の如きもの、あれが何になる、生徒は多くの時間を止むを得ず費して、點數に於ける苦痛とその物の面白味とは到底差引がつかない、故に學校に居る間、大口を開けて謡うて居るが、學校を出て後は、狐の退いたやうなもので、一口も歌はるゝものでない、實に不生産極まる話で、その他は推

して知るべしである、日本の音樂はいふまでもなく日本の歴史が自然に作つたものであるから、まづそれを基本として研究せねばならぬ、日本音樂で何の點から見ても、害のないものは謠曲である、害がなければ必ず利益する所がなければならぬ、故に謠曲は西洋音樂を研究する前に、まづ研究せねばならぬものである、日本の言葉を知らぬものが、西洋の言葉のみを覺えて見ても、日本人としてはあまり好都合でもあるまい、それと同じことである（談話筆記）

水のながれ

醫學博士　三浦守治

我業を何し磨かむ玉川の、水のながれの息むことなく。

雲ならで通はじとおもふ足曳の、山の高根のにはとりの聲。

まことこの胸たちわりて見すべくば、見せばやとおもふわが心かな。

世の中の春はものうし鶯と、ともにのがれむ花かげもがな。

そらばめの聲おそろしき世の中に、嬉しくもあるかうぐひすのこゑ。

夜見の國こひしくもあるか父母の、みたまのいます國とし思へば。

竹柏漫吟

佐々木信綱

弱肩に薪負ひたる唄聲や
　夕もやつゝむ山かげにして

一ときを物のたまはぬわびしさに
　鬼すむ國にあることゝちする

志摩ぶりや紀の國まねて椿葉に
　たばこくゆらす里童かな

あら海のあらきひびきに疲れたる

胸にしたしきたに水のおと
すべなくて鏡はとれどひやゝけき

ゑみもうかばずなりぬ此頃
白雲の五百重がくりに山と湖と

何をか語るわしたゆふべに
破れたるを琴いたゞきて離れ島

清きみぎはに我世はをへむ
めもはるにゆたに霞める江の南

梅ちるさとの妹をしぞおもふ
くもり日を櫓の音しづかに舟ゆくや

人なき島のなでしこのはな
若くさの岡邊の道にのぼり見れど

君がすがたの見えずもあるかな

小金井　喜美子

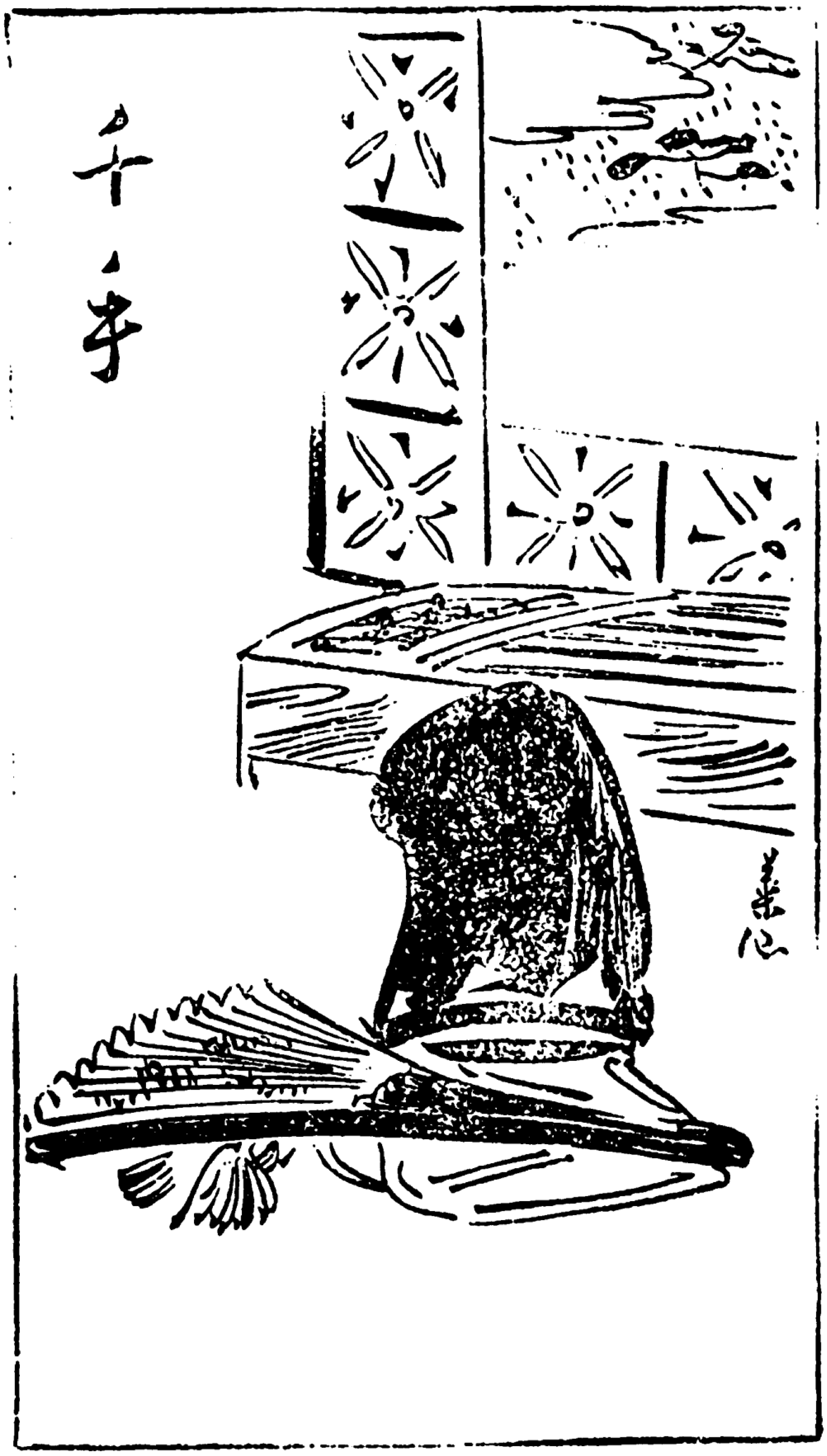
重衡卿

いたましきかな重衡卿、名たゝる入道相國の、末の御子にましませば、父母の寵愛かぎりなく、兄弟にすぐれ一門にこえ、色ゆたかなる富貴草に、たとへられたる御身なれど、二十日の草のそれならで、廿餘年の榮華の夢、醒めてはかなくちる花の、都をあとに西海の、浪のまに〳〵うき沈む、浮世のさがみ鎌倉なる、狩野の介宗茂の、舘にとらはれ給ひける、心の中こそいたはしけれ、

そも賴朝卿の御召仕、千手の前と聞えしは、手越の長の女にて、姿やさしく﨟たけて、心ばせさへみやびかに、情も深き手弱女なるが、頃は卯月の二十日の日、君の仰に吹彈の、なりものもたせ竹の葉の、露とりそへて降雨に、軒の雫の音絶えぬ、今日の夕べの御つれ〴〵、慰めばやとて參りけり、

うき事多き身にしあれば、何慰さまんさはあれど人の心をやぶらじと、手まづさへぎる盃も、いと興なげの御氣色に、千手の前は御酌にたち、羅綺の衣を重ねたる、情なきことを機婦に妬むと、聲朗かにぞ歌ひける、重衡聞てのたまふやう、其朗詠をきくもい

は、北野の神の御誓にて、守らせ給ふと人はいふ、
されど我身のこし方を、思へばいともはかなしや、
去ぬる治承四年の夏、三位入道の一族を、宇治の渡りに打やぶり、天顔に咫尺して、物の具のまゝ奏せしを、叡感ありしも夢なれや、今年きさらぎ初めつ方、生田の森の合戦に、武運拙なく打まけぬ、せんかた波路はるかなる、味方の船を心あてに、渚の方に落ちてゆく、駿馬にむち打追ひ來る、敵を物とも思はざりしに、計らず遠矢にかけられて、頼み切たる童子鹿毛も、はかなくたふれ伏しにけり、



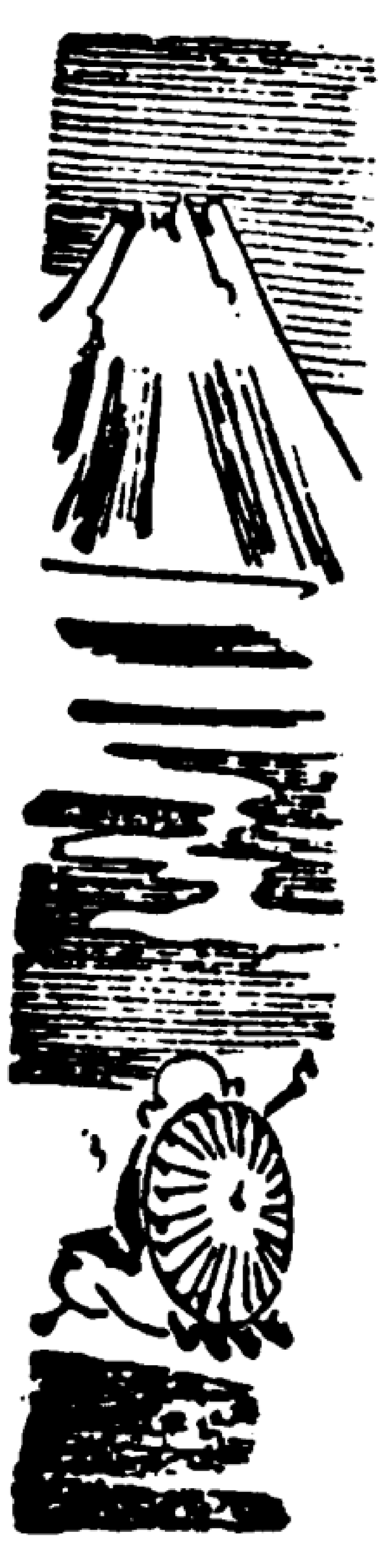
乳母子なる守長の、乘れる夜目なし鵇毛をば、のりえんとてめしたれど、世に淺ましき人心、年頃かけし情をも、忘れはてけむ主を捨て、鎧の赤符かいやりて、呼かへせども影もなく、雲霞とぞうせにける、追ひ來る敵はちかよりぬ、腹かき切らむ鎧の上帶とくひまもなくとらはれし、身のすぐせこそはかなけれ、

世のうきことに逢阪や、時に粟津の原すぎて、泪に曇る鏡山、つもる思ひをのせて行く、馬ぶちの里

もはや過ぎぬ、南都の伽藍を亡ぼし、其身の罪の恐ろしく、よみ路を照らし給へとて、法の燈長光寺の、柱に殘す筆の跡、ゆく／＼心かきくらし、雨に鳴海の夕まぐれ、くも手に物を思ひわぶ、八つ橋渡り程もなく、池田の宿につきにけり、はにふの小屋のいぶせきに、戀しからんと慰めし、人の情は身にしめど、其故郷の都さへ、終のすみかにあらざりき、命つれなく甲斐がねに、つもる白雪詠めても、消やらぬ身ぞかこたるゝ、

なげきの中に日を重ね、なほ今日迄も長らへぬ、されど蜉蝣はそれならで、明日をも知らぬ我身かな、殷湯の夏臺文王の羑里、昔のためしなきにもあらず、唯罪障の輕みぬべき、事のみこそはとの給へば、千手げにもとうけがひて、十惡といふも猶引攝すと、折返しつゝ歌ひけり、聲うちそへて重衡卿、笛とりあげて吹き給ふ、げに其樂は五常樂と、世にはいへども今日はたゞ、後生樂とぞ思はるゝ、なほ興つきねば名殘として、皇麞急を奏せばや、そも此樂はもろこしの、王孝傑が契丹を、責めける時に幸なくも、黄塵谷にてみまかりしを、中宗皇帝いとほしみて、作り給ひしものとかや、それは命を失なへど、なき後迄も譽あり、我身の爲には此曲も、往生急ぞと泣き給ふ、千手の前はいたはしさに、音にたてつべき心をば、引かへしつゝ琴とり出で、一樹の陰にやどり合ひ、一河の流を汲む人も、前の世の契あさからずと、調べかなづる折しもあれ、すきまもる風吹き入りて、御前の燭消えにけり、中將これを見給ひて、燭は暗し數行虞氏の涙、夜は深し四面楚歌の聲と、くりかへしつゝ詠じ給へば、簷の雫のそれならで、聞く人袖をぞぬらしける、

其後重衡木津河にて、うせ給ひしを傳へ聞き、千手は緑の髮きりすて、綺羅の袂を墨染の、衣にぬぎかへなき君が、後の世をこそとぶらひしか、



美術技藝界のいろいろ

◎電話にて音樂を送る發明　近來紐育市の旅館料理店にては、廣間食堂等の天井より美しき玻璃花を垂下し、其花より妙なる音樂響きて、來客を驚嘆せしむと云ふが、此はハーモニツク、システム（電奏樂器）と稱するものにて、ドクトル、キヤヒル氏の發明に係る新樂器なり、氏は十八年前電話より思附き、先づヴアイオリン、ピアノ等の音の空氣の震動する力を詳しく計算し、夫より此樂器の發明に苦心する事十四年にして、始めて成功し、爾後種々改良を施し、紐育市卅九番街の大通に發電所を設け、此處より諸方へ音樂を送る裝置を爲し、知名の學者新聞記者等を招きて、實地の試驗を爲し、著名の旅館等頻りに加入を申込みて、次第に流行する趣きなれど、氏は更らに幾多の改良を加へて、完成と自信する上にて、全世界に紹介する覺悟なり、此原動樂器はピアノの如き形にて樂手鍵盤を彈ずれば、一段毎に後部の電線より加入者の家に感じ、玻璃花中の喇叭管より樂聲を發する仕掛にて、ゼ、ミユージツク、トレード、レヴユーの如きは、世界の樂界に多大の貢獻を爲すものなりと論ぜり、

◎婦人技藝協會懇話會　米國に渡りて技藝の研究を遂げ、此程歸朝したる飯島榮太郎氏幷に夫人可年子女史の主唱により、京橋銀座一の六に設けられたる帝國婦人技藝協會は、先月三日午後一時より、技藝研究を兼ねて婦人懇話會を芝濱館に開きたるが、百餘名の會衆中には老媼も少からざりき、三輪田文學士、谷紀三郎氏等の講演ありたる後、餘興に移りて散會せり、

◎女流圍碁の名手　都下にある女流中方圓社より資格を得たる圍碁の名手、麴町區飯田町四丁目㐂多文子（三十四）▲四谷區伊賀町二十番地都築米子（三十六）以上三段▲本郷區本郷一丁目九番地伊藤きの子（三十四）二段▲京橋區瀧山町十一番地杉森ぶし子▲芝區吉田きく子（四十）▲日本橋區上槇町林きく子▲本郷區湯島四丁目竹田いつ子（三十四）▲淺草區馬道町一丁目十番地青木きく子以上初段

等にて、其多くは獨身者にて、良人を有するは僅かに喜多文子一人のみなり、同女の良人は彼の能樂師として有名なる、喜多流の家元喜多六平太氏にて、同女の家よりは代々女流圍碁の名手を出し、其實母は即ち初段なる林きく子にて、祖母は最早物故せしも林さの子とて、三段の名手なりし、又伊藤きの子の母は伊藤しげ子とて昨冬死去せしも、之れ亦二段にて、眞の手腕は三段の價値あるべしと迄云はれたるものなり、尙其他に彼の本因坊氏の弟子たる、高田商會主愼藏氏の夫人高田民子も亦優に初段の資格を備へ居れりとなり、

造家の記

小川直子

古何がしの法師がいひけんやうに、かりの宿りとは思へど、家居のつき〴〵しくあらんこそ興あるものなれ、しかのみならず、衣食住とて人の世にふるほど、一日ひと夜もなくてえあらぬものゝ中のひとつなれば、己もこだび一字を營まむとぞ思ひ成りにたる、固より三つ葉四つ葉の殿造にもあらず、いとかでかなる庵にしあれば、物の數ならねど、如何なるさまにや造らましと、心をめぐらすに、時世の遷り變るにつれては、さま〴〵なるに、まして此頃は外國ぶりの石造や、何やと今めかしきもいで來ぬれど、馴れしにそみし心からにや、猶我國ぶりの昔おぼえて、安らかにみやびかなるこそよけれ、とおぼえつゝ、格子あるは半蔀など用ひたるさまにしつらひ、且冬は如何なる所にも住まるゝものなれば、只夏を旨として、端居する袂に三日月を宿して、夕風待とるたよりよからむやうにと、南の方より東に折れて、簀子をめぐらし、いよ簾かけわたして、前栽などもさる心して、かたへの池には蓮うえわたして、濁りにしまぬを友と見んなど、すべて暑さをよそに過さんのあらましなり、はたこゝかしこに用なき所を造りそへたるは、見る目おもしろからんとてのすさびにこそ、さるは海士の子ならねど宿も定めず、西に東にものしつゝ、年經たる身の、今更かく住家などに心をとゞめば、自いぶかしく思はん人もなどかなからん、されど蝸牛だに身をかくすべきよすがはもてる物をと、我と我身にゆるしたる如何あらむ、

眼中の得物

佛國　スーペルトル作
淺岡　一譯

古昔の詩人が人間の一生は宛然暗がりの夢だと云ひましたが、寧ろ冬の夜の夢といつた方が穩當かも

知れません、其長い所か、

サテ此夢を形ちづくる材料は何かと申すと、動靜と申す二つが幾回も轉換することで、其内の重なるものを擧げますと、困窮、眩惑、立身の希望或は悲嘆、驚愕抔と申して、情思の爲に起る當惑、言はゞ進退これ谷まると申す樣な事項、是等が先づ夢を形づくるので御坐います、即ち是等の爲に人間が幾回も動靜するので……然るに人間と申すものは淺はかなもので、此の動靜の間に居つて、安心の地位を得やうとして、却つて其安心を得まする資本とも申したい勤勉といふ大切なものを忘れます、そこで人間一生は最初の三分の二は多くは確定しませんので、趦趄逡巡の時代と申してもよろしい、後半の三分の一は隨つて後悔の時代と言はねばならぬことに成つて參ります。

世の中の人が人間は如何なるものかと謂ふことを考へますが、それよりも先づ第一に自分は如何なるものかと考へることが必要である、自分の一身は取りも直さず一人の人間を寫した鏡ぢやと見做してよろしい、ぢやから自分一身の履歴は必ず一般人の歴史の雛形ぢやと見て差支ない、利害得失に依つて喜怒哀樂する其爲に、動靜する抔といふことは、人も家も同じことである、然るに世の中の人は自分が酒に醉うて身體が動搖する、其動搖を取り違へて地震がゆる、それで自分の身體が動搖する抔と定めて、是は自分の間違であると云ふことを心付かぬから困る、どうも世の人は大體個樣なものらしい、偖、自分等は何故に齷齪働いて今日の境遇に在るか、何故に陋室に蹲つて名譽もない責任を盡さうとする不幸なもので有るか、併しながら個樣なことは世に自分のみではない、自分と同じ境遇に在る人間も澤山有ることは云ふまでもない、それで自分は自分と境遇を同うする同胞に對し、自分の固有の良心をもて自分の思想を述て參考に資したいと考へた、

自分の今日まで無事に通り越して來た道、且つ何の考も何の疑もなく通り越して來た道が、俄に二筋

に分れて來た、何方の道を擇んで足を踏れるがよいか、實に分別が付か無い、其道の一つは今迄來た道を其儘向ふへ行けばそれでよいのである、今一つの道は中々廣大な道で、今迄通り越した道より横に切れて居る、斯う云ふ樣なことが、自分等の生活の上に現はれて來た、そこでこれを判定することは實に容易でない、最初の道を其儘行けば恐ろしいことは何もない、只面白い景色を見やうとするには迂濶な樣である、他の廣い方の道は中々險阻で危ないことが無いとも限られない、只好い景色を早く見ることが出來る樣に思はれる、何うも其一つを擇つてこれはよいと決定のは出來にくい樣に考へられた、

自分は此事で昨冬以來精神を費したが、何方の道がよいことやら猶決し兼て居る、其利害得失を見分る光線は何處から來るか、助言する人は何處に居るか、それも分らない、

ハテ嬉しい太陽が出て來た、冬の濃い霧の中から出でた太陽は、春の來る先觸の樣に思はる丶、これは愉快だ、何ともいはれぬ心地よい風が窓から吹き込で來た、此盆栽の紫菫の花が咲きか丶つた、此温和なる氣候に感じて、十六世紀の感情深い詩人が詠じた詩の一節を思ひだした、

見わたすかぎり野も山も、雪の白無垢脱ぎすて丶、にしきの衣にあらためし、彌生の春の朝ぼらけ、空ものどかに見ゆるなり、

目には見えねど人心、春のけしきに誘はれて、さびしき冬のあぢきなき、思はきえて跡もなし、

兎にも角にも我胸に、今日のけしきを止めおきてをりふしごとの言の葉に、添へつ丶君がうきふしの、なぐさめぐさとぞせまほしき、

と記しましたが、譯者は此處で白狀せねばならぬ罪が御坐います、此詩を原文で見ますと、斯う長くはない、直譯すれば、(萬物の新になるは春の彌生の此麗しき月にぞある、わらはが君の眼に映せしむる美しきものは、實にわらはが心にぞある、)と斯う申して居るので御坐います、それを敷衍して三段に譯しま

したが、眞の原文の意義は何處にか僅かに殘て居るか居らぬ位だかも知れません、故に此詩抔は只今申した短い方の意義で如何に改められても憾はありません、サテ、此處から本文に立歸ります故に此後はスーペストル氏の言葉でございます、

斯ういふやうな詩句で有つた、自分が未見ぬ同胞の爲に誠を推して慰めもし、助けもしやうと思ふのも、自然此詩の意義に合うて居る、雀が囀る、はてな、自分を呼ぶのかも知れん、一月以來毎朝麪麹の碎粉を食べさしたので、今日は其御馳走の催促しやと、窓を開けて見た、我居間の遠景といふものは實に得も言はれぬものであつた、此景色が我が居間の專有物とも云ふべきやうにおもはれた．

嗚呼これが困窮人の幸福じや、此の最高樓、最下層に居る富貴の人には、地平線上の斯樣な美しい氣色抔は想像にも出來得ることではない、彼等富貴の人は屋根瓦を見たことの有るばかりで、此大厦高樓の斯うも美麗に排列せられて有る氣色を見たことは有るまい、マア此大厦高樓が鱗の樣に並んだ間の、谷間々々に屋上庭園やら、又は朝日の影が石盤色の屋根に映ずる工合、時としては眞赤な夕日が種々玻璃窓に當つて反射する其模樣抔は、實に廣大無量の油繪であるが、決して此油繪は富貴の人の見らるゝ物ではない、又苔やら他の隱花植物で織り成した文明の製作物といふべき此眼前のアルベン山の、此の花譜は富貴の人の學問し得ない花譜である、こればかりではない、此最高處に居る幾千萬の人をも、且つ其人が常に顯微鏡動物より犬猫に至るまで發ひ置く樣も、富貴の人は見得ることでない、猶此高處に機會を見て、何か一ト仕事せんとして大なる狐の居ることも、富貴の人は知ることでない、猶これ處ではない、晴れたり曇つたりするが爲に、種々樣々の變化の有る空の景色をも知らぬ富貴の人も有らう、其外太陽の光線の爲に雲井の内に種々の演戲を現すことすら知らぬ富貴の人も有らう、

自分が今まで餘暇のある度毎に、眼界中種々の演

劇を認め、愉快なことと或は、不愉快なることを發見しやうと勉めた、言はゞ、贅澤なる旅行者が、旅中の見聞を喜ぶ如く、坐がら窓を開いて眺望することを喜び居つた、イヤまてしばし、隣の親友、彼の羽のある小さな隣の親友、即ち、雀公は先刻撒いた麵麭の皮を何故食べぬであらう、先程彼は飛去つたが、又重ねて來たのを見た、現に窓の近くに集るのを見た、其上御馳走を見て囀つて居つた、いつも直ぐに食べ盡して仕舞うのに、今日はどうしたことであらう、自分が茲に居るから、自分を恐れて此に寄付かぬのか知らん、イヤさう云ふ譯は無い筈ぢや、しかも自分は掌の上に食物を置いて食べさしたこともある、彼の食べぬのは、益々合點の行かぬことだ、何か譯のあることゝ思つて更に注意して諸方を見廻した、我室の窓は開け放しのまゝであるが、隣室の窓は閉ぢられてあつた、何うも斯うと思ふ程のこともないので、御馳走を多くして雀公を招かうと思つて食餘りの麵包を又も澤山に振撒いた、

すると雀公の囀づる聲が盛んになつて來た、併し彼等は遠方に居つて首を傾けるのみで、容易に飛んで來ない、其内の尤も大膽なものとも謂はるゝものでもあるか、僅かに數羽飛んで來た、飛んで來たが終に留つて御馳走を食べるものは無かつた、

如何にも不思議なことだ、自分の掌のものさへも食べた雀公が、今日に限つて近付かぬとは、されど自分を恐るゝより外に恐るゝものは居らぬ譯ぢや、雀公貴樣達は自分に捕へらるゝと誤解して寄付かぬのであらうが、どうも人間とは違ひ貴樣達には譯を謂ふても分からぬから仕方が無い、と斯う謂ひながら窓の戸を閉ぢて室内に引込み、雀公に安心して麵包を食べ得る機會を與へやうと思つて窓の戸に手を掛けた、手を掛けつゝ驚いた、直ぐ右手の處に角の様なものゝ蔭影が映つたのを見た、朝のことだから、實物よりも蔭影が大きく映つたのであつた、左方を見ると、屋根の隅から猫の足の爪が現はれた、續いて虎猫の頭が出て來た、彼は雀公を狙擊する伏

兵で雀公の庇に下りて食べやうとする時不意に一撃を試みやうと身構して居つたのであつた、自分は雀公の怯懦を笑つて居つたが個樣な險吞なものが雀公を脅かして居つたとは心付かなんだ、自分は善く注意して何も恐るゝものは無いと信じて居つた、併しよく〱思へば自分の視線も自分の注意もつまり雀公と其御馳走品との間にのみあつて、自分の視線も自分の注意も屆かぬ屋根の方にあらうとは實に案外のことであつた、人の生涯にも注意の屆かぬ所があると不幸と云ふ危險物が直に付け込んで來る、却つて自分よりも雀公の方が、注意周到であつた、夫れで奇禍を免かれたのである、

此頃は雨と風とのために妨げられて、餘程久しく目の所有物を失ひ居つた、夫れ故今日は此の所有物を恢復仕樣と思うて居つた、元來余は眺望中に何か眼を止むる樣な物を見出せばそれからそれと、段々に視線を滑らして見るのが好きである、

ヲツト見付た、先程より眼を付けて居つたあそこに見ゆる彼の二つ並んである室だ、並んではあるが、丸で違つた生活の有樣で有ると思つて居つた、其一つの室は貧窮な職人風の男の室である、彼の男は毎朝早くから起る男である、そして何時も能く働き居る、夜も晚くまで何事か仕て居るらしい、其隣の今一人の男は、都びた風の若い男ぢや、折々面白い歌の聲などを此室まで響かし居つた、彼の二つの家の窓が開いてある時に、其家の中まで手に取るやうに見えた、彼の職人の方は、碌な物も持たぬ風で眼に入るものは間に合せものばかりと謂ふ樣に思はれたが、今一方の洒落た男の方は中々贅澤で立派な生計をして居つた樣であつた、今見れば商人風の男が大勢彼の室に推し掛けて居る樣だ、そら絹の絨氈を剝がして持ちさる樣だ、今朝この窓の下を彼の男にそつくり其儘と言ふ樣な男が、覆面して急ぎ足で通つたが、矢張り彼の男であつたらしい、彼の時彼の男は逃げ出したのである、想ふに、資力が無くなつて仕舞つたか、又は、不意の出來事で、不幸に陷つた

か、何にせよ贅澤を盡した身分が、赤貧の身と成り果たものには相違ない、之れと違うて職人の方は、秩序と勉强とで持て居る代り、貧窮の樣に見えても手堅い、洒落者の方は今は早古道具屋の餌食となつたらしい、なんと此の二人の者の境遇は少年敎課の材料に好い事柄ではあるまいか、此の二つの手本を見たならば世の有識者が、人々の力量と意志と年月とを結合させやうとするのは、つまり他日の成功を期するからのことである、人間と云ふものは、毎日給金を貰ふことの出來る勤を持て居ると思ふが適當であらうか、又は、打擊に因つて勝敗を定むる決鬪をし居る者の樣に考へる方が適當であらうか、なぜ人は危險を冒して、一時の僥倖を求むるであらうか、如何なる矮屋でも、いかなる荒屋でも、快樂と云ふ道具を置く場所は有る、又如何なる小さい室でも良心と云ふ主人公の氣に入る裝飾品は得らるゝものである、

斯う考へつゝ、手を招き頭を胸の方に傾けて廣くもあらぬ室内をあちこち步いた、自分の疑ひが段々大きくなつて來た、丁度正午から草木の影が段々長くなる樣な工合であつた、危惧の心も起つた、果は悲と成つて來た、自分は今夕までに自分の運命を決定せねばならぬ、今自分の掌中に一つの籤を握つて居る、此籤が自分に何事をいふ、殆ど戰慄する程である、

兎角する間に、空が曇つて來た、寒い風が西の方から吹いて來た、何處の家の窓も鎖されて仕舞つた、只最高樓に住む者丈けは外の明を捨てるに忍びぬのか、寒いのに閉ぢずに在つた、

ハテ奇妙な樣子の人があすこの檐側の處に運動して居る、灰色の髯で、金紐の服を着て居る、彼れは年老た兵士らしい、彼の檐側に何か居る樣だ、あれは小兒と箱庭とで、どちらも老兵士などの好なものと見える、老兵士は運動しながら、小兒と箱庭とを相手にして樂んで居るのであらう、一體兵士と云ふものは、廣い土地を見れば、是は戰場に宜しい抔と

考へるやうなもので、久しく平和の快樂など、云ふことには、遠ざかつて居る、そこで幸に討死するやうなこともなく、命を捨て、家に歸ると、壯年時代の艱難辛苦の埋合せに、白髪天窓で平和の樂みがしたくなるものと見える、言はゞ生替つて來て、安樂が仕度いのであるらしい、そこで彼等の若い時代に剛氣の精神を以て、手荒い仕事をして居つて、平安無事の樂が珍らしいから、常人から見ると小兒らしい樣なことが、彼等のためには大さう面白い、ことに感ずるやうに思はるゝ、そこで老後の樂として箱庭を弄んで、小兒と共に色々な草花抔を詠めるのが、彼の最も愉快を感ずることゝ見える、

又寒い風が吹いて來た、併し老兵士と小兒とは矢張椽側から引籠ますに居る、ム、箱庭を耕して居るな、種々の種を蒔て居るらしい、此後彼の老兵士は屹度毎日心を箱庭に留めて、芽の出るのを樂んで居るだらう、また其新芽に妨げをする蚋やら其他の無血虫を征伐するだらう、或は糸を引きて、其幹の倒るゝを防ぎ、或は水を灑ぎ、或は温度を適度にする等、囑注意することであらう、

マア其成功期までには、どの位骨の折れるやら世話の焼けるやら、一と通りのことでは無い、それに寒さも熱さも、太陽も北風も、彼の箱庭の花草を害することがあるに相違ないから、老兵士は之に困らせらるゝだらう、併しながら、夏の最も熱い日此の巴里市中に温まりたる、塵埃が空中に渦き登る樣な時、地上の光線の反射のために、眼の回はるやうな時、誰彼の差別なく、實に自分の體を處するのに困るにも係らず、彼の老兵士は自分の身の廻りに、其箱庭の草花の涼しき姿を見つゝ、嗅き香を嗅きつゝ苦熱の情を慰むることも出來やう、是が老兵士の骨折に對する賞與であらう、

さうぢや花を樂む爲には、種も蒔かねばならず、世話もやかねばならぬものと見えるな、

先刻から簇がつて見えた雲が、空を鎖して眞暗になつて來た、そら雷が鳴つて來た、そら空が析けた、

どうもこれは大騒ぎだ、彼處の市街の混雜の有樣は實にひどい、彼の叫びさまは……彼の笑ふ樣は……、併し何も危險なことの有るではなし、自分は面白半分に見て居つた、一體人間と云ふものは、交際だの習慣だのといふやうなもの丶ために、天然の性質を矯めて居るが、個樣な不意の出來事に出遇ふと、丸で天然の性質を顯はして仕舞ふ、

人の歩み方なども、容體振つて居る方が多いが、今日の樣な大みぞれ抔の時は、丸で無作法の書生と同じ樣になる、帽子を濡らすのを恐れて、天窓をびしよ濡れにして驅けて行く人も見える、何處も彼處もびしよ濡れにして、平氣でそろ〳〵歩く人も見える、イヤ彼處に一風違つた婦人が見える、彼の婦人は斯樣なみぞれを冒して歩くのが好きだとでも云ふやうな有樣に見受けらる丶、彼のビロードの外套の上に降り懸つて、半は凍つて居る雫などには、心も留めぬやうだ、彼は豪傑を氣取つて居る婦人か知らん、どうしても通常の婦人では無い、又妙な少年が見える、立ち止つて降つて來る、みぞれを手の上に受けて居る、みぞれの雫を顯微鏡に懸けて見やうと言ふ量見かも知れぬ、彼の『少年』は見たことのある顔ぢや、何時も早足で、何時も忙しさうにして居るから、多分税金取立の小吏だらうとの噂もあつたが、今思へば決して税務所の小吏では無い、電氣の作用などを研究して居る學者らしく見える、

みぞれの小歇を待うとて仲間に外れて雨やどりする小童、聲を揚げて笑ひつ丶眦の下つた小娘、隱れ場所を見付くるために、勇武の姿勢を打崩し、うろつき廻る兵士、あれを見ると俄かの暴風雨と云ふものは人間の有樣に大變化を……

兎角する間に、みぞれは益々甚しく成つて來た、往來の老弱男女は自分の眞向ふの店にどや〳〵挽し懸けて入込んだ、彼の店には休憩所と云ふ札が懸つて居るから、彼の通り人が入込むのぢや、まう此の三四ヶ月の間に個樣な暴風雨で人の雨宿りすることが、今日で第四回目だと思ふ、今の家主が一年程前

に大工や繪師杯のよい加減の御追從に乘つて、店の修繕やら粧飾ゝどに大分金をかけたさうであつた、是で人目を引いて家賃を高くすることを實行した、其後再三入替つて其替る度毎に、店が汚なくなつて、借家賃の價下げをした、今では見る影もない有樣で、往來人の休み所となつた、つまり樂に店子から店賃を取らうとしたからである、家主やら地主やらの零落する折には、借家人の入替るも個樣なことから起るのである、此眞向ふの店のことで自分は實に感じた、全體今日の眼に觸れた事柄は皆自分の戒めに成つた樣な心持がする、どの事もどの事も、注意せよ御身は御身幸福なる貧困に滿足せよと云うて吳れる樣に思はれる、世にも人にも知られぬからして、御身の今日迄の境遇を棄てゝはならぬ、と斯う云うて吳れたるやうに思はれた、

はてな、此戒、此話は何處から來たか、自分の周圍を取卷いて居る都ての物が斯ういふ樣に謂うて吳れると思ふのは、矢張自分の心である、世の都てのものは皆自分の心で、如何樣なる聲をも出させることが出來る、如何なる敎誨が善いとか、惡いとか言ふことは、自分の問ふ處でない、自分が平素心の中で、言ふ所の聲、聞くところの聲は、皆自分の朋友の聲である、然るに誰も朋友はあるが、誰にも過は起易いものである、これは外物に誘はるゝから起る迷の爲である、畢竟愚人やら惡人やらの多いのは、自分で自分を知らず、即ち自分を見誤つて居るからである、此問題を解釋しやうと云ふには、自分に適當なる事柄を知らんと勤むるではなく、何事に自分が適當するかを知れば宜しいのである、世ゝは金錢に關しては實に大膽なる冒險者の多い、其中に自分の樣なものが何を爲し得らるべき、思ひ設けざる所に仇讐の居ると謂ふことに就いては、我が親友の雀公に於ける、猫の事を考へ、謹愼勉强を要すると云ふことに就ては、贅澤でもて忽ち不幸に陷つた彼の洒落男のことを顧み、小心翼々と言ふことに就ては、花草を培養して居る老兵士やら、慮り淺くして失敗した家主を鑑みやうと思ふ、自分は言はゞ野鼠のやうな生活が好きだ、安寧といふ味を加へた食物があ

れば、それで滿足するのである、世の人は何故飽くことを知らずに、富貴を得やうと思ふのであらう、大きな盃でなければ滿足する程に飲むことが出來ぬと言ふ譯であるまい、事には何事にても、適度と云ふことがある、即ち其人相當の分限といふものがある、これを守ることが取も直さず、平和の源で、自由の境界といふてもよい、何が嫌で世の中の人は此分限に安んじて居ないのであらう、世に家庭教育とか普通教育とか云ふものがある、これは世の中の人に此の分限を守らせる樣にすることが第一の目的である、此教育でもつて世の中の人が銘々自分を知つて、自分相當の事をする樣にすることが、何より大切なこと、思ふ、されば自制儉素抔といふものが、人間社會に貴重な價格を持て居るといふことも、亦同じ道理から割り出したものである、

是等の事を熟考して自分は新道を行かんとする者の道連になることを謝絶した、此決斷が善く自分の心持を安穩にした、自分は榮華に對する希望を斷念したと同時に贅澤奢靡抔といふものを悉く排斥した、是が大に自分の精神に快樂を感じた、

●信樂燒德利物語

山の芋化して鰻となるは昔の諺、實際ありさうな理屈もなけれど、矢張芋が鰻になるかも知れず、閑話休題、角突きの牛込の奥横寺町邊に居を構ふる畫家倉田松濤氏方にては、度々陶器製の門札を盜まるゝ妙な災難の例あり、人の名書いて標札では、禁咒にもなるまじきに、一體何の惡戯かと其都度頭は捻つたれど、對手が判明らねば腹も立てられず、盜まるゝ度に新調して揭げ置きしが、去る一月二十一日の夜又もや幾度目かの盜難に遇ひぬ、翌朝門生の某が發見して騷ぎ立つるに、松濤氏またかと呟きて立出で見れば、小さき踏臺に泥だらけの德利を乘せ、其上に汚い草鞋が立懸けありき、松濤氏怪訝の思ひをしながら、要こそあらめと、件の德利の泥を洗落し、扨熟々と打戍れば、這はそも如何に此德利こそ、其昔遣唐使時代に渡來せる無傷の信樂燒、世にも稀なる珍品なりしかば、主人は一度び驚ろき、一度び呆れ、四十錢の標札で此樣な珍品が手に入るとは、夢のやうな幸福ぞと雀躍して悦び居る中、此頃韓國より歸京せる松田學鷗氏が是を見て、五十金を差出して、强ひて所望し去りけるが、京都の骨董商某が聞込んで、二百圓で讓つて呉れと松田氏方に申込み來れりとぞ、コンナ事が度々あるなら、山の腹に穴あけて金を探さん要もあらじ、何は兎もあれ近頃珍しき話と云ふべし、

小説 # 千代の鉢

泉鏡花

（上）

石壇を登り果てると、快く汗になつた、小田原は相摸の中でも最も氣候の暖な處だとは聞いて居たれども、然までとは思はなかつたと、我が友は語るのである、去年大晦日、前夜は酒匂の松濤園に一泊、小田原の町をゆるりと見物して、晩方餘り寒くならぬ前に、函嶺まで徒歩といふ積りであつたから、其日は朝疾く旅店を出た。

函嶺行の電車は、昇降の客の有無に係らず、一寸此の門で留るので、ぶーンと鳴つて來たのがかたりと着くと同時に我が友は松濤園を出たのである。

見送つて女ども、

『御機嫌よろしう、』

『お靜に行らつしやいまし、お歸りをお待ち申します、』

電車には唯二人乘つて居た。此方を脊にした一人が、女の聲に振向いて、出合がしらの友人の姿を見ると、ぐいと逆に、仰向けに反るやうにしてオーバコートの肘を長く、半身を窓から乘出しながら、

『やあ江島』

『戸田と、』我が江島は應じた。

然うすると向側に腰かけて、制帽扣鈕で居たのが、笑つて物靜に、

『先鋒何うした、』

『本陣も敗軍と見えるな、』

『殿は正午頃遁げて來る、』と戸田は手を掉つて

『乗らないか一所に行かう、』

『晩に、これから些とばかり見物だ、』

『江島、落着くさきは環翠樓だよ、』

『可、』

『左様なら、』

『お静に、』と又女ども

電車は中だるみした針線に傳はつて、低きに着くが如くすら〳〵と駈けて去る、

此の間の消息を知るものは知つて居やう、けれども、之は例年々末の落人であつたことに趣味を持つて故と其の落人に扮したので、大學でも自ら平家方と稱する此の人達、今年は皆業を卒へて秋の末から冬枯にかけて、いづれも懐中は豊なので、めでたく温泉に年を越さうとするのであつた、江島は一行五人の中眞前に東京を出た、今の二人は沼津泊、彼の環翠樓に落合ふのに、特に小田原見物のために一足後れたのであるから、麥酒の硝子盃を合はせる際、何ぞ珍らしい土産話をと思つて、

江島はこれから酒匂橋を渡つて、しばらく五十三次の圖にある道中、外郎屋なども見たれども、別にこれといふ土産もなかつた、

朝未だ疾いので、途中、松並木にも町盡にも、茶店も開いて居ず、たゞ、藤棚で名の高い竹屋の向ふの、電車の待合所に小休した時、其家の亭主が、城の傍の梅林の勝を説いたのだ、風情でも見て行かう、

勿論、早咲の答にも七日八日間があるといふのを承知で來た、入口が小さな鳥居で、楕圓形の一目瞭濶たる廣場、舊は馬場であつたさうな、右手は眞黑な森の梢に、白蛇が衣を脫いで、かけたやうな城の石垣、雪の色に苔蒸して、蒼空に暗く聳え、左手は遠くちらほらと松の丘、仙家の人の佇んだ趣である、彼方にてぞ函嶺の嶮ありと聞こえたれ、

取着が石段で、上ると一つ、曲つて又一つ、三つに畝つて高い、尙ほ其の上に祉がある、二ッ目の坂の中途に誂へたほどの芝生があつて、こゝに一脚の竹の床を据ゑてあつた、

江島は汗になつたから、上り、上り、扣鈕を外しかけた外套を先づ脫いで、向を更へて、腰をかける、と正面に遠霞、小田原の町は此の一帶の霞の內にあるであらう、彼方は長閑な蒼海原、時ならず麗である、

（中）

馬場は目の下に、恰も谷の底のやう、松の丘にかけ、城の山にかけ、段々に圓く二重三重に梅の林、一面の日向、枯草の上に影落さず、風あつて枝を渡らば、此處まで薰を誘つて來やう、特に南向なるは遠目にも幹がふつくりして午過には咲かうも知れぬ、菜種もありさうな景色であつた、下の段の傍なる小家の門口、女の姿、折から懷しの者やと見る內、此方に上ると見えて、段の折曲つた處で、其黑髮が一度隱れたが、やがて、目の前へ顏の玉の如きが顯はれた、

黑塗の盆に茶碗、折敷に干菓子を載せて据ゑ、片手に土瓶を提げて居た、十六か七、まだ八にはなるまい、窶れた扮裝で年紀に似ぬ束髮、無地の淺黃の半襟は媚かしいが寂しく見らるゝ、

ぱッちりした目に愛嬌はあるが、下膨の顏の品の好さ、江島は物語りに傳へたる眞間の手古那の俤を見る思がした、敢て此の容色を深山に見る不思議な感がなかつたのだけれども、これまで過ぎて來た、大晦

日の朝の町は、騒しい中にも寂寞なる趣が潜んで居るし、昨日の今日で、急に師走の押詰つた修羅場の如き都は避けたり、殊に此の馬場にかゝつてからは、樹の影も踏まず人らしい者にも出合なかつたために、何となく自から超然として塵外に在る如き折だつたから、

「これは憚り、」

「麁茶でございます、召しあがりまし、」と差置いて盆を客のあたりに密と寄せて、

「唯今お煙草盆を、」

「いや、早附木がある、」

と江島は袂を開いて底の方を探りながら、

　暖ぢやあるし、巻莨だから火鉢は澤山、大變だろう、一々、姉さん、可よ、持つて來ないでも、自分が坂を上るのに汗さへ覺えた程だから、足弱の勞、然こそと謂ふ思遣りで、

「彼方に店があつたのか、ぢや、其處へ休まして貰ふんだッけ、

「はい、否、店は出しては居りません、」

「ぢや尙の事恐れ入る、」と一禮して茶碗を取る、

「何ういたしまして、」と娘は勞はられたのを嬉しさうに打微笑み、

「此處へお遊びに居らしつたお方があつたら、お茶を差上げますやうに父が申つけて參りました、」

「はあ、お父樣、植木屋さんなの、」と物和に江島は梅林に對して斯う言つたが、餘り飲込み過ぎたと氣が着いて、

「何をして居らつしやるの、」と問ひ直した、

「お宮様のお守をして居ます、」
「あゝ、それでは今、坂の途中に社務所としてあつたッけ、姉さん彼處かい、」
「えゝ、」
「何うぞ能くお禮を言つて下さい、大層御雜作になりますッて、」
「父はあの此間から東京へ參りまして、內には居りませんのでございます、」
聞くと早斯る處に寂しからうとあはれになつた、
「それは〳〵、而して今お門を通つたッけ、戸が閉つて寂として居たが、小人數と見えるね、」
「はい、」
「母樣と、それから、」
「否、母は私の六の時なくなりましたのでございます、」
「ぢやお婆さん、」
「誰も居りません、」
「それでは男衆でも居なさるの、何、其の弟子然うさな、神官さんに弟子もをかしい、」と江島は笑つた、
娘は莞爾、
「何もそんな人は居ないんでございますよ、」
「姉さん一人かい、まさか、」
「驚きますね、」
と江島は四邊を眴した、城の森の凄いにつけても、

『婿さんを一人置いて、何うして東京へなんぞ行つたんです、』

（下）

『赤心の籠つて熱と見上げる顔を、娘は立つまゝ、やゝ頭を傾けて、見たばかり、何にも言はぬから、江島がまた、

『それでも梅の名所だといふから、些とは遊びにでも來る人があるのかい、お宮樣に參詣の人があるから、寂しくはないのかね、』

『否、父も其の事で東京へ願ひに參りましたのでございます、此お宮樣は、此國の藩主樣の御先祖を、お祭り申してあるのでございますけれども、お參りの人も少うございますし、また藩主樣の方も、間に人があつて、

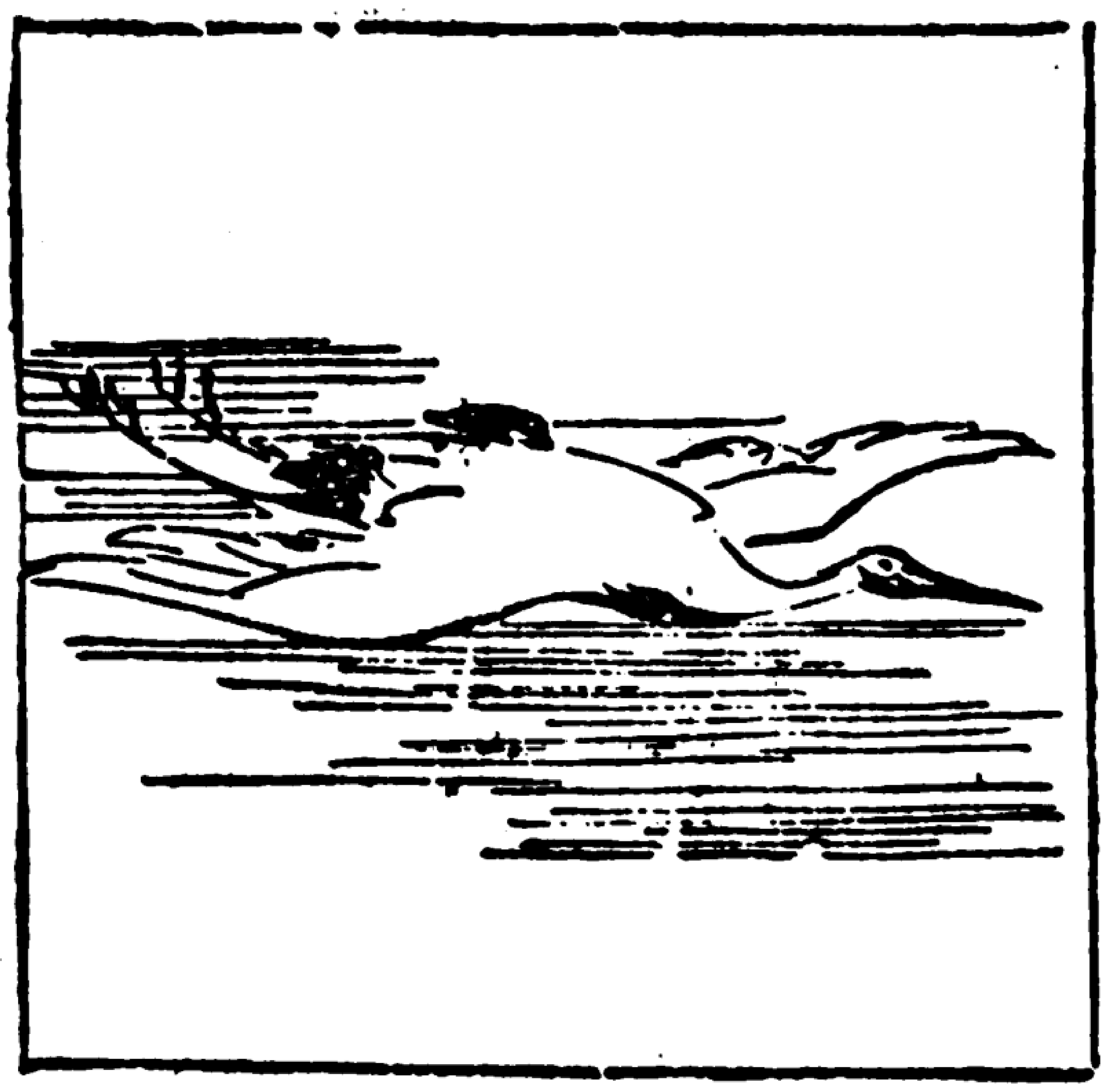


其が好いやうな事をするのですとかいひまして、當社までお手當が行屆きませんものですから、お堂も年々損じますのでございます、其に御覽なさいまし、あれ、」と指さすに從ふて、仰ぎ見る、御堂の棟の銅の屋根箕の形に岸破と破れて、引裂いた切口が霜柱のやうに剋々にむしられて居るのであつた、

「風ですか、酷いね、」

「貴客、盜賊でございます、」

「盜賊、」



「酷いことをするのでございますよ、最うあの、お堂は雨の漏りませぬばかりになつて居りますのに、其を、あゝやつて剝がしに參るのでございますもの、町の衆に申しましても、面倒ですから構つて下さいません、屋根ばかりではないのですよ、擬寶珠でも、釘隱でも、何でも、貴客、金で出來て居りますものは、毎晩來てむしり取りに參ります、修復をしたくも屆きませんものですから、東京の藩主樣へ度々願書を出しましたけれども、何とも沙汰はして下さいません、其ですから、例年は元日御年始だけに上りますのを、其のお願に年の內に參りましたのでございます、」

「留主は婦さん一人きり、」

「春は七草頃歸ると申して出掛けました、」

「困つたね、」父上樣の留主に其の屋根盜賊が來ないとも限るまい、

『昨夜も遲く參りました、』
江島は思はず
『そりや大變、こんな處にたつた一人で、夜中に盜賊が來て、ごそ〳〵遣るのを聞いて居て、能くまあ今朝まで活きて居た、嘸恐かつたらう、』と又面をみまもつたが、別に蒼ざめても居ず、花やかではないが、沈んでうつとりと美しい、
娘は伏目に、
『はい、恐うございますけれど、何うもしはいたしません、目をぱち〳〵して居りますと、何時でも、然ういふ時は、あの、鶴の姿が見えますのでございます、心細い時でも、寂しい時でも、其が便りで何も彼も忘れますの、其の鶴は貴客、此のお宮樣のおつかはしめでございますつて、夢にばかり見えるのではございません、時々壇の下の石の手水鉢へ遊びに來ますよ、』『手水鉢へ、鶴がと』いつて江島は腰をずらして瞰下した、要こそあれ、石壇を上らうとした坂の下に、注連を張つて石の手水鉢、凡そ疊二疊ばかり切立の四角な、其角々の圓いのに、何の飾もなく、唯うつろに水を湛へた、然も、何となく神寂びた奇品があつて傍に建札して、壽千歲三鉢と誌したのがあつた、
『彼かい、姉さん、』
『はい、舊はお城のお庭にございました、其の時分から一羽の鶴が時々來ては、羽を洗ひましたと申します、此處へ御先祖を祭ります時分には、八重葎の中に埋れて居りましたのを、堀出して移しましたさうですが、重くつて〳〵、上まで持つて上られませんので、彼處に据ゑましたと申しますよ、繪に描きましたのでも美しい優い姿でございますけれども、其は、どんなに美しく優しうございませう、私は親とも姉と

も、友達とも、力になる人とも思ひますから、斯うして一人で居りますのでございます、他へ參りますと最う逢はれますまいと思ひますもの、」

江島は聞いて餘りの事に、

「其でも御亭主が出來たら、何うしますの、」

敢て顏の色も動かさず、娘は默つて差俯向いたが、

「でも、あの、あんな優い好い者はなからうと思ひます、皆酷い人ばかり、神樣の屋根を盜むさへありますもの、」

「否、此處に我、と思つたが、丹頂の鶴に比すべくはあらぬ身と、江島は何も言はなかつた、しばらく娘の狀を見て、

「姉さんは其の鶴のやうだよ、」とつく／＼いつて、江島は不圖汚はしい世辭を言つたやうに思取つて、我ながら耻て首を垂れた。

手持不沙汰で土瓶を傾むけると、暖さに渴いたと見えて、雫もない、

「注して參りませう、」　「否、澤山、」

「可うございますよ、鐵瓶を掛て來ましたから、今度は熱いのを、」といつて、其まゝ取つて後姿になつた、娘はいそ／＼壇を下る、

肩附、襟脚、黑髮の艶に、耳元の淸らかさ、江島は何となく竦然として、娘が門を入つた時、身を正うして立つた。

途端に鳥の影、はら／＼と翼白く、千歲三鉢に鶴が下りた、而して、生類の內に、最も氣高い、優美な態度ですらりと步行いた。

桃のうた

醫學博士　弘田　長

籠おひて木かげに語る村少女、をとめが髪にもゝの花ちる。

竹村に桃さきまじる岸づたひ、渡し待つらしもやの中の人。

主人去りて閉ぢしまゝなる賤が屋の、草深き庭に桃の花ちる。

あぢきなき世とも思はで桃の花、我世たのしみ實をむすぶらむ。

去年の春せとにうつしゝ姫桃の、今年の花を老翁は見ずして。

うらみ顔

岡田　八千代

麥の穂なみのより〳〵に

忘れし人を思ひ出づれば
あせに散りたる菜の花は
見る世過ぎぬと恨み顔

折にふれて

中山　幸子

愛國婦人會首唱者奥村女史が、病勢革まりたるに際し、正七位に叙せられたるをきゝて

國を思ふ心のまことあらはれて
くらゐの山にのぼる君かな

庵梅

梅の花さかりのいほのかぐはしく
おくゆかしくもすめる人かな

梅のさかり

玉しきのみやこも鄙も梅さきて
げにかぐはしき時は來にけり

野の梅

見るが中にかすみ渡れり武藏野の
梅はかをりてのどけかりけり

田家梅

梅の花咲きても小田のひとつ家は
うぐひすならで訪ふ人もなし

路傍の梅

一枝をたまはれかしようつくしく
咲きつる梅を家づとにせむ

春たちていづれの梅も咲みちて
ゆき來の人の袖ぞかをれる

山家梅

うぐひすの聲をしるべに來て見れば
谷間のうめはいまさかりなり

梅さけど人は訪ひ來ず山里は
たゞうぐひすを友とこそすれ

山のはの月はかすみて梅の花
ふき來る風に匂ひこそすれ

山家の詩人

伊藤落葉

やぶうぐひすの折々に
訪來るほかは友もなき
片山かげのはなつばき
こゝろの色は深けれど
都門の客に知己もなき
山家詩人に似たるかな

選歌の光榮を賜はりける折に

名取正代子

うらやみし松のさかえのおほけなく
身にそはむとは思ひかけきや

かしこくも聞えわげゝり山賤が
はひりの庭の松かぜのこゑ



電車の話

理學博士　田中正平

二十世紀的交通機關

輓近世界各國とも、鐵道運輸の盛な處に於ては、列車の速度と云ふ事には、餘程人が着目し、隨て斯道の專門家も大に此事に注意を傾けると云ふ機運に至つた、此等は斯くあるべき筈であつて、十九世紀の文明には交通の開けたことが、一方の主な原因となつて居ると云つても宜い位であつて、二十世紀に移れば尚更文明と交通との關係が親密になつてくるに相違ない、即ち二十世紀は二十世紀相當に、滊車の速度を出さねばならぬといふ觀念が起るであらう歐米諸國に於て、目今列車の速度を高めるといふことに就て、實に高尚な名譽ある競爭を遣つて居る、偖高速度を出すに必要な裝置は何であるかといふに、之は無論一二で足るものでなく、鐵道業の全部が關係して居ると云つても宜しい、併ながら其中で眞先に其衝に當るものは原動力を供給する彼の機關車であらう、是迄の所では主として蒸氣力を藉りて列車を動かすことになつて居るが、其機關車の製作は近年著しく進歩して、只今では其巧妙の程度が實に人智の及ぶ極度に達して居ると云うて宜いかと思はれる、併ながら最近に至つて、新動力が出て參りまして、大に此蒸氣力を抑へんとする狀況に立至つた、それは外でもない、電氣力であつて、吾邦でも只今各所に電氣鐵道と云ふものが盛に行はれて、公衆が大に便利を得る樣になつたのである、其電氣鐵

道が如何に完全に、如何に無雑作に、或種の運轉に與へて成功して居るかと云ふことは、改めて云ふ迄もないことであるが。是は吾邦のみでなく、各國に於ても、近距離運輸に、限られて居るやうである、此近距離運轉に對して電車の汽車に勝る萬々たる事は誰も首肯すると云ふに就て、電氣側の經營家は之に滿足せず、進んで遠距離の運輸事業にも、電氣を利用せんとして、日夜研究を怠らないが、其結果此方面でも著しい進歩をなすに至つた、

汽車と電車の利害

元來蒸氣機關車を用ゐて列車を運轉するに、不便若くは困難の點が澤山あつて、當事者は夫々苦心を致して居るに拘はらず、今日に至つても、未だ十分



之を除くことが出來ない、是等の缺點は電氣を用ゐれば、總て補はると申しても宜い位であつて、凡そ運搬用の原動力として、電氣程理想に近い者はあるまい、今其理由とするところを列擧すれば、先づ蒸氣鐵道に於いては、機關車の構造上列車の速度を或る程度以上に高めるといふ事が非常に困難になるが、電氣を用ゐれば任意の高速度を出す事が出來る、次に電車は煙を出さなければ、又火粉をも吐出さない煙を止めるとか、火の粉を止めるとか云ふ事は、非常に困難である、また列車の速度を進め、又は其重量を増加せんとして、強大な機關車を用ゐんとするには、勢ひレールの負擔力を増す必

要が起る、レールの負擔力と申しても、レールに限る譯ではない、道床や、枕木や、橋梁等の耐重力も皆含まれて居る、此レールの負擔力を增すには、經濟上大なる犠牲を要して、電氣を用ゐる曉には此負擔力を增さずに牽引力を進める餘地が大に出來てくる、次に電氣牽引としますれば、小列車を頻繁に運轉せしむることが出來、蒸氣機關車であれば、列車が一度高地點に登つて後、二百分の一より急な下り勾配にかゝるとき、其持つて居る位置のエナルギーは、制動機を以て滅却して仕舞ふ、ところが電氣を用うれば、其一部分歐洲最近の經驗に依れば、其の四割乃至五割は恢復せらるといふことである、次に機關車運轉中の故障が大に減ずると同時に、運轉手の勞力と負傷等に對する危險とが著しく減少する、是等は皆電氣牽引の直接の利益として算へられなければならぬ、夫から電氣使用の間接利益も中々尠くない、先づ信號機、其他保安裝置の操縦、給水、工作機械運轉等に有効な動力を供給すると同時に、常設信號燈及停車場内の點火、機關車前頭の信號燈及列車内の點燈等を完全にする等は其著しいものである、右に述べた諸點は皆鐵道に從事して居るもの丶每日苦んで居る問題であつて、動力を電氣に變更すれば、一刀兩斷、立所に解決が出來る、兎に角電氣は實に重寶なものと云ふ外はない、

夫では總てを電氣運轉に變更すればよいかといふに、是は又一ッ特殊の問題で、特に經濟上の考量を要するものであらう、元來電氣運轉は經濟上概して運轉の甚頻繁な鐵道にのみ適するものである、其譯は電流を遠距離に傳送する爲に、力を夥しく浪費するにより、列車數の稍少い線路では、經費倒れとなる虞がある、尤も沿道に利用の出來る水力があるとか、勾配線の運轉上特種の利益を期するとかは、自ら別問題である、併し經費に關せず、最も迅速に列車を運轉すると云ふのには、前述の如く電氣運轉の外はあるまい、

大都會と電車

十年計り前に倫敦に行つた人々は、彼の地下鐵道で、隧道中に充滿して居る煙や惡氣で困つたでありうが、今日では皆電氣運轉に變更せられて居るからして、愉快な旅が出來ると云ふことである、是は電氣鐵道の最も適切な例であつて、動力變更の當時は夥しく興業費に喰込んださうであるが、今では却て經費節減となつて居るさうである、近來は又幹線鐵道の運轉に、電氣機關車を用うる鐵道が、歐米各國を通じて段々と殖えて來た、先づ最近の例をいへば紐育セントラルハドソン河鐵道會社に於て、五十哩の區間に通常列車牽引用に使つて居る電氣機關車は八十五噸十二輪コンソリデーション形になつて、各五百五十馬力のモートル四個を備へて居るので、總て二千二百馬力を出す事が出來る、此力は實に素晴らしいもので、平坦線に於て、四百五十噸の列車を後に付けて、一時間五十八哩以上の速力を出す、目下此種の機關車十數臺を使用して居つて、何れも好成績であるといふことである、又歐羅巴に於て、強大な電氣機關車を用ゐて居る例は、伊太利の北部にあるバルテリナ鐵道である、此鐵道は山間鐵道であるに依つて、隨分ひどい勾配や曲線やらが澤山あるそこで之に應ずる爲の機關車は、可なり強大なもので、總重量六十二噸の十輪モーガル形で、以て各四百馬力の三相交番電流式モートル二個を備へて、動力は合計八百馬力であるが、必要に應じ二倍の力を出すことが出來る、此機關車の三個働軸各々が、レールを壓して居る力は十四噸で、吾邦の建設規定の許す範圍外に出てゝは居ない、併し其牽引力は太したもので、百分の一の勾配の澤山ある線路で、凡そ二百七十噸の列車を曳いて、優に三十八哩の速力を出し得るといふのである、そこで如何に此電氣機關車が強いかと云ふ點を試す爲に、同會社新調の同じく摩擦重量四十二噸のモーガル式蒸氣機關車と、比較運轉を遣つて見た所が、同じ狀況の下に、此機關車の牽引し得る車數は、前陳の電氣機關車のそれより、約三割程少かつた、其上に此蒸氣機關車の自重

が六十六噸、炭水車が二十九噸で、總重量が九十五噸となるので、機關車の自重一噸に對し、電氣の方が凡そ二倍の列車重量を牽引し得ると云ふ驚くべき結果を示した、

一時間に百二十八哩の速度

前述は、一二の例に過ぎないが、目下各所に動力變更が行はれつゝあつて、列車運轉の動力として電氣の聲望が昇つて來ると同時に、之に對する希望も騰つて參る道理で、其希望の主なるものは、即ち電力を藉りて列車の速度を增進することで、是は技術上頗る興味ある問題であつて、各國斯道專門の士は、深遠な研究を遂たのであるが、卓上の成案は如何に立派に樹つて居つても、之を實際に試して見ぬ內は、安心ならぬと云ふ所から、今より七八年前伯林に於きまして高速電車研究會といふ大規模の會合が、獨逸有數の實業家連によつて組織せられ、獨逸皇帝の贊同を得て、熱心に此邊の調査研究に從事することになつて居る、して此會の目的とする所は電力を用ゐて列車を運轉せしむるとせば、實際どの位の速度に達せしめ得るかを確め、且此目的を達する技術的の條件は如何であるかを確定するのであつた、獨逸政府は伯林市附近マリーンフエルデ、ツオツセン間軍用鐵道の中で、略平坦線で、そして二百鎖の曲線が二箇所しか無くて試運轉には屈竟の線區十四哩餘を研究會に貸すことにして、會は各方面に最も綿密な審議を凝した末、シーメンス會社とアルゲマイネ電氣會社に依賴して、試驗車各一臺を作らせた、此車はモートル付の四十八人乘客車であつて前後の十二輪ボギー臺には、各七百五十馬力の三相交番電流式モートルが二個づゝ附着して居つた、即ち僅か一輛の車に、三千馬力の力を供へて、タツタ四十八人の客を引ッ張らうといふ非常に贅澤な設備であつた、電壓は一萬三千ボルト、週期は一分四十五囘であつた、電氣裝置量が四十噸、全車の重量が九十三噸であつた、明治三十四年中に、右の車が出來上つたに就て、試運轉を遣つて見ましたとき、初の

程は甚だ好結果であつたが、速度が段々增して來て一時間八十四哩になると、車體が甚しく橫に動搖し初めた、此震動は電氣裝置とか、車輛の構造の缺點より起因するのではなく、全く此線區に使つてあつた六十六封度のレールが脆弱に過る所から起るのであることが判つた、そこで此レールを取り外して、其更に八十四封度レールを敷設するとに取極めて、翌々年即ち明治三十六年再び試驗を開始したが、今度は大成功であつて、一時間百二十八哩の大速度を以て、安全に運轉することを得た、此とき電車の使用した力は千九百四十馬力であつたので、動力の餘裕がまだあつたから、試驗線路が十分に長ければ、右以上の速度を出すとも出來たらうと思はれる、何に致せ一時間百二十八哩とは怖しい速度で、新橋橫濱間を八分時で飛行するといふ割合である、此試驗は大に各國斯界の注目を惹きましたのであるが、其の結果の著しいものといへば、在來の運轉裝備に大なる變更を加へないで、高速度の運轉をなし得ることを證明した一事であるが、中にも高速度より起る大氣の抵抗が、意外に大きいと云ふことが判つたので、將來高速度のとき用ゐる車輛の前頭を斜面に致して、恰も水雷艇が其尖頭で水を割つて行く樣に、大氣を兩側に排しつゝ進ませる樣にせねばならんと云ふことが認められた、

昆虫の話

深井龍蝿

蝶類　鱗翅目

とまれ胡蝶よさく花に
眠れしづかにいつまでも　桂月

蝶と花は眞に自然界の双美であります、若し自然界から此の兩者を奪ひ去つたならば、人生は極めて寂寞となるでありませう、蝶は粉蝶、蛺蝶、鳳子、鳳蝶、採花子、花賊、吸露、好花翁、などの異名があります、種類は隨分多いのでして、世界には六千

餘種も居ります、本邦産のみでしても、近時二百二十種ばかり居ります、世界廣しと雖も、日本位比較的昆虫に富んだ國はないので、永年横濱に住んでゐて、蝶蛾禽鳥を研究した、故プライヤー氏などは、『日本は胡蝶の劇場なり』とまで云はれた位です、蝶類は東坡の詩に双眉捲鐵絲、兩翅暈金碧。とあります通り、翅の表面は實に奇麗でありまするが、裏面は寧ろ汚れてゐます、之は自然淘汰と申しまして、生存上の利益になるからです、すべて蝶は飛ぶ時は美しくありますが、靜止と翅を合せて體の上に立てますから、一寸眼につきませぬ、それですから敵に襲はれることが少くないのである、『双眉』と申すは、觸角の事でせう、蝶の觸角は、先端が太いので、學語に棍棒狀と申す、故にラテン語では蝶の事を球桿角と申すのであります、口部は花の蜜を吸ふ爲め、一つの圓い管になつて居り、常には之を卷きまして、時計のゼンマイ狀にして居ます、以上は大體蝶の說明をしたのでありますが、之れ位ではなか〱學問的に蛾類と區別することはできないのです、けれども先づ〱此の位覺えて居れば、蝶と蛾の區別も一寸できます、で詩歌を咏まるゝにも、大きな誤もせないでせう、次に蝶と蛾の區別を表として表示します、

	觸角	翅の表面	習性
蝶類	棍棒狀	多くは美	晝間飛び靜止する時翅を合す
蛾類	棍棒狀以外の諸狀	多くは美ならず	夜間多く飛び靜止の時翅を合せず

蝶は種類が多いのですから、皆同じとは申されませんが、完全變態をすることは、皆同じでありますまた卵から生れました幼虫が、草や木の葉を食ふと云ふ事も同じです、菜畑に參りますと、大抵何時でもあまり大きくない靑虫が居ります、その虫は頻と菜の葉を食べて居りますが、あれはモンシロテフの幼虫なのであります、すべて蝶は花から花へと飛び廻りまして、花の媒介者となりますが、其の仔虫は親が花に益をしたと云ふのでか、自身は遠慮もなく

葉を食ふのであります、こんな主義も人類社會にもないでもないのですが、實に好ましくないのです、

青虫は老熟と此度は蛹となるのは、皆能く知つて居る通りです、此の蛹の或物は場所によりますと『御菊虫』と呼ばれて、本田玄蕃の下女のお菊と云ふのが主人に切り殺されて、遂に虫に化したなどと云ふ妄説を信じて居ますが、それは信ずるに足らぬ説であります、けれどもアゲハテフの蛹などは、全く女の髪が散亂して、後手に縛された樣な形狀ですから昔時斯くの如き説の出たのは仕方ない次第であります、此の蛹も一定の時期が來ますと、化して蝶となるのであります、

家蠅　双翅目

滿室の蒼蠅拂へども去らず、五月蠅と書いてウルサイと訓しますのは尤です、一概に家蠅と申しましても、それは種類がありまするが、茲に家蠅と申すは、學名をムスカ、ドメスチカ。と云ひまして、體長二分五厘許、灰黑色の種で、胸は殆ど四角で背面に四つの黑き條があります、全體に硬毛が粗生して居まして、脚は長く腹の兩側は褐色で、中央は黑色最も普通な種であります、蠅は人間の食物を舐食しますから、隨分傳染病などの媒介を致す獨逸の醫學者は、蠅はコレラ、ペスト、結核などの媒介をすると申して居ります位ですから、注意して殺さねばなりません、田舍の農家などでは、隨分蠅が多く居ります、また戰爭當時滿洲などでは、此の蠅には大層困つたさうでした、

家蠅の一匹は凡そ百二三十の卵を廐や厠の不潔物へ產むのでありますが、卵は夏は一日位で孵化しまして、頭も脚もない蛆となります、蛆も一週間位で俵狀の蛹になり、また一週間も過ぎると、蠅となつて飛び廻るのであります、

蠅はかく衞生上の害虫でありますから、勉めて驅除せねばならぬ、先頃佛國マタン新聞社で六千圓の懸賞で、蠅取法を募集しましたら、其の應募者は無慮二百餘人で、ルーマニア國女王エリサベス陛下み

御加りであつたそうでした、當撰者の論文の意は、『一葉の時に摘み去らねば、遂に斧を用ふるに至る故に蠅も卵時代に驅除せねばならぬ、一匹の蠅は平均二百の卵を生む、此の卵が六代を經ると驚くべし六億の子孫を生ずる事となるから、蛆及び蠅の居る處へは、石油をスプレーを以て撒布するのが、最も良法である、かくすると蛆は死し蠅も集らぬ、また其の後は、蠅も其處へは産卵せぬ』と云ふのでした先づ〳〵蠅の發生せぬ爲には、不潔物を除去するのが第一です、清潔はすべての害に對する唯一の法であります、

米國などでは夜間蠅が天井へ靜止のを、除虫菊粉を撒布器でふりかけ、其の儘として翌朝死體を集めて棄てると云方法が、一般に行はれて居る、また蠅取網と云つて、香氣のある網で蠅が香氣に誘はれて網に止まると、體が粘著して仕舞ふ、之もよい方法である、我國にも各種の蠅殺し器があります、

◎正誤　前號鰹節虫の初行にて紙にて鶴や鴛鴦云々としましたのは鳥の爪や魚の鱗と正誤致します、

健氣なる妻と子

本所區三笠町六番地の長家は、いづれも其日生活の者のみなるが中にも、上田おたけ(五十一)といへるは、内縁の夫に鈴木寅二郎(五十二)との間に國太郎(十三)金二郎(十二)伊之助(八ツ)の三人の子を有ち、昨年夏頃までは三人共に同所の特殊學校なる三笠尋常小學校に通學せしめ、苦しき生計を營み居たるが、元來寅二郎は甚しき大酒家にて、殆ど勞働し得たる賃銀は飲み盡して妻子に縋られて僅かに糊口を繼ぎゐたる程なりしが遂に昨年五月中より酒因にて半身不隨となりたれば、一家は餓に泣く悲境に陷りたり、斯る中にも妻のおたけは、甲斐々々しくも他人の洗濯使歩きと、一生懸命に働くも、女腕にては一日十錢か精々なるより、國太郎金二郎の兩人も見兼れて、學校を休學し、北二葉町なる某洋傘工場に勤め、漸く母子合せて一日卅錢を得るやうになれるも、何分親子五人の飯米のみにても、一日廿五錢を要し、其他副食物の代として、五錢都合卅錢は之にて悉く費せば、更に其以上に二圓廿五錢の家賃と、夫の藥代などは如何ともせん方なき有樣なりしが、幸ひおたけが前に一度緣付し事ありて、お光(廿一)お靜(十九)の二女を擧げたりしが、二女共當時下女奉公をなし居れば、兩人に賴みて、毎月二三圓位の補助を得て、漸く其日を支へ行うち、近來夫の病氣も稍快方に向ひたれば、たけは毎日用事を手早く濟せて、兩國邊の某藥店に行き、瓶洗ひをなして、一日十三錢位の勞銀を得つゝ有と、斯る社會に此事ある憐むべく又感ずべきにあらずや、

訪外日記（三）

愛氷散士

日課中一日一人に面談する機會を逸せぬといふこと、これを一年同じからざる人のみとすることであるから、段々世間が狹くなつてくるやうであるが、その實世間を廣くせん爲の背水の陣で、先づその四分の一だけは無事に通過した、

第三月

明治四十年一月十六日より、同年二月十五日までの日誌中より抄錄したるものである、この間に訪問したる邸宅百二十餘、例に依つて、其所感を記さう

和歌の秀逸

◎その一日　午前九時　和歌の名家子爵入江爲守君を訪ひ、談和歌の事に及んだ、君は曰く、

近來歌を詠む人が、一向時と場所といふことを構はぬやうになつたが、謹嚴なる場所で俳諧歌の如きものを詠んだり、極めて風流なるべき場所で、頗る眞面目なものを作つたり、要するに出放題なのが多い、又趣向が宜ければよい、調はどうでもよいと云ふやうな傾もあるが、歌には調が第一で、調が何うでもよいといふ事になれば、テニハも何もあつたものではない、それから趣向といふのも、一時の場當りに過ぎないものを以て上乘とし、その時を過ぐれば再び口にしようといふ氣も出ないやうなものが多い、歌は自然を調よく歌ひたるものに、態とならぬいひ知らぬ妙處のあるのがよいのである、それは兎角平凡になり易くて、なか〳〵むつかしいのである

實に君の言の如くで、たゞ口あたりが珍らしいのがよいのであれば、まことに排字の自由な都々逸などゝ云ふものもある、その都々逸位の程度のならばまだしもであるが、近頃二三の人を除くの外、新派と稱する歌人の作は、まるで謎をかけるやうなもので、作つた其人さへそれが解けぬところに妙味があるとのことである、實に世は進んだものである、

以心傳心

◎その二日　午後六時聾唖技藝會長靑山泰石君を訪問した、君は聾唖敎育に二十餘年の經歷を積まれた人で、聾唖の前に立つては、如何なる山の奧より出たる人に對しても、不自由なく意思を通ずることが出來る、君は之を一種の無線電信と云うて居る、すべて君が聾唖に對する經歷談は、あはれにも趣味がある、

技藝を聾唖に敎へるには、聾唖の性質をして、新意匠には乏しいが、摸寫、摸刻、摸造、何によらず摸倣することは上手である、それは盲人は耳が發達して居る如く、聾唖は頗る目のよく利くものであるそこで競爭のないもので、この不自由の人々に適する技藝を授け、社會より厄介視せられたるものを、生產的に業を授くるのみならず、而も大に有用の人たらしめたいと思うて、博物館通ひをして、佛國のインレートを研究した、インレートは近時白川洸石氏の工夫によりて、悉く機械な用ひて造ることになつたが、自分のは小刀の先にて、木を象眼し木地も象眼も木理一致で、木材も悉く日本の雜木のみを用ひることにした、これならば手數を美術的に掛けた所に價値があるので、中々緻密な仕事であるから、誰も競爭するものはない、この面倒なる仕事を聾唖に授くるのは誠に不自由なやうであるが、多年聾唖に對して居るから、所謂目顏で、萬事を指圖することが出來る、故に口の利ける人には通辯が入るが、聾唖に對しては、何れの國の人とでも意志を語り合ふことが出來る、

男女の交際

◎その三日　午前八時津輕英麿君を本所の邸に訪ふた、見晴し廣き邸内の池には、折から薄く張られた氷の上を、數百の雁鴨心おく所なく游べるさま、いとめた丶氣である、談は男女交際のことより流行の結婚談に及んだ、君は曰く、

私は男女の交際は大に必要であらうと思ふ、併し今の社會で唯男女を隨意に交際をさせることは出來

ぬ、男女交際の本家本元でも、無闇に男女の交際はして居らぬ、夫々階級もあり、その範圍で相當の監督もある所でなければならぬ、男女を表面如何なる場合にも交際させぬといふことになると、それが惡い事となつて、隱れて交際をするやうになり、遂には新聞の三面を賑はすことになる、男女兩性互ひに相珍らしがるのが間違の種を蒔く始まりで、それが極端に相狎れるやうになるのである、これは監督者の前に相親むやうに交際の道を開いて、互に知見を廣くするやうにしたい、隨つてそれが結婚の上にも利益して、終生の悔を見るやうなことが少くなるであらうと思ふ、

物の矛盾

◎その四日　午後六時、マスターオブアーツ、ゼームスゴットー君を訪ふ、君は十年以前某中學での同僚で、現時中央大學、東京師範に教鞭を執られて居る、八九年音信を絶ちたるが、圖らず君の門前に久濶を敘した次第である、君は教師といふ天職にも飽きたので、何かして見たいといふやうな事から、社會談がはじまつた、

亞米利加では、男女の交際が自由であるが、歐羅巴ではさうは行かぬ、例を擧ぐれば、買物か何かの出先で、宿の娘にでも逢うて、これから歸るのなら御一しよに何うですかと云ふやうなことを言ふと、頗る迷惑さうにして居る、それが米國であれば、ではお件申しませうといふやうな有樣である、然るに物の矛盾といふは、宿に居る時なぞは、宿の娘が話しに來ても、ちやんとドアを〆めて、一時間でも二時間でも話して行く、別に知つた人であるからと云ふので、左まで他も疑はぬ、然るに米國では、婦人と同席する時は、必ずドアが開けてある、それは座敷と、一室しかない家との區別はない、故に一室しかない家に婦人を訪問すると、冬ならば風の吹き込むに任せねばならぬ始末である、

海事思想の普及

◎その五日　午前九時男爵有地品之允君を訪ふ、折

ふし君は風邪の襲ふ所となつて居られたが、病室にて會見を許された、君の家庭敎育談に曰く

婦人に對して、希望するのは、海事思想の普及に助勢して貰ひたいことである、それは婦人が所々を飛び歩いて遊說して貰ふのではない、子供を膝の上から、海事思想を持つやうに敎育して貰ひたいのである、或人が某敎育家に向つて、私の子供も三歲になつたから、今から敎育を始めやうと思ふが、と云つた、すると敎育家は、それは惜しいことをした、三年ばかり敎育が後れた、と云つたさうである、學校へ出す時に始めて敎育するといふ不量見では困る、母の胎內にある時から、その子供に對する考を疎にせぬやうにし、海事思想の養成も、この時からそろ〳〵初めて貰ひたい、獨逸は誰も知る如く海の少い國であるが、『吾人の將來は海に在り』といはれ、先頃威仁親王殿下より和歌を頂戴したが、

　外國におくれなとりそ今よりは、
　　大うなばらぞあらそひの場に

といふ御詠であつた、故に婦人がたは、その子供に學校敎育以前、成らは胎內よりといふ位の覺悟で、海事思想を養成して貰ひたいものである、

　政府の平民風

◎その六日午前八時愛國婦人會に手島益雄君を訪問した、折ふし同機關雜誌を編輯中であつたが、その雜誌に和歌俳句を募集し、その用紙を繪葉書としそれを天覽の人に贈ることにして居る、即ち使用濟の繪葉書を一の原稿と見なして、第四種郵便物として送附して居る、その事について語つて曰く、

東京郵便局では、初めこれを第四種郵便物として取扱うてくれぬ、そこで、通信用でないからと、さん〳〵談判の結果、郵便料金使用濟の葉書は、郵便葉書の原形を具ふるにより、單純なる書畫と異なるを以て一度は不認可としたるが、今後は特に第四種郵便物として取扱ふといふ、書面が來て、遂に注文通りとなつた、

予はその繪葉書の使用濟のものが、第一種郵便物

であるか、或は手島君の主張の如き第四種郵便物と見るべきかは別問題として、政府がつむじをまげずその事實を事實として、區々たる規則に拘泥せず、今後は特になどいふ背面を出すやうになつたのは、大に文明の度の進んだものとして甚だ喜ばしいことである、

小兒の趣味

◎その七日　午前八時東京地方裁判所第四部長石井豐七郎君を訪ふ、談兒童の遊戯に及び、君は曰く子供位電車に趣味を感じて居るものはない、宅の三歳になる小供などは、紙さへやればすぐに電車、一々口上つきで、『デンシャ〱コレハマドデス、クルマ〱アガリロ、コレハ前の車掌、コレハウシロの車掌、コレハ前の綱デース』など云ひ〱盛んに電車を畫く、月耕の所などへ連れて往つて、月耕が『ぼつちやん、何か書いて上げませうか』といふと聲に應じてすぐ電車、電車でなければ承知が出來ぬ、そこで電車は東電も、街鐵も、京濱も、外濠のも、皆形の變つた特殊の箇所を知つて居つて、注文が仲々面倒である、月耕畫伯もこんなのに逢うては閉口せざるを得なからう、

そこで予は令息千尋君の筆跡を五六枚乞得たが、三歳の小兒の筆であるから、ちよつと見ては想像が附かぬのがあるが、一々説明をきくと、なか〱その構想は素晴しいものである、殊に前の車掌などと云ふ所は運轉手といふより、働きがある、故に子供を教育するには、まづ其趣味を養ひ、知らず識らずの間に、其知識を發達せしむるやうにしたいものである、

職業と人格

◎その八日　午前十一時頃麹町の大通りを歸りかゝると、ある店頭で五十四五の主人らしいのが鉢植の梅の枝垂れたのを鋏切つて居る、それが滿開でゞもあれば兎に角に、まだ八分は蕾であるから、何うもそれを知らぬ顏をして通ることが出來ぬ、見ればまだ蕾の多い枝をどうしてさう惜氣もなく切るのです

か、と尋ねた、するとその人は、もう飽きましたと云ふので、珍らしく鉢に枝垂れた花を飽いたといふは、いよ〳〵聞捨にならぬ、そこで未だこの梅はこれからが見頃であるに、どうしてそう早く飽いたのであるかと笑ふた、すると相手はまだ貴君は梅を造ることを御存じがないと見える、と前置をしながら

この枝垂梅は、この枝の垂れる工合さへ見れば充分で、この古木は鉢まで三尺五寸あるが、垂れる枝が、三尺以上でも、二尺五寸以下でも面白くない、三尺位で太くなく細くなく、よい加減に數多く枝垂るやうにしたい、さうするには見飽いた蕾に執着して居るやうなことでは、來年よい枝を見ることは出來ぬ、そも〳〵芽を萠出してから、青々と枝を垂るゝところに、日々得も云れぬ樂がある、枝が目的通り垂れたら、蕾の附くのは景物のやうなもので、そのうへ花の一輪でも見れば、あまり花のきたなくならないうちに、切つて來年の花を樂む方がよい、

聞いて見れば道理の話、思はず知らずそこに腰を掛けて、話込んで居ると、何處かの下女らしいのがこの下駄に齒を入れてくれと云ふ注文、梅に心を奪はれて居つたが、さては齒入屋であるかと始めて氣が付いた、さるにてもその齒入屋の主人、にこやかに福々しく、顔には確に名利の外に超然たる相が書かれて居る、その梅に就ても、定めて一場の物語があらうと、その梅の由來を問うた、齒入屋君曰く、

この梅は九年前の愛宕の年の市で買つたので、七圓と苔香園の主人が値をつけた外、誰も手を出さうといふものもなかつた、それを私が九圓で買つた、齒入屋が九圓で植木を買ふといふことは、お察し下さい容易なことではない、それでも丹精して斯うなると、昨年蕾の附いた時には、或西洋人から百圓で賣つてくれぬかといはれたされどこの鉢植は自分が樂まうと思つて買つたのであるから、賣つて仕舞へば買ふた目的は無になる、金にしたらば百圓が何時迄あるものでもない、斯うして世話して置けば、私が石になる時は、この梅の幹も石になる、今年は斯うしくて坊主にして仕舞ふたから、御縁があれば來年は見て下さい、

斯ういふ話を聞いて居ると、壽命が伸びるやうに思ふ、つい〳〵三時間ばかり邪魔をしたが、相手も今日ほど話を聞いて貰うてせい〳〵したことはないと喜んだ、もしこの風流齒入屋を訪問したき人があらば、麹町區八丁目七番地吉田末吉君といふのがそれである、

裁縫よりは洗張

◎その九日　午後二時築地なる女子高等尋常小學校長杉沛守約君を訪問して、君の實驗談を叩いた、君は曰く、

東京で男子のみの小學校は僅に一校で、女子のみのも三校を數ふるに過ぎない、私は十九年以來小學校の教師をして居るが、小供の事故、男女のも、男女各專門のもさう變りはない、併し男女を別けると訓練はし易い、男女合併すると男生徒につれて女生徒は活潑になる、惡くいへば、お轉婆になる、お轉婆はよくないが、精神が活潑でないのは女子を教育する一難事で、學校で物を質問しても碌々口もきけないが、自宅へかへればなか〳〵口達者で、友達同士の話などを立聞きすると、まるで大人の云ふやうなことを云うて居る、教師は尋常科は女がよく、高等科になると男の方がよいやうである、女教師は學校全體といふより、我教へて居る級のみを贔負にして他の級の生徒とでも、言爭ひがあれば、必ず我受持の生徒を庇ふといふ傾がある、であるから尋常一二年位のが教場で麁相をすることがあつても、男教師であれば騷ぎばかり大きくするが、女教師は物靜かに始末をして仕舞ふ、それから女生徒のみの小學校は、卒業するまで生徒の居るのが多い、であるから卒業する迄に少しでも家庭の手助けになるやうにしたいと思うて、裁縫を教へるといふより、洗濯洗張を教へるといふやうにして居る、

君の意見は中々面白い、殊に杓子定規になり易い小學校の校長として、洗濯洗張にまで注意を拂はるゝは、實に有がたい心掛である、

敬すべき人格

◎その十日　午後三時文學士子爵土屋正直君を訪問した、令夫人は予の最も欽仰せる徳川伯爵の令孃で貴族中の一名門である、然るに君はその令妹を藤岡文學士に嫁せしむるに當つて、その人物に嫁せしめんとして、親戚又は令扶の人々が、家柄の甲乙を以て、百方これに異議を挾みたれど、君は頑として應

せざりし如きは、甚だ快心な逸事である、岩倉子爵は予のこの事を語り出でたるに答へて、先頃その文學士と令夫人同行せらるゝを見しに、令夫人は伴をも連れられず、風呂敷包を持ちて夫君に隨行せられたるを見受け、甚敬服したと云はれた、人は人に嫁すべきものなれど、人よりは家柄、財産等を先にするが、殆ど一般を通じての風習なるにも拘らず、殊に此詮議のむつかしき大名華族に此快事あるは、人道の爲に喜ぶべきことである、君は蒲柳の質で、二竪の爲に修學時代を苦しまされ令扶などの靜養を勸むるものあるも、文學はわが生命なりとして、遂に豫期の如く大學を卒業せられたのである、結婚問題といひ、勉學といひ、其意志の鞏固なる、たゞ〳〵敬服するの外はない、予は君に文學談を叩いた、君は曰く、

漸く怪我で大學を卒業をした位で、學問はまだこれからだ、當分はお話を承るのみにして貰ひたいそれに世間の事は一向不案内であるから、

右の如くで、遂に君より話を買出すことを得なかつたのであるが、二時間餘相對して、言語以上大に得る所があつた、予はこの日君に德川伯に面晤する時は、その間高き人格に同化さるる如き感ありと語りたるが、伯の婿君たる君に對しても、また感を同うしたのである、

一家の和樂

◎その十一日　午後六時松平忠威君を訪問した、君は貴族中道徳家を以て目されて居る、君が家庭上の雜話に曰く、

一家は常に面白く團欒せねばならぬ、家庭に和樂を缺くほど、世の中に不幸なものはない、然るに事實は兎角家庭に風波の起るのが多い、それは互に忍ぶことが出來ぬからである、例へば夫が夜遲く歸りたる塲合に於ても妻たるものが、溫顏を以て之を迎へ、お歸りが遲いので淋しうございました、といふやうであれば、もし用務の爲に夜を更したのであれば、その勞を慰め、遊散のためであれば、良心に訴

へられて、氣の毒といふ感を起し、いづれにしても、頓て一家和樂の基となるのである、然るに動もすれば、不平の語氣を洩らすやうなことがある、するとこれが爲一家は遂に和せぬことになる、例へば矢を射るにして、的が幕の如きものであれば、當つてそこに落つるのであるが、板でゞもあれば、これを射貫くか、反動で元へはね返すかするので、女はその板の如きものになつては困る、何にして家庭は互に忍び合うて、圓滿にするやうにせねばならぬ、心がらにて比較すべきものなき家庭の和樂を破るは、甚だ遺憾の事である、

　その曲とその譜

◎その十二日　午前九時より、東京裁縫女學校の新年會に招かれて出席した、餘興として平家琵琶、活人畫、落語等があつた、予は女學生の活人畫も、癸卯園遊會の時の如き珍らしい時代は兎にも角にも、少々鼻について來たのである、この日最も感じたのは、平某氏の琵琶である、

　曲は常陸丸沈沒で、極めて悲壯なるものである予は常陸丸沈沒に友人中島少尉を失ふたので、この曲に甚だしく感涙を催した、二三同感の人もあつたらしかつたが、多くは所謂面白可笑しく聞いて居るやうであッた、この歌を聞いて、その心なくば、その曲は極めて平凡なものである、音樂としては寧ろ無價値である、而も女學校新年宴會の語りものとしては、あまり、感服し得られぬのであつた、

　學校と工場

◎その十三日　午後五時堀越修一郎君を訪問した、君は有名なる穎才新誌を發行したる人で、また有名なる和洋裁縫女學校を創立した人である、君の展覽會談は少々他校をして耳を痛からしむるものがある學校と工場とは組織が違ふ、學校で賣品の展覽會を開くには、生徒に貴重なる時間を、授業の上より差引ねばならぬ、展覽會といふ美名の下に、月謝を取ッた生徒に、無價働をさせるのは、德義の上から云ふてもよくない、學校の犧牲となつて、展覽會の

お手傳の爲に、家庭のお手傳が出來ぬと云ふことになるのは、甚だ迷惑な事であらう、賣るを目的の品物をつくるのと、覺えるを目的で習ふのとは、そこに大差を生ずる譯であるから、高等工業學校の如き大設計の窯業場があつても、學校の茶呑さへ買つて居る如き有様であるのは、學校と工場とを區別して居るからであらう、私の學校はその展覽會といふことを一度もせぬ所が名物で、これは所謂手前味噌であるが、事實に於て東京府に於ける裁縫教員試驗の及第者中こゝ數年私の學校より三分の二を出して居る、

君の學校の成績のよいのは、他で展覽會よ活人畫よと騷いで居る間に、飛離れた修業が出來たからであらう、何にしても一方に好成績を示しての理屈であるから、勢ひその說に贊成せざるを得ない、

圖案に就て

◎その十四日　午前八時意匠を以て有名なる內山竹塘君を訪問し、その圖案談を叩いた、君は曰く

一口に圖案と言へば、なか〳〵廣いものであつてお話も一寸仕難いが、こゝに申上げておきたいのは圖案畫のことである、家を建築するのにも圖案が第一で、また銅像を建設するにも、最初圖案をする、陶器、銅器、其他一般の彫刻等にも、圖案が必要であるが、此の如き形のものゝ圖案はさておき、當時廣く世に需用さるゝ、最も簡易なる書籍雜誌類の表紙畫及び繪葉書等の圖案畫に就て、第一に必要なるは、畫面の調子であらう、調子の惡い圖案は啻に見難いのみならず、圖案畫としての價値がないと思ふ調子とは語を代へて言へば、全體に於ける色彩其他のふりあひである。夫から言つておきたいのは圖案畫にも、筆力の必要なることである、圖案は繪畫と異り、横線の上に筆の力はいらぬやうに思はれるが決してさうではない、調子と筆力が相俟つてはじめて完全なものが作らるるのである、

一の精神教育

◎その十五日　午前八時元寇紀念碑建設の爲め二十

餘年遊說して、その目的を達したる湯地丈雄君を訪ふ、君は近時幼年護國會なるものを創め、その義捐金を以て水雷艇をつくるの計畫あり、既に着々歩を進められたるが、二十餘年を費して漸く一の紀念碑を建設せる手腕を以て、幼年を相手に水雷艇は、チト心細き感を起さゞるを得ないが、君の說は面白い、

たゞ單に紀念碑の一ツや水雷艇の二ツ三ツ造る位の事ならば、それは一富豪の手にでも出來る、云はゞ易々たる仕事である、予はまづ國民の腹の中へ紀念碑を立て、水雷艇をつくらせ、それから具體の物にするのであるから、そこを買つて貰はなければならぬ、

實に君の言の如くで、日淸日露兩戰爭に於ける、吶喊聲裡には、君が義勇奉公を說いて、二十年嗄らした多くの聲も交つた事であらうと思うた、

交際より得る友情

◎その十六日　午前十時學習院教授女學部長下田歌子君を訪ひ、君が得意の社交談を叩いた、君は曰く

凡て圓滑なる交際、親密なる友情は、談笑の裡に自から成り立つものである、故に社會の娛樂は成丈多數の人が集つて親しむことを得るのが必要であります、また多數の人が集つて、圓滑に交際し、親密なる友誼を結ぶといふことは社會の利益で、亦ソレが文明の現象であらうと思ひます、即ち孤獨的娛樂でなしに、衆と共に靄然樂むを得る娛樂でなければなりません、人は克く働き、克く遊ぶ、其働くことも文明の事業は、共同的動作でなければならず其遊ぶにも之れと同じく衆と共にする共同の娛樂でなければなりますまい、しかし娛樂と申しても唯樂めば足ると謂ふものではないので、娛樂の間に社會の風紀を矯正して行き得るものでなければならぬ、一體野蠻國、半開國に在つては、兎角遊戲が濁つて居て、野卑で、劣惡で社會の風紀を混濁するは、この野卑、劣惡なる遊戲にあるのです、殊にこの野卑劣惡なる遊戲は比較的男子に多いので、其及ぼす範

園も、隨つて廣いのです、凡て遊戯は、衆人稠座の間に於ても、妻子眷族の間に於ても、公々然として爲し得るものでなければ不可ませぬ、然るに野卑醜惡の遊戯に耽るものは、自然秘密に行ふ樣になる、妻子にまで隱くして遣る、さうして啻に社會の風紀を混濁ならしむるのみならず、自分自からの心神を毀損するのみならず、忌むべき悲むべきことである

婦人の擧止

◎その十七日　午前八時刑事辯護を以て有名なる花井卓藏君を訪ひ、君の婦人觀を問ふた、君は曰く、

我輩は婦人の事を彼是云ふ資格はない、併し婦人が主人と客の對話に出しやばつて、無闇にお饒舌をして居るのがよいか、婦人は婦人らしく、物徐かにつゝましくして居るのがよいか、その後者を卑屈と見るか奧床しいと見るか、といふことも一種の婦人觀であらう、女に理屈を敎へると、之れを消化す力がないから、露骨に成つて困る、故に客に對するお饒舌も、耳うるさく聞えて、決して愛想には成らぬのである

眞の家庭

◎その十八日　午後六時醫學博士岡田國太郎君を訪問した、君の家庭説は斯うである、

所謂家庭なるものは家族を以て整理せねばならぬ他人を雜へることは、家庭の快樂を減ぐ一原因である、所謂忠臣なる家從が一家の事に干渉したり、壓迫を加へたりするのも、また家庭の曖昧を減ぐ一原因である、美しき家庭は家人各自に戒心し合うて、一家を整理し行くのである、一家の靄々たる和氣は他人を交へない家庭に於て初めて見ることが出來る世間の大資產家などには、それ〴〵專門家を聘し、一家の事業を分擔せしめて、齊家の道を講じて行く所もあるが、こんなものは眞の家庭と稱することを得ない、

日本婦人の缺點

◎その十九日　午前八時理學博士山川健次郎君を訪うて君の女子敎育意見を叩いた、その雜話の一節に

曰く、

現時日本婦人の缺點は、科學應用の思想に乏しいことであらう、婦人の仕事といへば、食物の調理でも、化粧品或は石鹸の使用でも、その他洗濯、育兒園藝、盆栽等、何一つ科學の應用でないものは、殆んどないといふてよい、然るに我國の婦人はこの思想に乏しい結果として、色々の迷信が流行する、然も學校教育を受けた婦人までが、尙此迷信に左右せらるゝものが多いには驚く、宗教のことは私は專門家でないが、若いものが宗教や、哲學を生かじつた連中は、動もすれば、やれ煩悶の、人生不可解のと飛んだ話になる、どうもその氣味があつて、高等女學校時代は兎角學問が遲々として發達せぬ、故に女子教育は、根本に學校の教科書から改造してかゝらねばならぬ、

海軍人の生活

◎その二十日午後六時海軍大主計法學士福田庫文司君を訪うて、何か面白い話をと請求した、君は

何にしろ毎日目に見るものは海と空、友とするものは鷗と鰯、面白い話などあらう筈はない、併し辯護士といふ我儘商賣から、極端に規律の鑄型に入れられる軍籍に身を轉じたのであるから、はじめからの軍人よりは、少々趣味を感ぜぬでもない、規律もこの位行はれると、寧ろ究屈などいふ境を通越して却つて氣樂である、起ろ、寢ろ、食へ、煙草を喫め、何でもかでも號令通りにするので、その上に欠伸をしろ、足を投出せといふの位を加へると、すつから號令で道具が揃うて仕舞ふ、それから食物にしても、なか／＼分量が揃うたもので、下士はその食料を何でも目方で定める、唯今の所では、朝は米五十匁に麥十七匁五分、それに汁と香の物がつく、晝はパン六十五匁に獸肉(牛または豚)六十匁に、野菜を六十匁、夕は米五十匁に麥三十五匁、生魚四十匁に野菜六十匁といふ割合になる、その以上准士官になると一日廿五錢、士官は四十錢、艦長は五十錢の賄料がつく、これは金できめてあるのであるから

よいコックを見付けてつかはぬと旨いものが食へない、何うかよいのがあつたら世話して貰いたい、艦は和泉です、さて海軍は右の如く、すべて物品經理である、陸軍の金錢經理から見ると、豫算などは樂で議會でも苦まぬ、これが金錢經理であるといふと物價の高い廉いがあるから、時によつて算盤のとれる時と、とれぬ時がある、それが海軍の方は、その一例の食料にしても、兵役の義務を盡すに足るべく體力を維持するに必要なる滋養品を與ふるといふことにしてあるから、いくら物價に高下が出來ても五十匁食ふ米は五十匁とするから、食料の上に不自由を感ずることがない、それが一日何程と極つてあると、米代が高くなれば菜代と償ひを付けるといふ風になつて、滋養の幾分を殺がれ、随つて各種の弊害も起ることになる、何にしても面白い世界ぢや、

英佛婦人の品評

◎その二十一日午前十時文學士齋藤一如君を訪うて、種々雑話の末、君の歐洲婦人品評談があつた、

佛蘭西の婦人は、天質非常なる節儉で、能く、其分を守つて下らない遊戯もせず、佛蘭西で非常の贅澤物なる茶砂糖等を儉約し、ピアノも平生は奏さないで、夫の耳を貯へ、自分の衣服は自分に製作へて呉服屋にかゝらず、手製の手輕なる滋養物を食うて料理番の賃金を助け、夜は早く寢床に就いて、蠟燭の儉約をする、故に佛蘭西の婦人は富んで居る、それは實際有つて居るものについてではない、なければなくてもどうにかする、と云ふことについてゞある、故に婦人のお蔭で、一年百磅の收入しかない佛蘭西人も、五百磅の收入ある英吉利人も同一の生計をして居る、英吉利の婦人は、幸福で夫婦仲のよい時は、此上もない良妻であつて、自分の役目は、家庭の快樂を以て、夫を喜ばしめて、職業にしろ、商賣にしろ兎に角外に出て働く夫に決して心配させない様にすること、緩くり休んで、元氣を恢復させる様に用意すること、並に人に對して、英國より外に見られない氣樂と、行届きて、大量なる歡待である

と云ふことを能く心得て居る、

他山の石

◎その二十二日　午前十一時子爵岩倉具明君を訪問した、岩倉といへば、直に右大臣を聯想するが、君は極めて平民的である、その話に曰く、

岩下清周といふ方は中々面白い人で先日弟が其邸へ訪問したらば、華族といふと何だか馬鹿といふやうに聞える、ちつと華族連中はしつ。。かりして貰はねば困ると、大分華族の弊風を説かれたさうである、物はさういふ風に正面攻撃をして、それが他山の石になるやうにしたいものである、華族を馬鹿呼ばりするは、少々時代後れで、今日では頻々として華族中より俊才が現はるやうになつた、併し罵詈に近き言語も、他山の石として耳を傾くるに至つたのは、即ち華族社會の一大進境と見るべきである、



結婚の二要素

◎その二十三日　午後六時米國文學士後藤周造君を訪問して、その結婚談を聞くを得た、

結婚の成立は、少くとも二樣の要素を具備せねばならぬ、一はその必要の自覺、他は、男女の間の情愛である、もし單に必要のみによつて成立せる結婚であらば、それは甚だ無趣味なもので、又愛情のみで、それが成立すれば、そ

の結果は不都合なものとなる、愛情と必要との調和一致が、結婚をして、人生の幸福を齎らすものである、此故に結婚に先立ちての用意は、明瞭にその必要を自覺すると同時に、夫婦間の愛情が、全く一致融和するまでに到らねばならぬ、而して妻として必要なる修養は、此必要の自覺を圓滿に成就し、兼てその夫に對する愛情を適當に生活の上に實現し得る品性を作るにあるので、一旦之が修養を怠つて、輕々しく結婚する如きことあらば、他日思ひもかけぬ破鏡の歎を見るに至るべく、幸福の鍵が忽ち不幸の門出を誘ふものとなる、故に離婚は、離婚せらるゝ時に起つたのでなく、結婚の時その要素を有つて居るのである、

耳の修養

◎その二十四日　理學士田中東洋君を訪ひ、音樂談が始まり、耳に就ての面白き批評があつた、

五官のうち比較的尤も遲鈍なのは耳である、但し僅少の例外を別物として、されど天然の理法は寧ろ

反對の方向を敎ふるものと云はざるを得ない、何んとなれば眼と身とは二つあつて、鼻と口とは唯一つであるからである、二つあるものは、活働の多からんが爲、一つなるはその使用を節せんが爲、或は用ふる場合の少ない爲であらう、それのみならず、唯一つしかなき口には、言語と飲食の二役を命じて居るのであるから、最も節約戒愼を加ふべき筈であるに、得てして言語と飲食の爲に、心身に禍を釀す所多きを見れば、その使用の亂雜に流るゝを立證することが出來る、之に反して眼と耳とは二つありといへど、眼は開閉自在にて、何時でも視覺を拒むことを得るに引かへ、耳は常に門戶開放である、然るにその利用、その官能の他に劣るのは、奇異の現象ではないか、要するに耳に對しては、あまり放任主義であるから、耳の働が功妙を缺ぎ、相當に敎育のない耳では、高尚な音響を樂むことが出來ぬのである今少し國民一般が各自耳の修養につとむるやうにしたいものである、

女子の學問

◎その廿五日　午後三時文學士上谷天籟君を訪ふ、君の女子教育談は斯うである、

高等の女學校では、天文、幾何、代數、哲學、化學等、多くの學課を授けて、多くの時間を費さしめて居るが、是等の學科は女子には全く不用なるのみでなく、成年の女子には殊に有害である、故に之を除くが宜しい、併し地球が太陽を一周するには一年を要するとか云ふ位のことは知つて居るがよい、故に天體のみを教うるは容易であるからよいとしても、深く學理に渉ることは避ける方がよい、婦人が結婚後其の夫と共に、朝夕ヘルベルとスペンサーは云々と談ずる必要もあるまい、その家政上に就て談話すべきも夫婦が學理上の議論をなす必要もあるまい、夫に於ても終日働いて歸りたる時に、妻より鹿爪らしく議論をしかけられては實に迷惑千萬な話であらう、又化學を學びて、醬油は如何なる化學的性質のものであるかは知らざるも差支はない、物を調理するには幾何の醬油を要するかを辨知し、或は醬油の良惡を判定することを得ればよいのである、代數幾何等總て高等數學に屬するものは、女子には全く不用である、何となれば、精神の勞働を要すること實に非常で、又後年に至つて全く忘失するか、又忘れぬまでも婦人の生涯に大に効のある學問でないから、加減乘除位を修め、更に家政上の計算をなすことを得るの力を有すればそれで充分である、又他國語を學ぶのも要用ではあるが、これも學理的でなく實用的に習得するが宜しからうと思ふ、

自然療法

◎その廿六日　午前七時ドクトル松本喜一郎君を訪うて、衛生談より飲食の事に及んだ、君は曰く、

近頃自然療法といふ語が大分言ひ囃される、胃病などは最もよく此療法に合ふべき病氣で、米國にフレッチャー式食事法といふのは、即ち自然の理に基いた食事法、從つて胃病患者に對しては、自然療法と言ふことが出來るのである、其法と言ふても何の秘傳も無い、唯口中の食物を嚙んで、嚙んで、全く

乳の様になるまで嚙んで、無意識的に嚥下するまでの事である、すると胃中に入つた食物は、殆ど全部消化してしまふ、此法によると、普通食物の二分の一若しくは三分の一で事足るのみならず、病に犯されることなく、元氣を增し、疲勞少く、常に愉快である、米國陸軍でも此法を試驗したのに、試驗者の三十二人は、食物普通の分量の三分の一で、體量の維持は勿論、心力體力共、却つて普通法で食事する者より優だと報告された、概してよく嚙んで食べたる人は、食べる分量が少ない、それで丈夫であるものは例の珍らしくない事で、結果として便の分量が少い、猶食事法の注意として、心情の攪亂されてをる時には決して食事せぬやう、此間は消化は無く、胃を弱くすること甚しいといふことである、食事法の改良は、我國には極大切で、湯茶漬、汁懸飯などを禁ずるは勿論、食事には少なくとも、三十分間は樂しむやう、食前食後二十分位づゝは、靜かに休んで、身體も頭も使はないことにしたいものである、

上官の耳

◎その廿七日　午後五時海軍次官加藤友三郎君を訪問した、君は艦より外では演說も講話もしたことがなく、君の言說の筆記せられたものは絕無である、とこれは君の口から聞いたので、予はその實務の人であることを信じて居る、談ははしなく軍人遺族の事に及んだ、

　軍人の未亡人が、尊屬親との間に、下賜金に就て訴訟の多いことは聞いて居るが、これは事實ありさうな事であるから、日清戰役の時に鑑みて、日露戰役の時には、從軍の前にこの遺憾なからしむるやう公然手續を經ないものは、それ〴〵その手續を了することにせしめた、かく一時に大多數の結婚屆が出たのであつた、それが爲め、日清戰役後程、未亡人の不平を耳にせぬが、何にしても未亡人と下賜金に就て爭ふ如き、裏面の事は中々話が私の所までは屆かぬから、どういふことになつて居るか、隨分悲慘なことも少くはなからう、

戰場に於ける火花と、遺族家庭に於ける修羅とは、殆んど甲乙なきものもあらう、さるにてもかゝる事の上長官の耳に響かざる程度にあるは、寧ろ國家の爲に喜ぶべきことであらう、

敎育と營利

◎その廿八日　午後五時東亞女學校主田中弘之君を訪ひ、女學校談が初まつた、君は曰く、

余が天職の上より多年觀察せし各學校の中、特に公私の女學校に限り一言すれば、公立の女學校は一見其の設備も完全し、毫も遺憾がない樣にあるが、其は只形式の上のみにて、內容の不始末に至つては、敎育の精神が何れの點に存するかの嘆があるのである、又私立女學校にては、其の中稍感ずべきものなきにあらざれども、概して敎育の神聖を無視し、全然商賈主義の營利目的であるから、女らしき女を造る事が出來ないのである、斯く云へば其の罪惡は獨り校主とか校長とかに歸する樣ではあるが、さうではない、校主でも校長でも最初より敎育は神聖ならざるべからず位の事は承知し居るに相違なきも、其の學校創立に關しては敷地も借入れなくてはならず校舍をも新築せねばならず、器械をも購求せねばならず、何にかと失費多端なれば、非常なる金滿家にして慈善博愛の心に富む者にあらざる以上は、此等の資金は是非とも他より融通せねばならぬ、他より融通するとせば、相當の金利を支拂はざるべからず其の金利を如何にして得んとするか、一に月謝に依るの外はあるない、月謝に依つて金利を辨じ學校を維持せんとすれば、勢ひ學力品行に如何に拘らず、一人にても多く學生を募集せざるべからず、學生は圓滿なる智德を研修せんよりは、寧ろ金利を產出させる母にして、露骨に云へば資本融通の擔保である校主校長等も前に云ひし如く敎育は神聖なり、營利を目的とするものにあらざる位の事は必ず承知し居るも、脊に腹はかへられぬと云ふ處より勉めて學生の歡心を買ふのであらう、近頃は文明の體操なりとて昔田舍に流行せし盆踊りの如きものを演じて居る

が、これも名を文明の體操に藉りて、其の實はヤハリ金利產出の母たり、資本融通の擔保に供すべき學生を一人にても多く得んとする手段方法に外なからうと思ふ、

君の言や奇矯に失する如きも、而も事實はそれ以上なるを悲しまざるを得ない、隨分模範寄宿舍など吹聽して、それを看版にし、さてその寄宿舍には幾人の收容が出來るかといへば、僅に二十人に過ぎないのであるといふ如きもある、女に教育をせんとする前には、まづ女學校の吟味をせねばならぬ、

幼兒圖書室

◎その廿九日　午後一時華族會館にて、ゆくりなく侯爵德川賴倫君とストーブを圍んで談話するの榮を得た、予は君が經營せる南葵文庫の近况をたづねた南葵文庫といふは、君の藏書を公衆に見せる圖書館である、君は曰く

普通男女の外に、子供にも見せる圖書室をつくつた、子供ばかり來るのでは仕方がないが、大人が連れて來れば、一の娛樂場ともなるやうにして、家庭教育の參考ともなる仕掛にするつもりで、今年中にはすべてその準備が完成するつもりである、

なんと面白き設計ではあるまいか、予は數年前この圖書館を參觀して、その藏書の多きと、その設備の完全なるに垂涎したのである、然るに今亦幼兒圖書室の設備を加へられたる、流石に紀州侯の大圖書館として誇るに足るべきである、

花道の本意

◎その三十日　午前十時花道池の坊の名手稻垣霞川君を訪ふて、花道に就ける意見を求めた、

私どもは寺子屋的頭腦で、挿花に就ての意見など、そのやうな氣の利いたものを有つては居ないが、近頃は何れへ參つても餘程流行の樣である、要するに、挿花なるものは植物自然の美を更に人工を加へて、一小瓶の中に美術的に配置したもので、盆栽の仕立方や築山の配置方と略ぼ同じものであらうと思ふ、そこで挿花にも亦、植物自然の美性を失なはぬ樣、

挿け上げて貰ひたいと思ふ、中には其道の達人と稱せらるゝ方で、却て人工を加へ過ぎて、自然の美觀を沒却せしめてあるのを見たことがある、是等は妙技かは知らぬが甚だ野鄙に見えて、挿花と云ふよりも拙手な細工花と言ひたい氣持がする、花を挿ける上に就ては、是非植物の形態は如何なる點に於て、美的特徵を存して居るかと云ふことに注意して貰ひたいので、植物自然の美體に就ては、天性陽光に向つて、伸長發育するのが普通であるが、中には日裏の方向に梢の伸びてゆくものもあれば、蔓物で左旋右旋となつて居るものもあれば、花なり葉なりが普通のつき方と、マルで反對して居るものもある、夫で挿花なるものが、花の美を賞する計りではなく、形態の美觀をも併せて賞するものであらうと思はれる、故に市中の花店から切花を買ひ取てのみ挿ける方には、トテモ天然の美觀を窺ひ知ることも出來ぬ從つて是を配置することも出來得なからうと思ふ

禍の根元

◎その三十一日　午後一時法學博士夫人江木ゑい子君を訪問した、君はなか〳〵風流韻事に富んで、人の師たるに足るべき藝を幾種類をも有して居る、君は二週間餘り金杉病院にて鼻の療治をせられ、この前日退院せられたので、その療治談があつた、

私は數年來時々目の前に物の這ふやうな心持がして、何だか物が氣になるやうで、夜も碌々眠られません、隨つて朝寢をする、物覺はわるくなる、何うしたことか、別に身體に異常はない筈であるにと思ひましたが、それとも何處かに申分があるのであるまいかと、目を井上博士に見て貰ひますと、他よりよく見える目である、強いて藥が御入用ならば、氣やすめに利きはしませんが何か差上げてよろしうございますがと言ふやうな談で、それから入澤博士から楠田先生にも診て貰ひました、がどこも申分がない、もしや耳ではあるまいかと賀古先生に診て貰ひますと、これも他よりよく聞える耳といふ話、そから金杉博士に鼻を診て貰ひますとサア大變、兩方

の鼻の奥に申分のある軟骨が三ッ、これは取らねば大事になるといはれ、漸く火元は解りました、そこで早速入院して、その軟骨を拔取る手術を受けましたが、隨分よい心持ではありませなんだ、併し右方を拔取ると、それから右半面はまことによい心持になり、又左の方を拔取りますと、宛も夜が明けたやうな氣がしまして、すつかり物がはき〳〵して、生れ變つたやうになりました、

禍の根は何れにひそんで居るか知れぬ、啻に鼻底の軟骨のみには限らぬが、君の話によれば、鼻から起つたヒステリー患者も少なからぬことゝ思ふ、

◎村上清子女史　第十回淸國江蘇省崇明縣尙志女塾の招聘に依り、去廿七日出發した同女史は、明治二十年夏茨城縣東茨城郡石塚村字片根濟松氏の女として生れ、幼にして村上氏へ養女となり、明治三十四年水戸高等女學校に入り、同三十八年四月成績優等にて卒業し、直に小石川區表町淑德女學校内女子淸韓語學講習所に入り、一年半を費して、翌年九月良好なる成績もて卒業し、爾來鄕里に在りしが、今回淑德女學校主幹井原[illegible]第一高等學校舍監谷山初七郎氏の斡旋にて渡淸することゝなか

珍らしき清國老婦人

神田西小川町二丁目九四宮藏章方に寄留し居る、清國婦人崔余氏と云へるは、本年已に四十歳に達せるものなるが、良人は崔通約(四十)とて嘗て廣東羊城新聞特派員として東京に在留中、故國は醫術の發達極めて不振なるを慨し、已に不惑の年に達せしも如何でか習得し能はざるべきとて、同仁醫學校に入學し專心勤勉しつゝありしが、一昨年暑中休暇を利用して歸省せしに、遂に羊城新聞社より其敏腕を認められ、英京倫敦に出張すべく命ぜられしより、辭み難く一旦企てたる目的を捨て倫敦に渡り、當時倫敦にて發行せる華英日報主筆として、其名鄕黨に鏘々たりと、然るに同人には崔武安(十八)と云へる一人の息ありて、二年前より官費留學生として日本に渡來し、學寛は高等工業學校に入學の志望を以て、當時正則英學校へ通學中なるが、前記崔余夫人は、本國廣東にありても、夫は遠く英國に息また其膝下を離れて日本に留學し居る事とて、獨り鄕國に在るも心細しとし、息の監督旁々恰も清國廣東邊は醫術進歩し居らず、殊に産婆の如き正當に學術を修めて從事し居るものなく多くは、素人の所謂我國のトリアゲ婆的のものなればと英國にある良人に謀りたるに、之れ又嘗て自分が日本に在留中醫學を修むべき企を抱きし位なれば、一も二もなく承諾したるより、本年二歳なる女兒を抱きて遙々日本に來り、息武安の前記四宮方に在るを頼りしは漸く本年一月の事なり、然るに同女は來りて未だ東西さへ辨へざるに、一日も早く産婆學を研究せんものと、息武安と共に良き教師もがなと探し居る内、幸ひ同町一丁目一番地に三星登代子(卅四)とて、今より十四年前醫科大學産婆講習所を卒業したる婦人あるを聞き、早速事情を打明けて申込み、去る二十日より、毎日一二時間づゝ熱心授業を受けつゝあるが、清國婦人にして我國に來り産婆學を研究せしは同人が嚆矢なりとぞ

婦人の特質

破壺女史

彼こそは賢婦人なれ、彼こそは德行家なれ、とあふがるゝ人にも、皆各その特質あり、專有あり、人の學びて悟りがたきもの、求めて得べからざるもの、思ひてはかり難きもの常に之有り、之を天賦の特質と稱す、己に其國を同うし、血脈人種を等しうしてすら、人每にかゝる相異ありとせば、世界各國に風俗氣質が相一致並行せざるは固より其所以にして、所謂各國特有の風俗氣質は、他國人が學びて同化する能はざるは怪しむに足らざるなり、

單に泰西と稱すれども、英佛獨墺皆その特質を異にし、單に東洋と稱すれども、日淸韓皆その習俗を異にす、故に彼の長ずる所を、若し其儘我に移さば、害ありて益なき事も多かるべし、然らば東洋の女流が專ら養ふべき特質は如何、何をか捨てゝ、自國の特長を示すべきか、今後の日本婦人は、必世界列國の婦人と匹敵して、讓らざる專有の美質を供へざるべからず

我は才なく、學なく、數にもあらぬものなりといふことを止めよ、我は位置もなく、交友少く、人の注目にも價せずと云ふことを止めよ、才なく學なくとも、皆國民の數なり、位置なく交友乏しくとも、猶良民となることを得べし、之を思はずして、互に己れを賤しめて國民の數にもあらずと云はゞ、日本婦人の三分の一は、かくの如くにして、自國を弱め、其恥を外にさらさん、これ東洋女流の性格特質を失ふものゝ一なり、

自ら己れを智者と許して、妄りに急進せんことを欲すること勿れ、又吾が國體を察せずして、妄りに不調和なる進步主義を喋々すること勿れ、足弱き者は、徐行せば達すべく、急行せば必ず躓き、體五穀に馴れしものは、米食せば其性を保ち、肉食過度なれば其身を害ふが如く、總て不調和なる進步は、害ありて殆ど益なしと云ふべし、少しく智識あるものは、其智未だ圓滿ならざるが故に、只管自說を遂行せんと欲し、吾が力の能く之に堪ふべきか、吾が敎へんとする人々が能くそを解するか、吾國現今の狀態はいかなる程度まで他國の長所を學び得べしや否やをも顧みずして、たゞ彼の進步主義てふ言葉にのみ心醉して他を思はざるものは、進まんと欲して必躓かざることを得ず、これ東洋女流の性格特質を失ふものゝ二なり、

猶亦一種の保守的婦人あ　、其多年の經驗あると否とに拘らず、我のみ處世に長けたるもの丶如く思ひて、新なる事は悉く忌み、物に變ずることを欲せず、偶年少の人あれば、常に之を掣肘して、其發達を妨げ、いかに嘉すべき思想、採るべき名目にても、已れ經驗の馴れざる事は偏に之を輕しめ、危みて、賴もしき人物をも徒らに湮滅して浩嘆失望せしむる者あり、これ畢竟その見聞狹きが故に心に雅量なく、才に縱橫の活動を失へるにて、此の弊年長婦人に多く、殊に教育普れからざる僻陬の地に多しと聞くは、眞に嘆くべき宿弊にして、惜に世の進運を沮滯せしむる媒介とならん、これ東洋女流の性格特質を失ふもの丶三なり、

抑も東洋女流の特長は、概ね清爽、恬雅、温良、靜淑を表として、内は志操堅く、文德豐に、廉潔、寡欲、忍耐、優艶なる人に富めり、これ實に泰西女流と其趣を異にせる所にして、東洋三個國中、たゞ吾邦婦人のみ此特長を有す、

古來吾が國は、かくの如き特質を保ちて、今日に至りぬ、其山水は飽くまで明媚にして强からざるが如く、又其國情の甚だ優美にして迫らざるに似たる吾邦婦女子の資性は、此の風氣、此風俗の裏に養はれて、自ら閑雅優靜となりしは、蓋し天賦の特質といふべし、今や吾邦は久しく其古き特長のみを墨守すべからざる氣運に向ひぬ、熟々他國の風俗氣習を鑑みて折衷採用し、更に第二の特長を作るべき時期に迫りぬ、この故に保守的婦人は宜しく其時期を觀て進むべし、進歩的婦人は急激の過なからんやうに其新設を施行し、無氣力的婦人は宜しく奮勵して立ち、世の氣運を詳にして、其智識を發達せしめんことを要す、斯の如く各人自國の消長を吾身の如く重んじて進まば、二十世紀に於ける東洋女流の新なる特質は、いくばくもなくして、發輝せられんこと明なり

然らばこれを行ふにいかなる方法をえらぶべきかといへば、元より各種の事に當りて、一樣の模式に從ふ能はず、凡人每に特質あり、專有ありて相移し難きものもあれど、あらましに之を云へば、表にあらはれたる清爽恬雅の二つを失はざらんやうに温良靜淑の二つを更に活潑愉快ならしめて、人々の交際に便且快からしめ、志操堅く文德ゆたかなるものは、更に機を見て動き、變に遇ひて敏捷なる才能あるべく、其廉潔寡欲なるは、無意味の廉潔、不經濟なる寡欲にあらずして、秋毫をも、苟に取らず、只取るべき物は憚らず、之を取りて更に之を有益の業に散ずるを吝まざる底の廉潔寡欲を學び、慈愛優艶なるは、慈愛優情の爲に智昏くらみ、意志弱くなりて、之を過らしむることなからんやうに、必判決の智を養ふべく、猶超守の特質を飾るに、深き愛國の至情、忍耐自立の氣象、自信自重の精神、事局を裁斷する才能等なかるべからず、之を外にして、徒に女權の振はざるを嘆くは、未だ其本末を知らざるなり、吾邦婦人が若し皆かくの如き健全なる思想と實行とを養ふに至らば、求めずとも女權自ら加はるに至らん然らずばこれ根底なき女權にして、いかで人を信服せしむるに價せんや、急進的女子の喋々する女權は敢て外部より携へ來り得べきには非ざるなり



花ぞ昔の香に匂ひける

東京　土田八重子

三とせ以前梅見の時、雨宿りせし家の媼と其の孫娘にやわらむ、美しき二九ばかりなるが、いとまめやかにもてなしつ。妾等いとも嬉しう四方やまの物語りに、一と時ほども過ぎすうち、やがて雨もあがりたれば、いざとて厚く禮をのべ、立出づるを門口に送りて、またこん春も必ず來ませ、此の花と共にまち侍るよと、殘り惜しげに見送りし二人が情けの忘れかね、去る年又もや姉と共に彼の家尋ねばやといそぎゆくに、やがて程近うなりて、花の間よりなつかしき草の家の見え初むる頃は、妾堪え得ずつと走り行き見れば、こは如何に板戸は朽ちて軒傾き、住む人ありともおもほえぬに驚き迷ひ、あたりの家にゆいて、そのやうを問へば、あはれ彼の美しかりし娘は、胸に病を得て、すぎし夏の初めつ方、つひに世を去りしとか、彼のやさしかりし媼は、物狂しきまでになげき悲しみてありけるが、泣く〳〵遺骨をたづさへて、ふるさと山城へ歸り行けると、きく妾いたくも胸つぶれて、山城の里はいづちと打きくをさ迄は知らずとの答へに、せん方涙に見返る彼の家梅の花のみは約を違へず、昔の香に匂へども、待つよと云ひし其の人は、あゝ定めなき人の世と行く折の樂しさに引きかへ、余の花を眺めん心もなく、打ちしほたれて、もと來し路へ引き返しぬ。

今年もまた、日ごと〳〵に鶯の美しうなりまさる頃

とはなりて、ひとしほ思ひ浮べては忘れがたなきまゝに、

新家庭

能登　粟倉菫子

上　和樂

「お歸り遊ばせ」

「あ」、靜夫は莞爾と頷いた儘、帽子を夫人に渡して奥の方へ這入った。夫人は其名を文子と稱んで、本年二九の春を迎へた柔順な美しい婦人であつて、去年の三月郷里の高等女學校を最優等の成績を以て卒業したのである。其式場に答辭を朗讀したる文子の容態の如何に優柔であつたかは、「女學生の内にも彼樣優しい女も居るのだナー」、彼樣な娘を持ツた兩親は眞に幸福じや」と、お轉婆の娘を持つてゐる某貿業家を感嘆せしめた一事にても解る。當時縁談は雨の降る如く此處の資産家彼處の富豪家、さては學士の肩書を有する殿方より高襟紳士に至る迄、非常に文子を懇望したのである。其度毎順柔い文子は「私お嫁になんか行かないことよ」と、微笑むばかりで、一言も謂なかつたそうである。文子の兄の秀一は已に中學以來竹馬の友として、水魚の交際を結んでゐた。今の良人波島靜夫の前途有望の青

年なる事を堅く信じて、自分が出雲の神となつて嚴父を解き慈母を諭して、春未だ寒き二月の中旬、遂に最愛なる妹を此處波島家へ嫁せしめたのである。

松もあれば梅も有る、夫から草でもなければ樹でもない何んとか云ふ珍らしい物もある。山茶花の傍には今一雨降れば綻びさうな櫻の木も二三本有る。泉水のほとりには菫やたんぽゝなどの花が可愛げに咲いてゐる、掃除の行屆いた小綺麗な庭にそふた八疊の一室は主人の居間であらう。

伊勢崎飛白の綿入の上に對の上着を羽織ツて、卷煙草を燻しながら庭の面に眼を注いでゐる靜夫は、歳の頃二十五六の鼻下には八字髯を貯へた快活さうな中にも、嚴格な節も見える實に立派な男子である、退は人望家として將た近時青年界の敏腕家として、歡迎されつゝ有る人物だけあツて……、と、點頭かれるのである。

抑も靜夫の兩親と云ふのは、今は此世の人ではない、慈母も今から十二三年前に、不圖した風邪が原因で、當時十三歳になる靜夫と、目下外國に遊學中の次男秋夫とを殘して、遂に白玉樓中の人となツたのである。其時兄弟は母の死體に縋つて「お母樣!!!死んじや可厭よ、僕屹度豪い者になるんだから、エゝお母樣、死ないで頂戴!!!」と、聲を惜まず泣いたので、其樣を見た嚴君の義也は、顏をそ向けて、男泣に泣いたそうである。其以來義也は、親戚の者や友人の言葉を堅く斥けて後妻をも迎へずに、只管兄弟の薫陶に怠りなく男

の手一つで教育て上げたのでありツたが、其父も三年の昔歸らぬ旅路に赴たのである。「僕達は死亡なられたお父樣に對しても、世人に笑はれる樣な事をしてはならんのじや」とは、靜夫が常も秋夫に曰ふた言葉ださうな。

「今日は大層遲う御座いましたのネー」。

脫ぎ代へた夫の洋服を疊みながら、文子は恁う訊ねた。

「あゝ少し用事が有たので花園町の友人の宅へ廻つて來たもんだから」

靜夫は煙草入から新たに一本をつまんだ。今し文庫の上の置時計は七時を報じた。

長い春の日最早黃昏にて塒に歸る烏の聲も聞える。文子は思ひ附いた樣に、

「オヤ最う暗くなつたこと……貴郞!御飯は? 用意はもう出來てますから何時でもお召し遊ばして!。」

「あ、然うか、じや此室て頂くとせうか。」

「では只今。」

文子は膳部を運ぶべく立上た。

「文さんも此處で一件にお食りよ。」

「ハ、私後刻で頂いても宜う御坐います。」

「併し僕獨りて食べたツて詰らんじやないか、……ネー文さん!!! 山海珍味の御馳走を一人でムシヤ／＼食べるよりかも、如何に麥飯に味噌汁なりともだ子ー、楽しく文さんと噺しながら夫婦で食べる方が、大に僕の滿足とする處であるのじや、ハ……大層理屈ぽツくなつたナア」

と、靜夫はさも心地よげに笑うて、

「だから文さんの御膳も此室へ持つてお出でと曰ふのじや。」

「ハイ」

文子は如何に嬉れしく感じたであらう。美しい笑顏を以て眞から夫の溫情に謝したのである。此時小間使の菊やが洋燈を持つて來た。やがて夫婦の膳も運ばれた。靜夫は鳥渡膳の上を見て、

「オゝ此皿は西洋料理か?。」

「あら貴郞那麼もの(早口に)駄目なんですよ、どうせ不味でせうけれど!」

と、文子は其洋皿を手に取ツて、「餘り火が強かつたか不知、」低聲に斯う獨言ちて凝と眺てゐる。

「どれ文さんのお手際拜見せうか……オゝ是は甘味い／＼、何んと稱ふんだれー」

「ホゝゝ名なんか有りや仕ませんわ、文子燒とでも云ふんでせう、ホゝゝ」

「文子燒!(一寸頭を傾げて)チト可笑しいネーハゝゝゝゝ」

「ホゝゝゝ。」

二人は如何にも樂しさうに笑ふた。程なく御飯が濟むと、靜夫は新聞紙を文子は編物を手にするので有た。

「まア靜かな晩だこと!!。」
文子は編物の手を鳥渡止めて、しみ〳〵と感う曰ふて夫の顔を仰いだ。斯くて靜かに〳〵春の宵は更けてゆくのである。折しも聞き馴れた按摩の笛の音が、櫻町の方へ流れて行く同時に、犬の聲が遠くに聞こえる、

下　訣別

波島靜夫は職務上の爲に、三陸地方へ巡廻する事になつたので、今朝出立するのである。留守の爲郷里なる文子の母が來てゐる。僕は後に行くから荷物丈け先に持つて行て吳れと、小間使を先に遣り、又自分は人力車をも避けて十町餘りもある路程を徒歩で行くのに定めた、
「夫じゃお母さん暫時……………隨分お身體をお大切になさつて……
又留守中を宜敷う………。」
と文子の實母に別しを告げる。
「ハ、留守中は心配なさらずにネ―彼地は氣候も變た所ですから、何卒靜夫さんも身體を大事にしてネ―。」
「有難う。」
靜夫は立上た。母も立た。母は門前迄見送つた、
「では靜夫さん！御機嫌宜う、御用が濟み次第早う歸國て下さいよ。」

「ハイ、夫じやお母さん、此處で失敬します。」
靜夫は鳥渡會釋して、早や足を運ぶのであつた、
文子は停車場迄見送るべく、之も歩を轉した、流石に町の内は二三間程宛も離れて行くので有つたが、郊外へ出ると、いつか夫婦は列んでゐた。
向ふの方には四五人の農夫等が、節面白く唄ひながら田を耕してゐる。道端に生ひ茂れる若草の葉末に宿れる白露に、朝日が映ろひ、美しう、何處やらには鶯の聲もきこゆる。
「あの私什しやう」
突然に文子が恁う言ふたので、靜夫は一寸目を圓くして、
「文さん什うしたんだネ―、何を什う仕樣うと云ふの。」
「だッて私!!」
文子は掛けてゐるホワイトショールの房を弄りつゝ行く
「だッて私?。」
靜夫は鸚鵡返しに斯う云ふと、文子は少し伏目になつて、
「だッて三月間――一寸百日の間ホヽヽヽ」
微かな笑ひを漏らした。靜夫は可笑敷くて堪らんと云ふた樣な顔をして、
「ハヽヽヽ何の事かと思うたら其麼事か、文さんは其樣に心配してゐるの、三月なんか直ぐ立つて了ふよ、夫に外國へ行くのでもなけりや戰爭に行くのでも無い、猶且吾々の故郷地たる大日本帝國の

……………だがネ文さん！手紙は絶えず發す心算だから、文さんも時々れー。」

「ハイ」

文子は口の中で答へる。靜夫も口でこそ斯うは謂ふてゐるものゝ、新婚早々袂別れることの甚麼に苦しいことであらう。三月と云へば短かい樣では有るが、待つ身には中々長い日數である。

松並木の邊迄來ると靜夫はハタト止つて

「文さん!!!何處迄行ても同じい事だから、此處で別れるとせう。」

文子は可愛い眼を見張つて、

「あら今少路ですもの、私停車場迄行きますわ。」

「併し――プラットホームに立てゐる姿を見るのは非常に辛いからネー。」

文子は默して頭を垂れぬ。束髪にかざしてゐるオリーフ色のリボンが微かにゆらいた。

靜夫は丁と文子の肩を叩いて、

「夫じや文さん!!!僕は直ぐに歸國て來るかられー身體を大切にして……………。」

「ハ、ハイ早う歸宅て頂戴!!!」

文子の眼はいつか濕んでゐた、靜夫も感極まりて面をそ向けつ。

「文さん!!!」

離別の握手を最後に、靜夫は文子を此處に殘して立去つたのである。

靴音はだん／＼消えて影はいよ／＼少さくなつた。彼方の山角をよぎらんとして靜夫は名殘振り返つた。其刹那文子の心の駒は夫の後を追ひかけんとしたのを漸くに抑へて、傍への松に身を寄せたのである。

今しも美しき二羽の蝶々が、もつれ合ひて上になり下になり後になり先になり、果ては足下の菫の花の上に止つた

瞬間!!!文子は何を感じたか、サツト晴やかなる笑みを浮べた。

(終)

マニラ便り

拝啓私こと、昨年當地に參りてより、淋しき離れ小島のあけくれに、女鑑を此上なき友として、愛讀いたし居候ところ、私は短歌を好み候まゝ、毎月の誌上にて、皆さま方の御作歌を拜見いたし、何よりの樂みと致し居候、私も當地にて見聞せしことゞもや、叙題短歌を人まれに詠みこゝろみ候まゝ少々御送り申上候、此うち誌上に載せらるゝものも有之候へば、御直しの上御のせ下され候はゞ、嬉しかるべく候。

二月八日米領マニラ三井物産會社々宅にて

竹下とみ子

女鑑編輯局御中

記者曰く　チトマニラの風俗上おもしろきものあらば投稿せられたし、

貴族院議員文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌兼題 春風

天

乙女子がたもとに匂ふ春風は
いづこの梅にふれて來つらむ

秋田 古瀬りく子

地

花や散る蝶や覺むると春の川を
風にこゝろのさわかれにけり

下總 花園薫子

人

風もちて里のうなゐのかたり合ふ
笑がほのどかに春風ぞ吹く

奈良 菅とし子

選外秀逸

○○

吹かるゝか心ちよきまてなりにけり
すみれ花さく春のゆふかせ

名古屋 木下鶴子

○○

春かせも身にしみてこそ嬉しけれ
梅か香おくるたよりと思へは

風間千代子

、、○

たまほこの道の春かせかをるなり
梅のはやしにちかづきにけむ

甲府 名取正代子

、○

かすみよりいかたなかれくる川そひのさくら十丁春のかせふく

下野 井上尚子

○

そゝろありき花に別れのかへるさた途りかほなる野路のはる風

福井 岩橋花子

、、、

よへの雨のはれておとなく庭さきの松のこすゑに春かせそふく

神奈川 中島茂子

、、

花ゆゑに人のこゝろもうこくめり吹なちらしそはるのやまかせ

神奈川 岩谷澄子

、、、

若菜つむ少女のりボンうちなびきそよふく風もうめかゝそする

岡山 小山松枝子

○

文づくゑの硯もえならぬかをりして梅咲くまどに春かせそ吹く

常陸 岡田菊子

、、、

菜の花のつゝけゐ野邊を吹く風にさしものとけく胡蝶まふなり

遠江 内山たま子

、○

さと人もかへり見やせん吹くかせに深山路とほく花そ散りける

神戸 今西みさを子

○

春風は君のめぐみに似たるかな吹きていたらぬくまなかりけり

長崎 坂本たけ子

春かぜに池のうすら氷とけそめてゆかしくにほふさゝ波のはな
○ 横濱 鈴木まつ子
梅か香のかをりもそひてわかいほにふく春風のこゝちよきかな
、、、 岐阜 山田しげ子
川かみのこほり吹とく春かせにひばりもゆめをさましつるかな
、、、 清國 宮成梓子
峯のゆきたにのこほりも花とりの
○ ろれにうつる春かせそふく 京都 佐藤清子
青柳にまとたゝかれてあけやれはとなりの花の香をそおくれる
、○ 佐賀 尾方八重子
遠山のかすみのまよりふきたちてはなのこすゑにくゆふ春かせ
、○ 佐賀 尾方綾子
たをやめかかきなす琴かとはかりにいそへのまつに春風そふく
○ 大阪 木村ゑ江子
餘念なくはな束つくるをと女子かリボンに見ゆるはるの影かな
○ 伊賀 佐々木まさ子
おほ神の御庭の幣のゆるぎにものどけさ見えてはるかせそ吹く
、、、 北海道 牧 君子
消えのこる雪のいほりを訪つれて梅か香おくるはるのやまかせ
○ 相模 大谷津峰子
繪筆わらふ乙女か頬をかすめてははなにたゆとふのきのはる風
、○ 岩代 岸野常子
花のうへにねふる胡蝶のゆめにたもさはらぬほとの春のゆふ風
○ 東京 齊木たま子
こゝかしこわかなつみける少女子かたもとゆたかに春風そふく
、○ 越後 大石ます子
聞きなれし庭の木枯しいつの間にうめの香おくる風となりけん
() 東京 加藤まき子
ゆるやかに眞砂の上を吹きすきて行方はかすむいそのまつかせ
○ 東京 土田八重子
梅か香はさそひゆくとも浮雲をともになつれそはるのやまかせ
○ 群馬 木暮千代子
うちなびくやなきのかけに立よりてわれもふかれんはるの夕風
○ 東京 林 環子
こほりてしかけひの水の音すなり今朝春かせの吹きや解きけむ
、、、 大和 栗山俊子
朝かすみのとかにはれてよしの山花のこすゑをわたるはるかせ
、、、 韓國 原野みき子
春風に散るはさくらのさかなれとたゝ惜まれてなみたくまるゝ
○ 能登 栗倉菫子
うくひすの谷の戸出てしあしたよりやまと島根に春のかせふく
○ 北海道 牧 淑子
さきそめしさくらの花をたちこむる霞ふきとくはるのあさかせ
○ 熊本 吉住艶子
乙女子か若菜つむ手にかをるなり花の香むくる野邊のはるかせ
○ 東京 牛山楽子
日あたりのゑんさきちかくねる猫のゆめものとかに春風そふく
○ 東京 林 謐子
寒けれと梅か香おくるはるかせにとさしかねたるわか小窓かな
○ 伊豫 西田楳子
はるかせの吹にし日より花のみか人のこゝろそうこきそめたる
、、、 東京 高橋珍子
ちる時はあたなる庭のはるかせも咲かぬ花にはうれしかりけり
、○ 東京 河合清子
袖ふりてこてふもあそふのへとほくすゞなかをりて春風そふく
○ 東京 吉岡かめ子
のにいてゝわかなつむこかみたれ髪けづると見えてわたる春風
○ 東京 高野元子

なの花にれふるこてふの羽袖にもゆら〳〵と見ゆるの への春かせ
、○　東京　松本まつ子
かをりをはよもにおくりて咲花にさはらぬほとの春かせそふく
○　東京　谷子逸子
青柳のかたよるはかりうちなひきいとものとかに春かせそふく
ゝゝゝ　東京　月塚とも子
はる霞たなひくそらにきのふ今日風のとかにもふきわたるかな
ゝゝゝ　陸前　前田河千年子
のとかにも吹くる風のゆかしけれ花のたよりにふくとおもへは
○　越後　松永しげ子
花といふ花さく野邊のをちこちに胡蝶まはせてはるかせのふく
○　東京　神田けい子
のとかなる春のすかたは青やきを打なひかするかせにしるかな
○　大和　栗山高子
ぬる蝶の朝いのゆめをさましけりはなのこすゑをわたるはる風
ゝゝゝ　陸前　三浦ゑん子
春風にいかのほりわく里の子もみそらにのほるこゝちなるらん
ゝゝゝ　埼玉　横田秋子
春かせのわたりし日よりさと河のこほりのはしもかき絶にけり
○　薩摩　松原みれ子
むつれつゝ花よりはなにとふ蝶の羽袖にかろくはるかせの吹く
ゝゝゝ　兵庫　田淵ふじゑ子
花散らはおとなふ人もなからましそよく春かせこゝろして吹け
○　東京　平塚白百合子
いそ〳〵とさくら貝とる乙女子の袖なひかしてはるのかせふく
○　秋田　長田せつ子
かをりのみさそひてふきし春風のなさけや花もうれしかるらん
○　秋田　細矢はる子
高とのも賤かふせやもおしなへてはなのかをりのはる風そふく

○　埼玉　横田政子
春かせのふく日ふかぬ日やよひ山ひとのこゝろの花になりぬる
ゝゝゝ　岩代　吉田千佐登子
もゝさくらきそひて咲けるそのなかを我ものにして春風のふく
○　神戸　足立あさ子
さゝなみの志賀の浦はに打よせてはるかせわたるからさきの松
ゝゝゝ　播磨　横田春枝子
さそひくる花のにほひはふかくともまた袖さむき春のあさかせ
○　埼玉　横田やな子
そよ〳〵と花の春風ふきにけりこゝろうきたつ嵯峨あらしやま
ゝゝゝ　岐阜　野田冬子
ひさかたのくも井はるかにふく風の音しつかなる春は来にけり
ゝゝゝ　岐阜　山田ふさ子
わかなつむのへの青柳このはるはいとしつかなる風やふくらん
ゝゝゝ　東京　碓井のぶ子
ゆるやかに吹き渡るなり春風はこゝろおのつとのとけかりけり
ゝゝゝ　信濃　足立てる子
梅見んとそゝろ歩ける乙女子のもすそゆたかにはるかせそ吹く
ゝゝゝ　日向　中村ふく子
青柳もうちなひきつゝはるかせのわたらぬ里はなき世なりけり
ゝゝゝ　陸前　末永喜惠子
花ちらし吹なんすゑは知れとものとけきものははるのやまかせ
○　宮城　大槻慶子
かきりある日数おもへは散られともこゝろを花にいたむ春かせ
○　長野　北澤清子
春風につゝむかすみもはれ渡りさしものとけきわかくさの野邊
○　東京　笠原節子
磯つたひ小貝あされる少女らかたもとゆたかにはるかせそふく
ゝゝゝ　陸前　前田河みさを子

梅か香なおくるもたのし春の風わか身はかりのまちしものかは
〇　磐城　木幡きよ子

君か代は疑ひかき根のへたてなく梅か香おくるはるかせそ吹く
ヽ〇　長野　北澤千枝子

世はなへて梅のさかりのきのふ今日こゝろしてふけ春のはつ風
ヽヽヽ　和歌山　植木操子

梅か香をおくりて吹ける春風はうくひすさそふよすかなりけり
ヽヽ　埼玉　安部とみ子

春かせのいつしかたちて池のもにいろなる魚のおよきをそ見る
〇　岩代　菅野和子

春風にうかれてこゝに病める身も花さく野邊そたのしかりける
〇　福井　牧かね子

乙女子かさけしみとりのくろかみにかよふもうれし春の朝かせ
ヽヽヽ　東京　美矢竹照子

さそはすは上野のはなもしらぬらしにほひこもれる春のそよ風
ヽヽヽ　上野　羽鳥綾子

花の香もうくひすのねもぬすみきてやさしくかよふ春の風かな
ヽヽ〇　松山　田村多豆子

さくら花かさす少女かたもとよりふく春かせはのとけかりけり
ヽ〇　山口　村上操子

木からしに松のあらしに吹きあれし風ものとけき春はありけり
ヽヽ〇　松山　上原のぶ子

こほりのみしろとおもひし春風に人のこゝろもとけわたりけり
〇　長野　今村章子

かはみづのこほりにけれとわか菜つむをと女の袖に春風そふく
〇　愛知　津金糸子

菜のはなにまふや胡蝶の羽袖にもはなの香さそふはるのあさ風
〇　伊豫　加藤秋月子

みたれ髮水のかゝみにときわけて岸のやなきにはるかせそふく

うくひすの羽袖に匂ふ梅か香をのせてそひをる今朝のあさかせ
ヽヽヽ　群馬　竹野ふし子

咲きそめし梅もかをりて吹きかへすそて寒からぬ庭のはるかせ
ヽ〇　東京　島村作子

そよ〳〵とやなきに見ゆる春の風人のこゝろものとけからまし
ヽ〇　廣島　濱口愛子

和歌懸題　春雨

天

はとのなく片山かげのたまつばき
ほろ〳〵ちりて春さめのふる
東京　河合清子

地

咲く花にうきたつ人のこゝろをも
ひと日しづめて春さめのふる
群馬　木暮千代子

人

さきそめて人まつ花のこゝろさへ
しらでやそゞぐけさの春さめ
熊本　吉佳艶子

選外秀逸

〇〇　東京　吉岡かめ子

ぬれてくるてがひの猫の鈴の音に
おとなきはるの雨をしるかな

〇〇　東京　土田八重子

うれ〳〵にやなぎの糸にぬく玉を
かぞへても見る春のあめかな

・・〇　奈良　曽とし子
きゝすなくこゑもしめりてきこゆなり春さめかすむ若くさの山

〇　東京　戸塚とも子
姉さみとよもきつまんとちきりしをあやにくに降る春の雨かな

〇　陸前　前田河みさを子
音もなくふりいたしたるはるさめにいろめきにける畑初くさ

〇　長野　北澤千技子
見渡せはをちのやま〳〵うちかすみけふるはかりに春雨そふる

〇　磐城　木幡きよ子
春雨にあめのしたくさみよし野のふる郷いかにこひしかるらん

・〇　東京　笠原節子
ひまもなく軒のたま水落つれともふるともみえぬ春のあめかな

・・　京都　佐藤清子
春雨になり〳〵木々のしつくしてかさとりかぬる花のしたみち

〇　越後　[illegible]子

岸つみてかへるをとめに行きあひぬ春のあめふる花のしたみち

・・・　韓国　原野みき子
はるさめのそぼふる夜半に手燭して梅見る人のうつくしきかな

・・・　北海道　牧淑子
今日いくかかすみよりふる春雨にかとの若くさもえ初めにけり

・・・　伊豫　西田操子
よのひとのおもふこゝろにまかせつゝ音もしつかに春雨そふる

・・・　東京　牛山楽子
あしたさく花あれはこそ春の夜の雨もわひしとおもはさりけり

〇　東京　高橋珍子
まとちかき川そひ柳うちけふりなかめさひしきはるさめのころ

・〇　東京　松本まつ子
うくひすの聲にさめたる朝床にまたもゆめみるはるさめのそら

・・・　陸前　前田河千年子
我ゆめをさまさせしとや音もなくふりいてにけん夜半のはる雨

・〇　越後　松永しげ子
梅のはな風に散りたるうぐひすのやとさびしくもはる雨のふる

〇　東京　益子逸子
こその冬しくれにかれし草もきもみとりにかへる春さめのそら

・・・　信濃　足立てる子
そほ〳〵とふる春雨のたのもしや野邊の千草も萌ゆると思へは

・〇　東京　神田けい子
春雨は降るとも見えすさゝかにのいとをつらぬく玉にこそしれ

・・・　岐阜　豊田冬子
宵よりはねやあたゝかくなりにけり降りそめぬらし雨の音する

・〇　大和　梁山嵩子
さくら花をりてかさせは春さめのふるとしらせて露そこほるゝ

〇　東京　高野元子
八重かすみふかくやたちし朝またきとをあけてしる春雨のそら

・・・　大和　栗山俊子
この人をまつか六つ田の渡しもり衣雨りふるわをやきのもと
・・・　埼玉　横田須磨子
つれ〳〵とれふりもよほす春雨のふる夜はいとゝ淋しかりけり
・・・　埼玉　横田秋子
すゝ菜吹く麥生つゝきの田舎みち
かすむとみれは春雨のふる
○　播磨　小原みれ子
つまことのしらへ床しきたかとのゝ
梅さく庭にはるさめの降る
○　東京　平塚白百合
菜の花にねむるこてふの夢をさへ
さまさぬ程の春の雨ふる
・・　埼玉　横田やな子
竹の間は聲けもよほし小夜更て
しめやかにふる春の雨かな
・・　秋田　細矢はる子
さむけさをみにわすらるゝ春雨や
草きもともにうれしかるらん
○　神戸　足立あさ子
なり〳〵に軒のたま水おとせすは
降るとも知らし夜の春雨
・・・　岐阜　山田ふさ子
まちわたる花のこすゑにうれしくも
けさふりそゝく春の雨かな
・・・　播磨　横田春枝子
ふるまゝに軒のしのふの露そひておつるもゆるき春のあめかな
・・・　秋田　長田せつ子
つれ〳〵をなくさめ娘したまくらにゆめむすはする春雨のそら



・・　岩代　吉田ちさと子
木がくれに残るとみえしゆきもけさきえてあとなき春雨のそら
・・・　神戸　足立えいご
ぬしやたれととび石つたひ春さめに濡れてそひらく庭の枝折戸
・・　東京　碓井のぶ子
春さめにひと日〳〵とぬくみけり
野邊のわかくさ色やますらん
・・　信濃　足立てる子
はるさめにうたれしためか櫻花
艶なる顔につゆをやとせる
・・・　山口　河上俊子
里とほみふるはるさめに宿もなし
しはしたのまん花のしたかけ
・・・　日向　中村ふく子
あつま屋に文讀む妹のこゑもれて
しづかに更くる春さめのおと
・・　陸前　末永喜惠子
よしの山花やいかにとふる音に
ゆめもほころふ夜半のはるさめ
・・・　陸前　大槻初音子
吉野山はなのたよりを待つ身には
ふる春雨もなつかしきかな
宮城　大槻慶子
花にのみまよへる夢のさめよとて
閨のまとうつ夜半のはるさめ
○　東京　林　艶子
ぬきとめぬやなきのいとの白玉にそれと知らるゝ春のあめかな
○　越後　大石ます子
さとの子がまゝことしたる辻堂ののきはさひしくはる雨のふる

○ 佐保姫かかすみのそてやしほりけん衣はるさめうちけふりつゝ　東京　加藤まき子

ゝゝ 春さめのしとゝふりしく大沼のあしまをわけてかひつふりなく　遠江　内山たま子

○ 歩のれのもれくるかたに灯かけさして庭のさくらに雨静かなり　岩代　岸野常子

○ 春雨のふる家ののきの竹むらにこゑもしめりてうくひすのなく　下總　瀧口まつ子

○ 心あひの友とかたらふをりもをりいとしめやかに春さめそふる　東京　青木たま子

ゝゝゝ 梅か香をまくらにしめて春さめの夢のかへしのなこりをそしる　神奈川　岩谷逸子

○ 今日もまた春雨ふりぬ思ふとちわらひかりにとちきりしものを　岡山　小山松技子

○ 音もなうはなにふりしく春さめになにとはなしに友のこひしき　下野　井上尙子

○ 川そひのやなきの糸にうちけふりあたりしつけく春さめそふる　福井　岩橋花子

ゝゝゝ つまことの音にもまかふいと水のいとしつかなるはるの雨かな　神奈川　中島蘭子

ゝゝゝ ことのはの花の色香をつみそへてはるの雨夜のしなさためせん　山梨　風間千代子

ゝ○ 降るまゝに長閑になりてうれしきははなまつ頃の雨にそありける　甲府　名取正代子

○ 草はもえはなはひらきぬ佐保姫のめくみのつゆの雨とふりつゝ　清國　富成梓子

○ 今日いく日春のなかめの惜まれて降りくらしたる春さめのそら　東京　林　環子

○ はるさめにこほるゝ花のころも着て山田のかはつ今やなくらむ　常陸　岡田萬子

ゝゝゝ うくひすのぬれて木傳ふ玉つはきたま〳〵ちりて春さめそ降る　横濱　鈴木まつ子

ゝゝゝ 咲いてし軒はのもゝに春さめはいともしつけくそゝきけるかな　越後　岩本よし子

ゝゝ・ そよとふく竹のはかせもしつまりて朧のそらにはるさめのふる　神戸　今西みさを子

ゝゝゝ 花なくは如何にさひしく聞ゆらん降るともわかて降れる春さめ　北海道　牧　君子

ゝゝゝ 雪消えの下もえいそくわか草にいやましそゝくはるのあめかな　秋田　古瀬りく子

ゝゝゝ 大路ゆくはなみ電車のにきはひをふりしつめたる春のよのあめ　名古屋　木下鶴子

ゝゝゝ 朝戸出のたもとぬらして青柳のつゆにおとせぬあめをしるかな　大阪　木村春江子

○ やかて咲く花し思へは昨日けふ降るもうれしきはるのあめかな　伊賀　佐々木まさ子

ゝゝゝ 待詫ひし花のたよりの夢さめてのき端にちかき夜半のはるさめ　佐賀　尾方八重子

○ 小鮎つるたましまかはのせゝらきにかしかなきつゝ春雨そふる　佐賀　尾方綾子

ゝゝゝ あふきみし花のこすゑにふりかゝるしつくのとけき春の雨かな　下總　花園薫子

ゝゝゝ さくら花きほひをこせし春雨の今日はつれなくちらしつるかな　和歌山　植木撫子

○ ふるなへにみとりそまさる春の庭今日もつく〳〵眺めくらしつ　岩代　菅野和子

つせし子のさゝやきに似て春さめのそゝく此の夕思ひふかけれ

けふおすなさかりとたのむ庭の梅のうくひす去りて春雨はきぬ　北澤清子

ふるとなき軒端の雨のしつくにものとけさあまる春はありけり　松山　上原のぶ子

おともなくふる春雨はあをやきの糸よりほそく見えにけるかな　長野　今村卒子

花とたにおもはてまとの春雨にふみ見る夜半そうれしかりける　松山　田村多豆子

よしの山さくらの花を見めくるは雨のふる日そのとけかりける　山口　村上操子

銀燭のひかりはなやく殿の花をことしめやかにはるのあめふる　上野　綾子

ふく風に花のこほれて落つるかと見れは軒端にはるさめのふる　伊豫　加藤秋月子

うちけふるやよひの雨のめくみにや野邊の若草もえいてにけり　群馬　竹のふし子

わたつみの霞のなみのさきにほふ花ものとかにはるさめのふる　東京　島村作子

ふゝきせしそらしつまりて昨日けふしめやかにふる春の雨かな　福井　牧かれ子

大石ます子の新體詩

前號詩友欄にて天賞なりし大石ます子の新體詩は他の雜誌より澡上の君子的行動に出でたるものとして三四の詩友よりその誌名を明記して注意あり、尙編輯局にて取しらべたる所、偶意の暗合せるものとも見えず、依つて右天賞は取消す

短文

地賞

廢寺　岩代　岸野常子

昔さる高僧の住みし寺とか、今は庭あれ軒くちて苔むせる石段のみいや高し、唯敗殘の瓦三つ二つ、白き梅の花夕風寒う散り落ちて、丹が上にかさなりぬ、ふと仰げば夕月一痕夢よりも淡く、古りし鐘樓に懸りぬ。

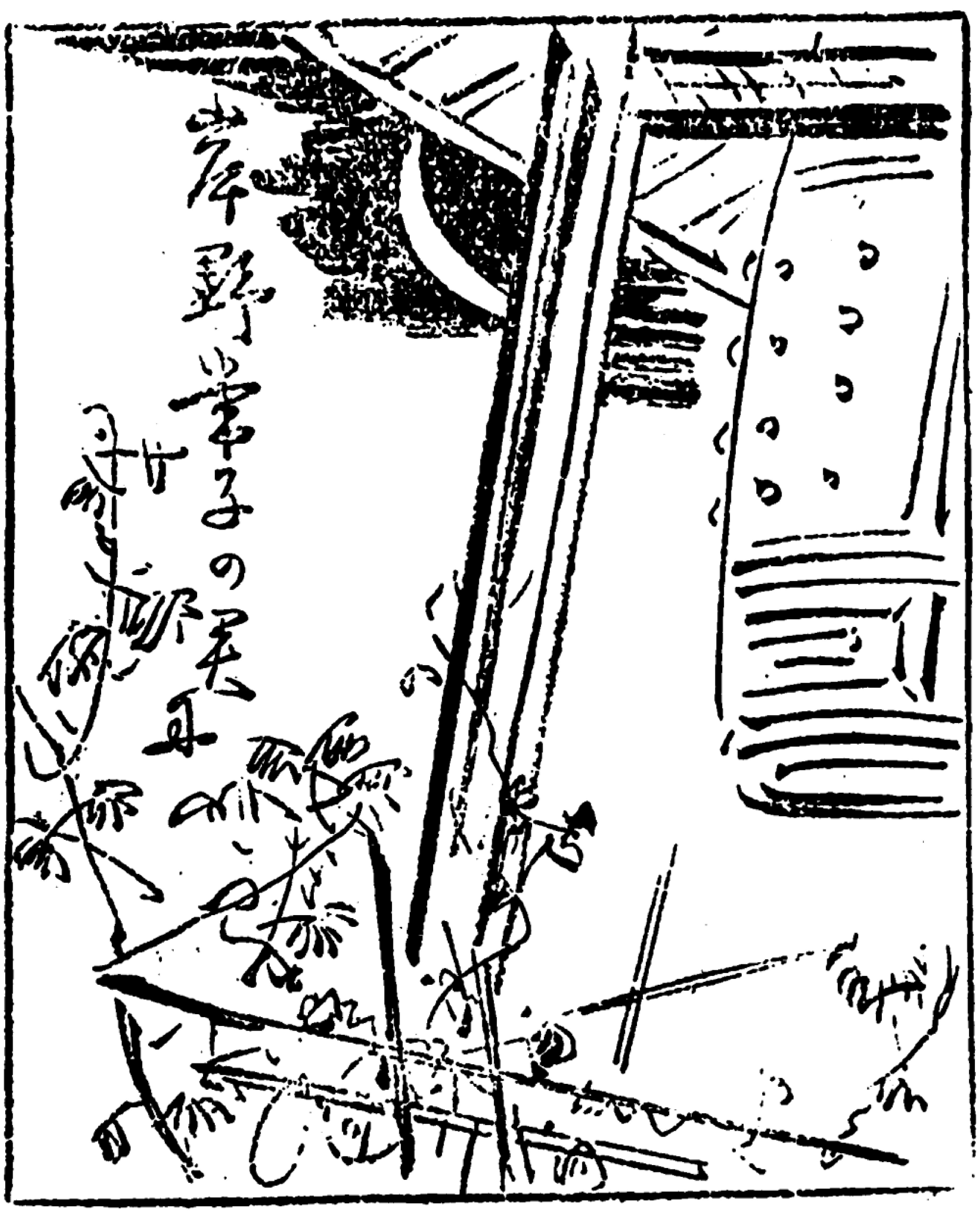
人賞

ま柴おひ　東京　加藤まき子

「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、あひの土山雨がふる、と余韻長く引いて、長閑なる春の山路をま柴おひ、今里さして歸るのである。家には妻子樁さしくべて其の歸りをば待つのか、夕靄の中より淡き烟りのほの見ゆるなど、まるで畵のやう。かゝる所に住居する身は、身も心ものび〳〵として、目まぐるしい都の樣がいとはしくも思はれるのである、

○○春の海　越後　大石ます子

磯の松原煙り渡りて、春は畫の如し、岩に砕けて折れかへる波、波路の末に浮きたつ雲、何ものか造化の妙筆に漏れむ、近き舟は行けども遠き帆影は動かんともせず、霞の上に現はれたる山、旭を半ばうけたる島、又筆もて寫すも及ぶまじき朝なぎの空。



、、○浦の乙女　播磨　横田春枝子

千尋の沖を寶庫とたのみ、せまき苫屋を金殿と定めて、都の風情夢にも見ず、櫻花手折りて詩に歌にめづる心もなければ、からき潮風に吹かれつゝも、憂世の味をそれとも知らず、束ねし髪を波のしぶきにぬらして、潮の泡の水化粧に、出でたる漁舟の歸りを待つ、思へば罪なき浦の乙女よ。

、、○春の徑　埼玉　高橋たかし

草花の足の踏處も無きまで咲ける徑を辿りゆけば、花に眠りゐし蝶々が、不意に起て、鍬肩にせる農夫のあとを追ひゆく、彼方の丘に桃やさくといそぎゆけば、お下げの女童三人、徑の青草を床に坐を占めて、つみし菫を束ねながら喜びあへり、己は路を遮られて、そこに佇みぬ。

、、○好ましきもの　越後　松永しげ子

生れて幾日もへぬ犬猫の、ふく／＼したる、いと

かはゆし、膝の上腰のわたりに打ちよりてぢやれたる、抱かまほし、まして人の子、……露に咲いたる朝顔、夕顔の月に白き、露草の色、夕日の沒する時、梅の高き香、人ならばげに理想の夫、

、、○歸雁　　常陸　岡田萬子

はてしもなく霞みたるみ空に聳立てゝ、昨日今日も打群れて雁ぞ行くなる、あるは島山の暗に鳴き別れてはる〴〵と浪路に消え、あるは朧夜の月影を翼にかけて、越路の方へ急ぐなり、あはれ燕の古巣尋ねて來しものを、やがて高嶺の花も咲きなば、故鄉の空なつかしき雪と見まかふ程に、待てしばし歸る雁金、

、、○春日和　　下野　井上伺子

垣の紅梅は今が盛り、前の小川には芹がのびて、庭には鷄が五六羽餌を拾つて居る、暖かい春の日が婆さんの脊を照して、傍に丸くなつて猫がねて居る、軒のかどで目白がないた、お婆さん後を向くと、黑髮山が目先に見ゆる。

、、○荒川畔　　東京　神田けい子

川は曲り〳〵て長蛇の如く、水裕やかに流れて平和の春を囁くに似たり。人々數多打のせて漕ぎ下すは、下つ瀬の名に負ふ堤の花見むとてか。新高く積上げて漕行くは川下の市にひさかむ料か。柳まばらに立てる川畔に佇めは、春風徐に袖を掃ひて雲雀高う舞上る。菜の花にむつれし黃蝶二つ心ありけに足もとに咲ける白菫に止まりぬ。かくても塵に汚れし都の花にあこかれむ人のうたてさよ。

、○春野　　能登　栗倉菫子

垣根の繩の結び目の上に、冬の名殘りは見ゆれども、鶯の音に春は來りぬ、病癒えし姉君を導きて、野邊に出ずれば、春風ゆるう流れつ。姉君は菫の床の上に坐し玉ふ。我うしろに廻りて、髮梳き參らせば、胡蝶來りて、姉君の前に舞ひ始めぬ。

○山家　　甲斐　小澤星水

人足しげき都路と打變り、世を遠ざかりたる山住ひ、音なう友は松風に、谷間をくゞる水の音のみ、たゞ淋しさは打勝るのみ、まして雨音しげき夕べしも、亡き父君の偲ばれて、懷しさの、やるせなく、夜な夜な、夢にのみ人は訪ひ來て、戶をぞ叩くと覺ゆるは、木枯しすさぶ風なりけり、夜も早や更けて、月さへ渡り、虫の音あはれに、聞ゆめり。

、、、○春の野　東京　平塚白百合子

あちらの菜の花の末に、繪日傘が二ッ三ッゆれて、堤の櫻は爛漫として、蝶の羽かせにも散りそふ、麥の綠にもえて居る中をわけて、雲雀の歌にふうて居ると、頭の上で鳶のこゑ。長閑に大きな輪をゑがいて居る、

、、、嬰兒　韓國　原野美貴子

野路の菫を髮にかざし、愛の甘きはみつよりもとあこがれて、嘲されど世の生活、ふ風にもまれては、赤き手がらも油に、じみて、果う亂れし髮は、塵に染まり夫婦やがては慾の化身となり了らんとする頃、春の光は淡き一日、姿の產屋に愛の神のあはれみにふれ、嬰兒をたまはりぬ、かくて又、愛は、永久に……かし、

、、節分　越後　岩本よし子

二月四日
今日は節分で有るから、父上と、彌生の谷さんと、私と、豆蒔の豆を煎りぬ、彼處でも、此處でも、福は内、鬼は外、と云ふ聲のきこゆる、
姿等の煎りたる豆は、六月、七月、八月、九月、共に暴かりき、下男の五平治はこれを見て、又今年も、麻が不出來てあらうかといつて、眉をよせた。

○田舍の曉景　岡山　瀧本信子

朝霧いと深く、峰の古松は淡き懸絹に似て微々、雲端をけじめす小川は溶水潺々として、橋行く人もなし、音なき風はうら淋しき堤を薇ひ、曉烟垂柳を罩めて、日未だ昇らず、遠く嘶く馬の聲、鈴の音、あはれ霜をふみてや通ふらん、山家も最早眇さめてか、桔槔を動かす乙女あり、邊は朦朧寂莫として、更に人顏なし、あゝこれぞこれ田舍の曉景にこそ、

、○花園　備前　谷山千代子

長閑な春の日の、空高く雲雀の聲を聞きつゝ分け入る花園、後ろに吹き來る暖かき風は花の香を含みて、得も言はれぬ心地のせられつ、暫しうつとりと見惚れてあれば、突然後ろの桃の木に愛らしき小鳥の聲、振り向けば早や何處へか逃げ去りて其の影も見えず折柄飛び來る蝶の二ッ、三ッ、

、、、雪の庭　和歌山　植木撫子

黑雲立ちまよひ、北風さむきこの夕、ちら〳〵と降る雪に、たれこめて埋火かきおこせるに、外には妹などのふれ〳〵と、さわぎ立つるもいと勇まし、やがてふと端近く出づるに、はや庭の面は白うなりて、今を盛りと咲く紅梅に降りかゝりたる、實によきながめなるかな、

、○餘寒　松山　田村多豆子

春となりて後の寒さばかり、身にしみて苦しき物はあらし、咲出たる梅の花も、かしけて嵐に香を吹やられ、警句はせたる鶯も、まだ谷の戸にこもりけむ、音つれ絕えぬ、されば、只人の身にしむばかりにもあらしかし、風も寒さも、

、、一雪中の感　石見　川本瀧世子

梢をあらす木枯の風烈しく、綿ちぎりたらん如く霏々として降りつゞく雪に、道行く人もなく、細う烟の立ちのぼる賤が伏屋も失せて、見渡すかぎり野も山も一面に白銀もて裝はれぬ、折々きこゆる破竹の聲、二ッ三ッ、ふと往年我が忠勇なる軍人諸士の滿州の野に銃を枕の勞を思出し、又國家の前途を思ひ、身のおく處を知らず、悄然として書齋に入りぬ、

新體詩

地賞

春の野　　備前　谷山千代子

若草もゆる春の野や、吹き來る風のゆるやかに
奇しき花の香を秘めて、我が頬なでゝ過ぎ去りぬ
花夢淡き蝶々は、何處ともなく翔り來て
花から花と傳ひては、聽て彼方に影消えぬ
見れば雲雀の二つ三つ、長閑けき聲をはなちつゝ
紺碧濃き大空の、雲居に高くのぼるなり

人賞

春の夕　　越後　岩本翠浪子

からす塒に急ぎて
吾影ながく畔を越えぬ、伊吹の社地藏の森
みる／＼薄らぎ行きて、三日月朧山を出でけり
笛ふきて來るは誰ぞ
その聲の如何にゆかしき、足とめて耳かたむけば
笛の音はたと止みて、水車の軋る音彼方に

〇胡蝶　　大阪　木村春江子

霞より降る春雨に　ぬれていやます花の香の
輕き羽袖に染みぬらん　去りがてなれや白き蝶
猶花の上に宿るなり
　後より來にし黄なる蝶　とめし盛りの花の上に
白き胡蝶の宿る見て　色香もひくき下つ枝の
小さき花に宿しめぬ
　吹くとしもなき春風の　名殘の露を拂ふ時
盛りの花の二三片　散れば去り行く白き蝶
薄きつばさも打ちしほれ
　あはれ小さき花の上に宿りし　蝶やいかならん
霞のまくを今もれて　春日しづかに照らす時
黄なるつばさは輝きぬ

〇夕暮　　日向　岸上はる子

胸の思ひをいやさむと　足にまかせて唯一人
さまよひ出でぬ小川邊に　今し夕日は未遠く
遙なる山の其おくに　入らむとしてはあまたゝび
こがれの千すぢはなちつゝ　ぱつとあからむ美しさ
げにも聖者のいまはとて　かくの如くはなからむと
只茫然とうちながめ　心も身をも忘れはて
しばしは神の子となりぬ　おりしもつぐる暮の鐘
我にかへりて四方見れば　早やうす暗くなりにけり
さらば自然よいざさらば　又來む明日を待たなむと
一足毎に浮つ世に　ふみ入る心かなしくて

鶯に　　越後　大石ます子

春未た淺き淺茅生の　小野の小笹の下かげに

霰ふる日なえも鳴かで
如何にやさしき人の來て
葦なき夢にさそはれて
人の軒端に宿かりて
淋しきものにあるなれば
咲充つ花のことく〱
ほばかりもなく鶯よ

何を思ふか鶯よ
やさしき汝を誘ふとも
雀の妻にゆくなかれ
家をひろぐる雀等は
ゆめ、ゆめ、惑ふこと勿れ
汝が夢を宿す時
この野に謳へ幸あらむ

〇春の野　常陸　岡田萬子

しめやかに降る春雨に
綠の色のなつかしく
里の小女の打群れて
うれしさ袖にあふれつゝ
霞の奥に鶯の
小松の下に鳴く雉子は
うたれし妻や慕ふらん
雲井はるかに鳴く雲雀
そよ〱と吹く春風に
花より花にあこがれて
黄なる蒲公英の花の上
我もいこはむ草の上

垣根の草の萌出てゝ
野邊はいかにと來て見れは
摘みはやすなり初若菜
野守が庵は梅咲きて
萬代歌ふ聲すなり
折々ひゞく砲の音に
董の床をよそにして
巣をな忘れそ子や待たむ
羽袖も輕く舞ふ蝶の
我も遊はむいざさらば
蝶のつかれて眠る時
つはな抜きつゝ土筆つみつゝ

〇折にふれて　長崎　坂本たけ子

月永却に輝きて、
なとて浮世の詰有らんや
あす新月の愁あらん
夕浮雲のなげきあり

人の世とはに榮えなば
今日満月の望あらば
朝新望の空あらば
嗚呼月影よ月影よ

葉末の露に玉やどり
嬉しき事のみなき物を
なみだつきぬもことはりや
昨日は綾羅身にまとひ
なほのとぼそのうらめしや
とふものとては松風が
いよゝ冷たき人ごゝろ
春爛漫の桃櫻
其色其香とことはに
花のかんばせ月の眉
玉をよそほひ百千とせ
やがて春すぎ夏去らば
時めき行くを如何にせん
すさびすさぶを如何にせん
謳ひ謳ひし八千草よ
同じ色にぞ淋びにける
昨日の翡翠の髪のさま
けふは名残もなかりけり
など手枕のめゆの間と

いさゝ小川に玉浮ぶ
まして下界の人の世の
あすかの淵瀬定めなく
隙間の風しいとひしを
落葉に道はうづもれて
峯のあらしの外はなく
嗚呼是非もなき浮世かな
ゆかり香深きすみれ草
匂はましかばいかばかり
みどりの髮は長くして
榮えましかばいかばかり
世は秋風の冷かく
世は木枯の時を得て
昨日は春ののどけさを
今日ははかなき霜枯の
富貴に酔ひし乙女子よ
花の笑ひのかんばせも
あゝ現世はうたゝねの
さとらざりしぞ是非もなき

、〇春の歌　神戸　足立あさ子

「たま〱晴し春雨に。
久しき御代を打おさむ。
「音羽の瀧のしら糸の。
春の色香に染がふる。

蝶も舞子の袂ひさし。
浪の鼓や松の琴」
雲の亂れもとけ初て。
夕紅ゐやあさみどり」

、、、露　播磨　横田春枝子

元のしづくに末のつゆ
世の人々は云ふなれど
千々に面影かゆるなる

葉なきものゝきはみぞと
結ぶ葉草のいろにより
露こそなかしき物ぞかし

春雨はれしおぼろよに
光りをみがく月のした
ほろりと落つる玉の色
八重に置める花のあさ
氣高く光るを玉と見て
袖につめたく消えゆくは
哀れか露のそのいのち
造化の神のつくります

○あはれが子

消えぬ思ひに明石がた
すぎし四年のその昔
消えてはかなくなりにけり
明けて五つになりぬるが
父をたづぬる憐さよ
いかに無常の世なりとて
あはれふびんの我子かな
せめて親と子たゞ二人
まだあどけなき幼子を
今日の我身のこの幸も
かゞみにうつる面影の
はるゝ間なきも理りや
我に得堪へぬつらさあり
繰返さるゝをだまきに
さてもやさしきみ姿を
みせまくほしやその昔

、○折に入れて

「かしこき君の代々を經し。
春榮を競ふしら濱は。

庭の薔薇とかたらひて
そと受けて見る手底に
そよ白金のおもひあり
野べの菫とさゝやきて
拾はまほしく走りよる
よそ眞が玉の思ひあり
優美か露のそのおもゆ
一點の水に想ひおほき

伊豫　加藤秋月子

又もよせくる年なみや
君はかへらぬ水の泡
あとにのこりし思ひ種
日毎〳〵の起ふしに
いかにはかなき習ひとて
さてもはかなき契かな
かたみにしぼる袖と袖
つきぬ縁のなかかれと
たゞ抱きしめ抱きしめ
憂の種ぞなか〳〵に
うれひの雲に閉されて
ものや思ふて人とふも
是ぞ浮世としりつゝも
笑みまだ見えて其昔の
あはれ遺れる思ひ子に
せめて一夜の夢にだに

神戸　足立ゑい子

難波の浦やよしあしの。
春邊に花を咲せけり」

「苗代小田にむらきもの。
香はしく咲や櫻田の。

、、、爐邊の新年

去年のみ雪はとけやらで
いまし大爐は薪そへて
床には手いけの水仙の
土間にはひしと米俵
柴もたきゞも鼎びたり
軒端めぐりてつられけり
妻が手織の布子着て
睦くみあはせ妻がくむ
めでたき年の初春を
麓の村の萬歳のこゑ

○摘　草

角田彌彦の峯つゞき
野守の宿の何方と
神の使か緋などしの
胡蝶ひら〳〵庭をまふ
あこかれ出でゝいと輕う
向ひ隣の友どちを
可笑さまのいでたちに
土筆蒲公英つぼすみれ
つめにて切れぬ草有れば
根もと切る折何となく
胡蝶の床は何方ぞ
留守に草摘み持ちかへる
怨みむ事の恐しく
かけるしばしの時の間に

心の花の種まきて。
霞か關にあけ暮む」

東京　平塚白百合子

今日も吹雪にあけにけり
寒さもしらぬ室のうち
ゆかしき香して匂ふかな
たかくつまれぬ咲柘榴も
心づくしのほしがきは
甘さは色にみゆるかな
今し爐邊におらゝかの
濁酒數盃かされつゝ
祝ふ爐邊に聞ゆなり

越後　松永繁子

裾に立ちける薄霞
眺むる目路のいと遙か
錦ならねど遊はれの
ために和魂いつしかも
心の駒は野をはしる
誘ひ合せてさゝめきて
娘しも野遊の摘草や
左手にさけたる草籠へ
借りし小刀そととりて
胸の血汐はさとれども
雲雀の宿はこゝなるか
吾等がわさをさがなしと
若草小道ひたはしり
摘みたる草を枕して

あゝこの春の一夜だに　胡蝶の宿にかりねして
露の甘きをひたぶるに　春めつゝこの身も袖振りて
胡蝶とならばいか許り　嬉しからまし楽しきと
手なる草籠ゆるめつゝ　落ちむもしらずなつかしう
右に左にまふ蝶の　花にかくるゝ姿みとめて

ゝ〇月の夜　栗山たか子

頃は彌生の末の方、　古里いそぐ雁がねも、
霞たゝよふ八汐路の、　浜間を分てかへる時、
月はいよゝかけ更て、　よする白浪音高し、
あゝいかなれはわれらそも、　戀すてふものゝしらなくに、
心みだれてたへがたく、　こぼるゝ涙とゞまらず、
ぬれにぞぬるゝ袖の上、　かはくひまだにあらぬなり、

短歌

天賞

友の許へ　大阪　木江春村子

はつ咲の梅を封じてゆふきかき
こしちにつけんなには津のはる

地賞

述懐　薩摩　松原みね子

浪もたちわらしも吹きて舟びとの
ちからの程も世にはしらるれ

人賞

冬月　伊豫　加藤秋月子

見わたせば山べの松もうづもれて
雪よりのぼるつきを見るかな

〇若草　北海道　牧　淑子
雪消えて春のひかりのゝとけきにむら／＼見ゆる野邊の若くさ

〇鶯　信濃　井口きみ子
いきたなき人や耻らむうぐひすは朝またきより鳴かぬ日もなし

〇同　北海道　佐藤央子
高とのゝうちそ床しき琴の音にしらへあはせてうぐひすのなく

〇野鶯　大和　栗山たか子
うぐひすの聲さへしけくなりにけり春風わたる小野のさゝわら

〇山路鶯　下總　瀧口まつ子
うくひすの聲にうかれて思はすもしらぬ山路にまよひつるかな

〇閑居鶯　甲府　風間千代子
くれ竹の靜けき宿と世をこめてふしおもしろくうぐひすのなく

ゝゝゝ待花　宮城　大槻慶子
待わふるわか心をもしらゆふかはなのまことをいつかみすらん

ゝゝ〇花　越後　松永しげ子
花も亦こゝろありけむ底すめるいけにすかたをうつしてそ咲く

〇山花　日向　岸上はる子
からき世の風はいつちを吹くらむとこゝろにくゝも咲く山の花

〇花の村　埼玉　高橋たかし子
日は落ちて人かけそれと見えなくに花の村のみ暮れのこりけり

〇春日遲　豐前　末永きえ子

しつのめか心うみ〳〵ひく糸のなかきはるのひあしなりけり

、〇春の月　越後 大石ます子

更けゆきぬ花もいまはとねむるらん夢より淡しおぼろ夜のつき

、〇渡頭春月　陸前 大槻初音子

船よばにゆきゝもたえてすみ田川ふけゆくはなに月ぞやとれる

〇青柳　神戸 足立あい子

難波江の水かみわたる春かせの
すかたを見するきしのあをやき

〇月前柳　淡路 川崎代津子

したり枝の柳のかみもまかふなり
月のかゝみのかけおぼろにて

〇春の曙　東京 土田八重子

ひとときは月と花とのはしだてや
ほの〴〵明くる春のあけぼの

〇浦春曙　常陸 岡田萬子

もしほやく煙も添ひてうら〳〵と
霞の浦のはるのあけぼの

、〇春の旅　下野 井上尚子

朝よりのとけき風におくられて
花を友なる旅そうれしき

〇春の夜　備前 谷山千代子

しつか家も月に梅見る春の夜は
たまのうてなにおとらさりけり

、〇川家春月　横濱 鈴木まつ子

のひらかにかけをうつして山里の
春の月よののとかなるかな

〇春の海　越後 岩本よし子

かすみとも浪ともわかす春のたつけしきそみよる眞せのうな原

、、、冬の海邊　日向 岸上はる子



涼みせし夏のおもかげさらになくたゞものすごきこゝ海邊かな

、、、埋火　長崎 坂本たけ子

むせひてはまたかきおこす埋火にはかなくかよふみねのまつ風

〇朝水鳥　北海道 牧　君子

よもすから霜や置きけん水とりのなく音もこほる冬のあさかな

〇早梅薫風　北海道 牧　きみ子

春あさみ吹く風寒きわかやとの
のき端に匂ふ梅のはつはな

、、〇梅を贈るとて　東京 神田けい子

思ひやれにほひにかすむ夕つきを
ひとりなかむる梅の木のもと

〇故郷梅　岡山 小山松枝子

このあさけ初音きゝけりふる郷の
かきねの梅も今かをるらん

〇雪中梅　東京 和田光子

ふりつみて梅のはつ花うつむとも
かをりやいかて雪にかくれん

、、〇同　河内 高野美子

消えのこる雪かと見えし疑ひも
にほひに晴るゝ梅のはつ花

〇同　東京 神田けい子

ふる雪にうづもれなから梅のはな
埋れぬ香こそかせにゝほへれ

、〇同　神戸 足立あさ子

あさ日かけ窓のうめか枝雪とけて
しつくも花の香にゝほひけり

〇同　伯耆 錦織千代子

しろたへのかつきのひまにほゝえめる乙女すかたよ梅のはつ花

詞友

○同　佐賀　光吉たえ子
明日來むとちきりて友はかへりしをその夜梅か枝雪にうもれぬ

○同　佐賀　古川くま子
今朝はしもたれかまつらむしら雪をうすくけはひし紅梅のはな

、、、同　佐賀　永田はき子
中々にうれしかりけり梅かえにつもれるゆきのとけて落つるは

○冬月　東京　白井みれ子
冬かれの木の間もりくるつき影を霜のおくかとおもひけるかな

、、、同　日向　中村ふく子
雪の朝とく起き出て窓押せは軒端のうめは香そまましにける

○同　佐賀　田崎のぶ子
若水をすゞりにうけておほ君の千代をことほくとしのあさかな

○聖上陛下の御製を拜し奉りて　甲府　風間千代子
大君の大みこゝろをかしこみてなほつとめはやくにの御ために

○折にふれて　下野　井上絢子
杵のよや琴のしらへもたえ〲にもの思ひなれは梅こほれきぬ

○同　岩代　菅野和子
空につゝく牧場をひろき庭にして歌に追はるゝ小ひつじのむれ

○同　下總　隆子
きさらきや霜とけすなる畝かけにしら梅にほふふるさとのいへ

○同　下總　川奈部琴柱
うれしさを胸につゝみてかへり來るうめその小道月おほろなり

○同　岩代　岸野常子
淵月夜ことのねやみしたかとのゝなすまくそでに花そみたるゝ

、、、同　東京　加藤まき子
木蓮のはなを白衣のきみと見しはるさめけふるてらのみかきに

○同　磐城　木幡きよ子
春はなほ峰越す雁のかけ見えてすくるつき日のをしまるゝかな

○同　神戸　足立あさ子
水かみのもとの住家はあと絶えて桃のはやしにはるかせそ吹く

、、、集中新年　埼玉　横田すま子
松の月の千代もさかゆくあら海の波にたつなりしとのはつかせ

○うつしゑ　神戸　今西みさを子
麗はしき友の集ひしうつしゑは千代ふるのちのかたみとやせむ

俳句

天賞

日永　神戸　足立ゑい子
日は永うなつたと外す目鏡かな

地賞

梅　下總　瀧口まつ子
梅一本長者邸の名殘かな

人賞

春の日　横須賀　高橋つね子
花ちりていよ〱永き日なりけり

○松原を二すち通ふ春の水　相模　大谷津みね子

○梅さくやお下屋敷を奧女中

○梅折りて拂ひし袖の匂ひ哉　越後　松永　しげ子
○梅散りて雨ふる今日の淋き哉
○梅咲くや拾九の君が琴の音
、、、見て折らぬ心たうとし神の梅　越後　岩本　よし子
、、、綿入を脱で風ひく小春哉
、、、白薔薇の香をかく宵や月おぼろ　大阪　木村　春江子
、、、菜の花に夜は明てあり雉子の聲　岩代　岸野　常子
、、、蝶一つ花の梢に時雨れけり
○梅の月あちらは雨の柳かな
、、、大松の下に風待つ菫かな
○紫に霞むや春の筑波山　常陸　岡田　蔦子
○春の水菫咲く野を流れけり
○美しき桃の落花や雛の袖
○美しき顔並ひけり雛の棚
○まゝ母もひゝなの顔は憎からめ
○春雨や女ばかりの歌がるた
○真帆片帆行くとも見えず春の海
○草餅を賣る掛茶屋や桃の花
○蝶追ふて袖の長きを恨みけり　備前　谷山　千代子
○船唄も長閑なりけり春の海
○汐干狩月に背いて歸りけり
○宵柳のけぶる上なり朧月
、、、雁の音も花になり行く春の暮　磐城　木幡　きよ子
、、、笠に掛け渡る浮世は丸木橋
、、、弱々と見せて柳の強さかな
○春寒し病後の朝の化粧かな　播磨　横田　春枝子
、、、梅の花桃のかはりに雛の前
○朧月みがいて見たき花の宵
○短冊を流しやりけり春の水　能登　栗倉　菫子

○のどかさや眠る胡蝶に春の風
○茶道具をならべて見るや春の宵
○ねむる兒を守り顔なる三毛の猫　東京　高橋　珍子
、、、十疊に主人まつ間の夜寒哉
○玉水のおとしづかなり春の宵
、、、春雨に野路きえて行く馬の鈴　朝鮮　原野　蝶子
○春雨や客の來て漸く笑ひ種　神戸　足立　あさ子
、、、朧氣に咄し聞きけり春の宵
、、、我もまた近くこそあらめ霞む人
○春風の手綱もとらぬ馬の上
○猿の背の袖無し赤し春の風
○手洗ふて見直しに行く接木哉
○春雨や雀の眠る軒の竹　信濃　井口　きみ子
○吹かれて靜かな月の柳かな
、、、自から其香の高し神のうめ
、、、追羽子や仲むつまじき姉妹
、、、家土産や手おりかれつる桃の枝　日向　中村　ふく子
、、、桃が枝をたづぬる里の節句哉
○古き世の質素見えけり紙雛　神戸　足立　ゑい子
○行雁に何所で逢しぞ初乙鳥
、、、四方の山昨日にはにぬ姿かな　下總　瀧口　まつ子
○年たつやちり一つなき神の庭
○月おぼろ花嫁殊に美くしき
○うかうかと初正月をくらしけり
○田芹つむ乙女の袖に春の風
○急かはや梅の名所は小牛道
、、、ひと枝もまたこひかぬる梅の花　松山　上原　のふ子
、、、月と日のいのちをきざむ時計哉
、、、年たちて人の身にしむ寒のいり

誌友

ヽヽヽ初咲きや先づ一花は栞かな　京都　芝田すみれ子
ヽヽヽ村里や田圃遠く霞降る
ヽヽヽ春の夜や嫁入道具通りけり
○やさしみの眼にこもれる雛かな　越後　大石ます子
ヽヽヽ傘見ゆる垣根や低し春の雨
○夕鐘の聲あわたゞし花の宴　土佐　廣江子
○日は暮れて梅の影ふむ山路哉　東京　豐田とよ子
○二軒家の千菜にあられ降る夜哉
○門くちし漢學塾や梅の花
○夕霞孤村に歸る女工哉　東京　片山はつ子
ヽヽヽいたはしや玉の肌に二日灸
ヽヽヽまゝ事や茶碗に摘ぶ春の水
ヽヽヽ芹摘や流に洗ふ落し櫛
ヽヽヽ雲一朶動きもやらで雪解風
○眉剃つて春寒顔の女哉　東京　本橋つや子
ヽヽヽ行き過ぎてまた見直すや梅の花
ヽヽヽ春の海富士倒まに寫しけり
ヽヽヽ山里や春とも見えぬ峰の雪
ヽヽヽ桃が枝に來て歌ひませ百千鳥
ヽヽヽ木枯やみの虫ばかり散り殘り
○春雨に乳母が昔を聞く夜かな　和歌山　島田千代子
○春雨や青柳けふる京の町　東京　岩瀬ゆき子
○笹舟に胡蝶眠りて流れけり
ヽ○春雨にひもとく去年の日記哉
○朧夜や浪花に下る舟二艘
ヽヽヽうつゝなに騒よとの鐘や朧月
○朝東風に翌あたゝかき胡蝶哉　横須賀　仲野とみ子
ヽヽヽ新らしき菅の小笠や春の雨
ヽヽヽ摘草につひうたゝれの籠枕

ヽヽヽ花實の歸る夕や花の雨
ヽ○鶯の忘れて行きぬ歌一つ　東京　土岐ゆき子
○一い二う三い小猫の覗ふ手毬哉
ヽヽヽ菜の山や菜の花水淺黄
○銅像の松諸共に霞みけり
○春雨や大原女急ぐ四條橋　横須賀　渡邊雪子
○奥殿に琴の調へや春の月
ヽヽヽ梅咲いて垣の破れを厭ひけり
ヽヽヽ動かすに船端痩する春の海
○伽羅焚くや朧月夜に影香る
○梅が枝の墨繪にうつる窓の月
○鶯の啼く音に知るや旅の春
○新内や廓小路の月朧
○芹をつむ乙女の袖や春の水
ヽヽヽ里川や菜洗ふ娘美しき
○春雨や三世相讀む小傾城　東京　本橋つや子
ヽ○客は皆やの字の帶よ雛の宴
○をとなひし接待しぶりや雛の主
○梅の窓押せばそぼうの月寒し
○春風や京に染めたる振小袖　横須賀　佐藤きみ子
○春風に衣床しき法師哉
ヽヽヽ春風や花の師匠の通ふ道
ヽヽヽ梅見んと杉田に行きて瓢哉
ヽヽヽ玉琴の洩るゝ朧の花の窓
ヽヽヽ春の川長く平に流れけり
ヽヽヽ梅に醉ひ其日樂しく暮にけり
ヽヽヽ門松に幾世榮ゆる君が御代
ヽヽヽ芹を摘む少女の手許水温む
ヽヽヽ鶯や梅より梅へつゞく聲　同

○雛祭る年子の娘二八歳
ヽヽヽ初夢や夢の浮世のかり枕
ヽヽヽ鎌倉は古き都や弓始　横須賀　高橋　つれ子
○春の雨思案の果しな寐たりけり
○梅の里柳の里や春の風
○梅百株咲き揃ひけり俳諧寺
○とり出す徒然草や春の雨
○そちも来て歌の友たれ啼蛙
○紅梅やお下屋敷の歌の會
○一二輪梅咲く里の日和哉
ヽヽヽ梅折れば水の月影崩れけり
ヽヽヽ鍼醫者の主留寂し二日灸
ヽヽヽ追羽子や風に吹かるゝ高島田
ヽヽヽ千歳經る松のみどりに春たちぬ
ヽヽヽ萬歳や御簾から洩るゝ笑ひ聲
○岩水にうつるや清き松の影
○梅が香を袂につゝむ旅の人　群馬　竹のふし子
ヽ○旅僧にうぐひすの宿とはれけり
○梅咲くやめぐる小路のせまき哉
○奥様の年始まはりや椿の花
ヽ○なつかしき風のみ通ふ梅の花　松山　上原　のぶ子
ヽ○鶯もなかせて見たしおぼろ月
ヽヽヽ姿の色枯野の冬をいさぎよき
○梨ちるや美き人の逝く宵の雨
ヽ○椎焚いて獲物をほこる毛脛かな　上野　あや子

和歌兼題　四月｛山花／落花　五月｛更花／小野小町　六月｛梅雨／撰螢

投書家に希望

本誌詞藻欄に投稿せらるゝ方は、左の書式によりて撰者に便利を與へられんことを望む

兼題和歌(もしくは短文、新體詩等)
題　府縣名　區郡町村名　姓　名
歌ならば二行に、短文新體詩等も天地をあけて、字のあまりつまらぬやうに願ひたし

右は兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人以上の名を並べることなきやうに願ひたし、用紙は端書にても差支なけれど、相成べくは半紙に認めて、開き封(第四種郵便物として)にておくらるれば殊によし、

投書はすべて女子に限り、以上の希望も、要するに女子らしき投書の仕方は所謂書生流にあらざるを、其の人柄とゝもに採りたきなり、

新刊紹介

六合雜誌　第三百十四號　東京　ゆにてりあん弘道會
女子文壇　第二卷第二號　同　女子文壇社
婦人と子供　第七卷第二號　同　フレーベル會
週報　每號　同　櫻楓會
日本の家庭　第五卷第二號　同　同文館
婦人世界　第二卷第二號　同　實業之日本社
日本婦人　第九年第二號　同　帝國婦人協會
女學世界　第七卷第三號　同　博文館
成功　第十一卷第一號　同　成功雜誌社
中央公論　第廿二年第二號　同　反省社
婦人の仕事　第一卷第一號　同　育成會
國學院雜誌　第十三卷第二號　同　國學院
彝錦　第百七十二號　同　尚絅社
正教要話　第八卷二號　同　教要社
慶應義塾學報　第百十四號　同　慶應義塾
なでしこ　第七年三號　同　大日本女學會
愛國婦人　每號　同　愛國婦人會
婦女新聞　每號　同　婦女新聞社
教育實驗界　第十九年二、三號　同　育成會
つぼ菫　定期增刊　同　女子文壇社
時好　第五卷一號　同　三越吳服店
流行　第四卷一號　同　白木屋
東京經濟雜誌　每號　同　東京經濟雜誌社
婦人世界　第六十八號　大阪　浪華婦人會

定價
一冊　前金貳拾錢
三冊　前金五拾七錢
六冊　前金壹圓拾錢
拾貳冊　前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
半頁三十二行　金八圓
一頁六十四行　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年二月廿五日印刷
明治四十年三月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　濱本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

國光社發行

◎女學校用教科書

文部省檢定濟

阿多廣介
園田竹熊　先生編纂

●女子補習讀本

菊判和綴美本

正價　上二十五錢　下三十錢　送料　各四錢

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二ヶ年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せん爲め編纂せられたるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其材料は家事、家政、女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得、美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを撰擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

川村理助先生著

●高等女學校用　生理衛生新教科書

全（文部省檢定濟）　正價　五十錢　送料　六錢

東京府第一高等女學校教諭　市川源三先生著

●高等女學校用　教育學教科書

全（同）

正價　五十錢　送料　六錢

市川源三、利根川與作兩先生共著

●高等女學校用　國史教科書

全二冊（同）

正價　各五十錢　送料　各六錢

川村理助先生著

●高等女學校用　動物學新教科書

全（同）

正價　五十錢　送料　六錢

川村理助先生著

●高等女學校用　植物學新教科書

全（同）

正價　五十錢　送料　六錢

東京美術學校長　正木直彦先生序文
同　校教授　島田佳矣
同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

女子技藝 編物模樣圖案

全五冊
石版極彩色
大和綴美本

正價　●松の卷　金四拾錢　櫻の卷　▲藤卷各金五拾錢
●菊の卷　●梅の卷　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて畵模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり　從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の樣式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり橫模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畵的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好教科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

女鑑

明治四十年三月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾七年第參號　第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷